屁　振　坂

——柏崎市向陽町・屁振坂遺跡発掘調査報告書——

1996

柏崎市教育委員会

屁　振　坂

――柏崎市向陽町・屁振坂（へふりさか）遺跡発掘調査報告書――

1996

柏崎市教育委員会

序

柏崎平野の南部には、低くてなだらかな丘陵地帯が横たわっています。今では、所々に植林された杉林も見られますが、クリやドングリなどが多い雑木の林が広がっています。このような木々は、縄文時代でもとても重要な食料資源でもありました。

縄文時代というと、野山を獣を追ってかけめぐるたくましい縄文人の姿が思い浮かばれますが、実際はドングリなどの木ノ実や山菜あるいは山芋、そして魚介類が主な食物でした。旧石器時代にはなかった土器が発明され、土器による煮炊きを可能とし、お汁となって煮出された栄養分の摂取が可能となったのが縄文時代であったわけです。

最近、藤橋や横山、そして軽井川といった丘陵内では、縄文時代の遺跡が次々と発見され調査されています。ここに報告する屁振坂遺跡もその一つですが、周辺を取り巻く林では、秋に多くのヤマグリが実っていました。縄文時代の人たちも、秋に収穫されたクリやドングリを調理して食べながら、冬を越し、春を待っていたであろうその姿を思い浮かべずにはいられません。

本報告書は、市内向陽町において行われました団地の造成工事にともない、事前に実施しました発掘調査の記録です。調査は、前後に３度の水害がありましたが、期間中は比較的天候にも恵まれ、無事終了することができました。調査では、小さないながら縄文時代のムラの跡が発見されましたが、私たちの祖先の歴史を知る上で極めて貴重なさまざまな事実を教えてくれました。ささやかではありますが、調査の成果を報告する本書が、地域の歴史を理解する一助となり、遺跡保護のため活用されるとすれば、この上ない幸いであります。

また、このように調査を無事に終了できましたことには、事業主体でもあります株式会社八木不動産商事、ならびに施行責任者となられた株式会社植木組のご理解とご協力の賜物と思っております。また、幾日も続く真夏日の中、最後まで調査に参加されました柏崎市シルバー人材センターの会員の皆様および調査員各位、そして本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成８年３月

柏崎市教育委員会
教育長　相　澤　陽　一

例　　言

1．本報告書は、新潟県柏崎市向陽町1915番地１ほかに所在する屁振坂遺跡の発掘調査の記録である。
2．本事業は、向陽団地第４次造成事業に伴い株式会社八木不動産商事から柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が事業主体となって発掘調査を実施したものである。
3．発掘調査は、平成７年７月18日から同年８月９日まで現場作業を実施し、その後平成８年３月31日まで整理作業及び報告書作成作業を行った。現場作業は、柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けて実施し、整理・報告書作成作業は、柏崎市西本町３丁目喬柏園内社会教育課遺跡調査室において行った。また現場作業は、社会教育課職員及び遺跡調査室のスタッフを調査員とし、整理・報告書作成作業は、職員（学芸員）を中心に、遺跡調査室のスタッフで行った。
4．発掘調査によって出土した遺物は、注記に際し遺跡名を「ヘップリ」と略し、グリッド名や遺構名および層序等を併記した。
5．本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（社会教育課遺跡調査室）が保管・管理している。
6．本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、調査担当の品田が編集もあわせて行った。
　第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅴ章第１節 …… 品田高志
　第Ⅳ章・第Ⅴ章第２節 …… 中野　純
7．本書掲載の図面類の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約７度である。
8．発掘調査から本書作成までは、事業主体である㈱八木不動産商事並びに工事施行責任者㈱植木組からは数多くのご協力とご理解を賜った。またこのほかにも多大なご助力とご協力並びにご教示等を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。（五十音順・敬称略）
　飯塚博和・石坂圭介・上田典男・斎田美穂子・佐藤雅一・田中耕作・寺崎裕助・三井田忠明・柏崎市立博物館・柏崎市立図書館・新潟県教育庁文化行政課

調査体制

調査主体　柏崎市教育委員会　教育長　渡辺恒弘（～平成７年10月29日）
　　相澤陽一（平成７年10月30日～）
総　　括　西川辰二（社会教育課長）
管　　理　坂口達也（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱）
庶　　務　宮山　均（社会教育課社会教育係主査）
調査担当　品田高志（社会教育課文化振興係主査学芸員）
　　中野　純（社会教育課文化振興係学芸員）
調 査 員　斎藤幸恵（社会教育課文化振興係学芸員）
　　渡辺富夫（社会教育課文化振興係嘱託）
　　帆刈敏子（社会教育課文化振興係嘱託）
　　村山英子（社会教育課文化振興係嘱託）
　　黒崎和子（社会教育課文化振興係遺跡調査室）
　　堀　幸子（社会教育課文化振興係遺跡調査室）
現場作業スタッフ　相崎与吉・井原一三・植木政栄・大図朝谷・柴野修一・須田哲夫・高橋孝信・西巻徳一・野村　直・本間嘉一・布施達栄・山崎忠吉・渡辺寅之丞・大橋　勇（柏崎市シルバー人材センター会員）
整理作業スタッフ　竹井　一・萩野しげ子・赤沢フミ・樋口昭子・高塩加代子・伊藤啓雄（遺跡調査室）

目　　次

Ⅰ　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1
2　発掘調査の経過 …… 2

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 3

1　地理的環境と遺跡の立地 …… 3
1）柏崎平野概観　　2）平野南部丘陵と遺跡の立地
2　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 4

Ⅲ　遺跡と遺構 …… 7

1　遺跡と調査区 …… 7
1）現状と層序　　2）調査区の設定とグリッドの配置
2　遺構の分布と配置 …… 8
3　遺構各説 …… 9
1）　住居跡とピット（柱穴）　　2）　土坑・土壙
3）　廃棄場　　4）　焼土坑

Ⅳ　出 土 遺 物 …… 17

1　縄文土器 …… 17
2　石器類 …… 18

Ⅴ　総　　括 …… 19

1　屈振坂縄文集落とその性格 …… 19
2　出土土器の編年的位置付けと他地域との関係 …… 29

<引用参考文献> …… 38

報告書抄録 …… 巻末

図　版　目　次

図　　面

図版１　屁振坂遺跡と周辺の旧地形　１：4,000
図版２　発掘調査区とグリッドの配置図　１：1,000
図版３　屁振坂遺跡遺構全体図　１：200
図版４　推定住居跡配置図　１：200
図版５　遺構個別図１（ＳＩ－107・142・158）　１：60
図版６　遺構個別図２（ＳＩ－79・108）　１：60
図版７　遺構個別図３（ＳＩ－126・161・141・ＳＫ－118）　１：60
図版８　遺構個別図４（ＳＩ－159a・159b・98・99・ＳＫ－140）　１：40　１：60
図版９　遺構個別図５（ＳＫ－56）　1:40
図版10　遺構個別図６（ＳＸ－57）　1:100
図版11　遺構個別図７（焼土坑：ＳＫ－51～55）　１：40
図版12　出土遺物１
図版13　出土遺物２
図版14　出土遺物３

写　　真

図版15　屁振坂遺跡周辺の航空写真（1964年10月撮影）
図版16　調査１　ａ．調査着手時の遺跡全景（西から）　ｂ．表土剝ぎとジョレンかけ（南西から）
図版17　調査２　ａ．縄文柱穴（ピット）の発掘作業（北東から）　ｂ．木根処理（東から）
図版18　遺跡１　ａ．屁振坂遺跡遠景（東から）　ｂ．屁振坂遺跡近景（北東から）
図版19　遺跡２　ａ．調査区近景（南西から）　ｂ．調査区近景（南から）
図版20　遺跡３　ａ．調査区近景（西から）　ｂ．調査区近景（南東から）
図版21　遺跡４　ａ．調査区近景（南から）　ｂ．調査区近景（南から）
図版22　遺跡５　ａ．調査区西半部（南から）　ｂ．調査区東半部（南から）
図版23　遺跡６　ａ．調査区中央部（ＳＩ－107周辺）　ｂ．調査区中央部（ＳＩ－98・99周辺）
図版24　住居跡１　ａ．ＳＩ－79住居跡（南から）　ｂ．ＳＩ－79住居跡（南西から）
図版25　住居跡２　ａ．ＳＩ－98・99住居跡（南東から）　ｂ．ＳＩ－98・99住居跡（）
図版26　住居跡３　ａ．ＳＩ－107住居跡（南東から）　ｂ．ＳＩ－107住居跡（南から）
図版27　住居跡４　ａ．ＳＩ－108住居跡（南東から）　ｂ．ＳＩ－108住居跡（西から）
図版28　住居跡５　ａ．ＳＩ－126・161住居跡（南から）　ｂ．ＳＩ－126・161住居跡（南西から）
図版29　住居跡６　ａ．ＳＩ－141住居跡（南東から）　ｂ．ＳＩ－141住居跡（南西から）
図版30　住居跡７　ａ．ＳＩ－142住居跡（南から）　ｂ．ＳＩ－142住居跡（西から）
図版31　住居跡８　ａ．ＳＩ－159ａ・159ｂ住居跡（南東から）
ｂ．ＳＩ－159ａ・159ｂ住居跡（南西から）
図版32　土坑１　ＳＫ－140土坑
図版33　土坑２　ＳＫ－118土坑
図版34　土坑３　ＳＫ－56土坑
図版35　廃棄場　ＳＸ－57廃棄場
図版36　柱穴（ピット）　ａ．ＳＫｐ－63　ｂ．ＳＫｐ－58　ｃ．ＳＫｐ－66
ｄ．ＳＫｐ－145　ｅ．ＳＫｐ－96・80　ｆ．ＳＫｐ－146
図版37　焼土坑１　ＳＫ－51焼土坑
図版38　焼土坑２　ＳＫ－52焼土坑
図版39　焼土坑３　ＳＫ－53焼土坑
図版40　焼土坑４　ＳＫ－54焼土坑
図版41　焼土坑５　ＳＫ－55焼土坑
図版42　出土遺物１
図版43　出土遺物２
図版44　出土遺物３

Ⅰ　序　　説

1　調査に至る経緯

屁振坂遺跡は、現在では柏崎市向陽町1915番地１ほかに所在する遺跡である。しかし、向陽団地造成以前は、大字軽井川地籍にあり、小字名が屁振坂であったことから、遺跡名を「屁振坂遺跡」とした。

当該地周辺における埋蔵文化財包蔵地等の所在が明らかにされたのはそれほど古くなく、現在の向陽団地が造成されるまでは遺跡の空白地帯であった。昭和58年、柏崎市教育委員会（以下「市教委」とする）は、（株）八木不動産商事からの依頼を受け、向陽団地の第２次造成区域内において現地踏査を実施したが、この際に藤橋向山の塚が確認されたことが始まりとなった。しかし、当時は開発区域全域が山林であったことから、塚以外の遺物散布地は明確にすることができず、現地踏査の結果として藤橋向山の塚の所在のみが報告されていた。ところが、昭和59年に実施された藤橋向山の塚の発掘調査時において、塚の調査区域からわずかながら縄文土器・石器類のほか鉄滓などが検出されてたことから［柏崎市教委1986］、当該地一帯においても未周知の縄文遺跡や古代の製鉄関連遺跡が存在する可能性を知らしめることとなった。その後、当該地に北接する横山地区では、平成４年に縄文集落や製鉄関連遺跡および須恵器窯など５件の遺跡が含まれる横山東遺跡群が発見され、さらに南側の藤橋・軽井川地区では平成５年に縄文時代・古代・中世の遺跡15件におよぶ藤橋東遺跡群が発見されることとなった。このようにして、昭和58年当時において、ほとんど実態の明かでなかった当該地―柏崎南部の中位段丘地帯―から次々と遺跡が発見されるにおよび、従来の遺跡分布空白域の状況は平成４～５年に至って一変することとなる。

平成５年の後半に至るころ、（株）八木不動産商事から市教委に対し、向陽団地第４次造成事業予定地内における埋蔵文化財包蔵地等についての問い合わせがなされた。このため、市教委では、平成５年12月20日に当該地の現地踏査を実施し地形等の観察を行ったが、当該地の現況が山林であったことから、落ち葉などで地表面の観察ができず、遺物等は表採できなかった。しかし、この屁振坂地内は、地形的にも藤橋東遺跡群や横山東遺跡群ときわめて類似しており、平坦部には縄文遺跡、斜面部には古代の製鉄遺跡等の存在が充分に考えられた。そこで、開発の事前に試掘調査を実施し、当該地における遺跡の有無を確認する必要性が生じたのである。

試掘調査は、平成６年６月17日付けによる八木不動産商事からの調査依頼を受け、日程や調査に向けた諸準備を行った。平成６年11月１日には開発区域内の文化財（遺跡）調査の承諾書を受け取り、山林の伐採が終わったあとの平成７年４月13日と14日の延べ２日間にわたって実施した。試掘調査の結果、縄文時代の柱穴と考えられるピットや中世～近世頃と推定されている焼土坑複数が検出された。調査結果を直ちに県教委へ報告し、「本発掘調査」を実施するようにとの判断を受け、平成７年５月11日に事業者と遺跡の取り扱いに関する協議を行った。協議では、発掘調査区の範囲を設定し、それ以外では慎重工事として工事を進めること、本発掘調査は平成７年７月～８月頃実施することとし、調査費を６月補正予算に計上して準備を進めることで合意した。平成７年５月15日付けで、文化財保護法第57条の２に基づく土木工事等の届出がなされ、６月28日および７月５日には本調査のための協議を両者で行い、最終的な本調査の実施に向けた打ち合わせを行った。そして、本調査着手を平成７年７月12日に設定し、準備を急ぐこととし

た。宅地造成現場は、本調査区域を残して周囲が土取りされ、あたかもピラミッドのようになっていた。

2　発掘調査の経過

平成７年７月５日、天候不順により長引いていた発掘調査が一つ終了したことにより、ようやく屁振坂遺跡の調査準備に入ることができた。発掘調査の着手日を７月12日に設定し、10日までに休憩施設や駐車スペース等のセッティングを行い、11日に器材を搬入して、当日を待った。しかし、11日午後から降り始めた雨は、12日の午後までに136.5㎜に達するかなりの豪雨となった。12日の午前11時には水害対策本部が設置されるほどとなり、発掘調査の初日は延期せざるを得なくなった。次いで設定した17日も、前日の午後から降り始めた雨が、17日午前９時までに138.5㎜に達し、再び水害対策本部が設置される事態となった。発掘調査は、天候の回復した７月18日（火）、２度の水害を経てようやく着手することができた。現場には、シルバー人材センターの有志11名と、調査員等８名が勢揃いし、社会教育課長のあいさつを手始めに、調査にあたっての注意事項等の諸連絡を行い、このあと直ちに発掘作業に着手した。

７月18日の作業は、重機による表土剝ぎと伐採後の木根処理を中心にして実施し、翌19日もこれを継続しながら、グリッドの設定等のため杭打ち作業をあわせて行った。表土剝ぎ作業は、この２日間でおよそ２／３ほどを終了した。遺物も玦状耳飾りの破片なども若干ながら出土しはじめ、19日には縄文前期末～中期初頭頃の土器が出土し、ようやく遺跡の時期が判明した。この２日間の作業は、天候にも恵まれ概して順調であったが、20日からは梅雨末期の大雨が続き、作業の再開は梅雨明けの翌日７月24日となった。

７月24日は、一気に気温が上昇、これまでの低温注意報が嘘のように連日35度を超える猛暑となった。表土剝ぎは、25日に終了し、排土等の転圧などを行って、重機を撤収した。猛暑による遺跡内の乾燥が著しく、遺構確認作業は難航したが、柱穴と考えられるピット群や焼土坑などが検出されてきた。住居等も想定されたが、竪穴式はなく、平地式で構成された集落が予想された。遺構確認作業は、乾燥が著しいこともあって一部不充分な部分があったが、おおむね26日までには終了した。不充分箇所等については、ピンポイントで検出作業を継続することとして、検出遺構の見取り図を作成し、遺構発掘に移行することとした。なお、検出遺構の乾燥防止策として、検出された遺構分布が概して希薄でシートによる面的なおおいでは効率が悪いことから、土嚢によって個々をおおうこととした。

遺構の発掘は、７月27日から本格化した。ます、５基ほどが検出された焼土坑から着手し、半截、土層セクションの写真と図化、完掘までを28日に終了した。この後は、縄文ピット群の発掘作業と、調査区西端の玦状耳飾りが出土したＳＸ－56と、同東端の小規模な土器捨て場（ＳＸ－57）の調査を本格化させた。ＳＸ－56は、31日に磨製石斧が出土している。縄文ピットの発掘は、住居の復元を試みながら進め、８月４日には全てを完掘した。難航していたＳＸ－56とＳＸ－57も本日の作業で完了した。８月４日の作業は、完掘した全景写真撮影のための全体清掃を中心に実施したが、全ての発掘作業が終了した午後、全体及び住居の個別写真等を撮影、最後に記念写真を撮影したあと作業員さんの解散式を行った。

８月７日からは遺構や地形の測量作業に取りかかり、９日には器材の撤収とともに終了した。ここに平成７年７月18日から着手した屁振坂遺跡の発掘調査は、延15日間で現場作業の全てを完了することができた。翌８月10日、調査の終了した発掘現場には、午前７時から24時間に130.5㎜の雨が降り注ぎ、三度の水害に見舞われることとなる。

II　遺跡の位置と環境

1　地理的環境と遺跡の立地

1）　柏崎平野概観

柏崎市は、新潟県のほぼ中央部に位置する人口９万人ほどの小都市であり、行政的な地域区分では中越に属している。この中越地方とは、魚沼郡域の南部と信濃川中流域から柏崎平野を含む北部に大きく区分可能であるが、柏崎平野は北部でも西半部に位置することになる。新潟県には、信濃川や阿賀野川などの大河によって形成された広大な新潟平野（越後平野もしくは蒲原平野）と、関川水系に属する高田平野（頚城平野）といった大きな平野が形成されている。柏崎平野は、これら二大平野とは山地や丘陵による分水嶺によって隔される独立した平野となっている。

柏崎平野は、鯖石川と鵜川を主要河川として形成された臨海沖積平野である。この平野を取り巻く丘陵・山塊とは、東頚城丘陵の一部に相当し、米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を個々の頂点として、鵜川・鯖石川によって東部・中央部・西部に三分される。東部は、北東方向の背斜軸に沿って西山丘陵・曽地丘陵・八石丘陵といった３丘陵が北側から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長鳥川などの鯖石川の支流が南西方向に流路をとっている。中央部の地形は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度をさげ、沖積地に接する北端部には広い中位段丘が形成されている。この中位段丘地帯に屈振坂遺跡が立地する。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊が広がり、海岸部まで張り出して断崖を形成し、低位・中位・高位の各段丘の形成が顕著となっている。沖積平野部の北西面は、日本海の荒波に洗われているが、海岸線に沿って荒浜砂丘・柏崎砂丘が横たわっている。この砂丘から丘陵部に至る沖積地は、砂丘後背地としてかなり湿地性が強い低地となり、鯖石川や鵜川などの河川による自然堤防の形成が顕著である。

2）平野南部丘陵と遺跡の立地

鯖石川と鵜川にはさまれた中間地帯は、平野の南縁に沿って広く中位段丘が形成されている。現在のところ的確な名称を持っていないが、柏崎平野の南部に相当することから、便宜的に「（柏崎平野）南部丘陵」と呼称しておきたい。これらの台地の標高は、おおむね20～30mを計り、周囲の水田面との比高差は、10～15mほどと低平である。南部丘陵の特徴としては、大小の沢によって著しく浸食を受け、台地平坦部が樹枝状をなし、概してその幅が狭いことにある。これらの中で最大の沢を形成した河川が、鵜川の支流となる軽井川である。南部丘陵は、この軽井川によって南北に区分されるが、流れる方向からすれば、中位段丘形成直後における鯖石川の古い河道であった可能性があり、この中位段丘の形成には、鯖石川が運ぶ土砂等が大きく関わっていたことがうかがわれるのである。

屈振坂遺跡は、軽井川下流の右岸に位置し、標高約26m、軽井川の沖積地との比高差はおおよそ20mほどの中位段丘上に立地する。軽井川流域以北における遺跡周辺の地形は、現在では向陽団地を始めとしていくつもの大規模な宅地造成や工業団地造成などがなされ、ほとんど地形の旧状をうかがうことができない。図版１は、昭和39年測図の地形図であるが、これをみると鵜川流域側へは細長い尾根状の地形が延び、当該地の北側や東側にややまとまった平坦地の分布が見られる。本遺跡は、これらの中でも軽井川流域へ

突き出る小丘に立地していたことになる。立地としては、鵜川といった中核的な河川には面せず、その支流を見下ろす位置にある。ただし、鵜川の現河道までの距離は、約2kmと比較的近接し、かつ丘陵内に入り込む立地であるとすることができる。これらの立地は、季節を考慮し、おそらく生業に関わって選地されたと考えられ、本遺跡の性格を見極める上では重要なポイントとなるのではないだろうか。

2　歴史的環境と周辺の遺跡

南部丘陵内における遺跡の分布は、最近に至ってようやくその実態が明らかにされつつある。縄文時代の遺跡としては、十三仏塚遺跡（十三本塚遺跡群：中期初頭～後期前葉）［品田1987・柏崎市教委1991ａ］が以前から著名であったが、最近では横山東遺跡群（前期後半～中期前葉）［柏崎市教委1994］と藤橋東遺跡群（中期初頭～後期中葉）［柏崎市教委1995］が調査され、前期後半から後期前葉における中核的な集落の発見が相次いでいる。古代では、鉄生産関連遺跡の広がりがある［品田1993ｂ・柏崎市教委1995］。また中世では、千古塚遺跡［柏崎市教委1990ａ］や小児石遺跡［柏崎市教委1991ｂ］から墓地遺跡が発見され、最近では田塚山遺跡群において中世の在地寺院が調査されている［柏崎市遺跡調査室編1994］。

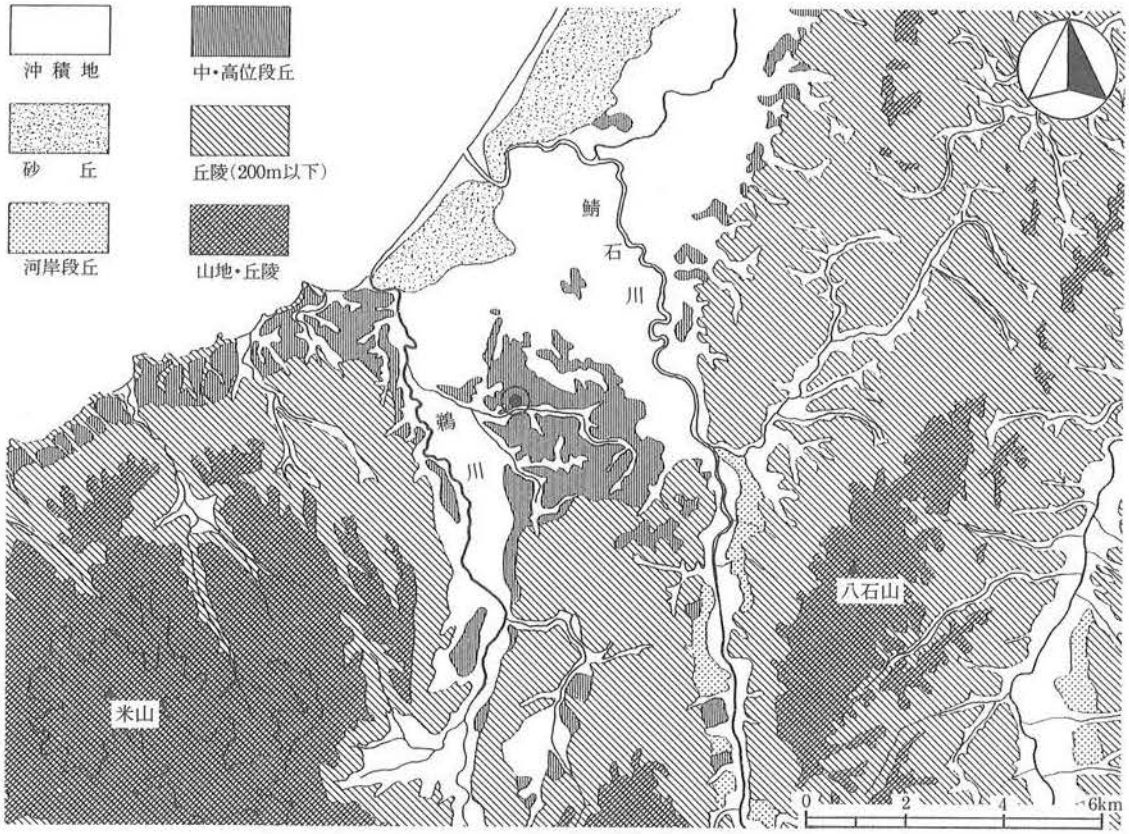
屈振坂遺跡から発見された遺構・遺物は、縄文時代を主体として、中世から近世頃とされる焼土坑5基が検出されている。したがって、屈振坂地内には、大きく2つの時代に遺跡が形成されていたとすることができる。本項では、本遺跡に関わる時代として縄文時代と中世～近世を対象とし、特に遺跡の主体であった縄文時代を中心に周辺の遺跡を概観することとしたい。

縄文時代の遺跡　第2図に示したように、屈振坂遺跡を中心とした半径3kmの範囲に分布する縄文遺跡は、本遺跡を含めて23カ所が現在までに把握されている。遺跡分布の傾向としては、鵜川下流左岸の河岸段丘域と南部丘陵域に大きく分布域を区分できそうであるが、これらは更に2～4遺跡ほどの小群で捉えることができる。ただし、時期的に同時存在している場合とそうではない場合があり、遺跡の存続時期について確実に把握されていない現段階においては、視覚的な意味合いが強くなってしまう。しかし、縄文遺跡＝集落が立地するに適した場所という観点で見れば、おおよその傾向としてうかがうことができ、また陥し穴施設を主体とした狩猟の場などにも分布の傾向が看取される。

ところで、各遺跡についておおまかな時期区分を試みると、前期後半から中期前葉期の遺跡が大半を占める。前期前半までの遺跡は少なく、草創期では神子柴型の丸鑿形石斧が出土した大原遺跡（22）［宇佐

No.	遺跡の名称	時　代・時　期	8	宮山遺跡	中期前葉	16	十三仏塚遺跡	中期前葉～中葉
1	剣野Ｅ遺跡	中期初頭・前葉	9	田塚山遺跡群	前期後半～後期前葉	17	京ヶ峰遺跡	中期前葉
2	剣野Ａ遺跡	前期前半・中期前葉	10	小児石遺跡	前期後葉	18	呑作Ｄ遺跡	後期中葉
3	剣野沢遺跡	晩期後半	11	大宮遺跡	前期後半	19	呑作Ａ遺跡	中期初頭
4	剣野Ｂ遺跡	中期初頭～前葉	12	大沢遺跡	中期前葉	20	原遺跡	中期中葉
5	剣野Ｄ遺跡	後期前葉	13	雨池遺跡	中期前葉	21	辻の内遺跡	前期後葉～中期中葉
6	剣野Ｃ遺跡	晩期中葉	14	屈振坂遺跡	前期末～中期初頭	22	大原遺跡	草創期
7	桐山遺跡	中期前葉・後期中葉	15	十三本塚北遺跡	後期前葉	23	千古塚遺跡	前期後半・中期前葉

第1表　屈振坂遺跡周辺の縄文遺跡地名表



第１図　柏崎平野地形分類図と屁振坂遺跡の位置

第２図　屁振坂遺跡と周辺の縄文時代遺跡

美1987］や、前期前半の土器が若干出土した剣野Ａ遺跡（２）［品田・鈴木1987］が掲げられる程度である。また、中期中葉から後葉の遺跡数も少なく、十三仏塚遺跡（16）［品田1987ａ・柏崎市教委1991］や辻の内遺跡（21）［宇佐美・高橋1987］で多少の土器片が出土している程度であり、現在までのところ中核的な集落は見出されていない。後・晩期の遺跡も少ないが、後期前葉では剣野Ｄ遺跡（５）［岡本1987］や十三本塚北遺跡（15）［柏崎市教委1993］のように中核的な集落が存在している。後期中葉は呑作Ｄ遺跡（18）［柏崎市教委1995ａ］、晩期では剣野Ｃ遺跡（６）［品田1987ｂ］と剣野沢遺跡（３）［中野1995］を掲げることができるが、詳細等は明かでない。

さて、柏崎平野南部の一帯において、最も遺跡数の増加が顕著となっているのが、前述のとおり前期後半から中期前葉の時期である。当該地一帯全ての遺跡が明らかにされていない現状では、多くを語ることはできないが、中核的となり得る集落と、そうではなさそうな集落が存在しそうである。これらの中で、ある程度の規模を有し、広場的な空間を備えた中核的な集落とは、前期後半期では大宮遺跡（11）、中期初頭から前葉期では剣野Ｂ遺跡（４）と十三仏塚遺跡（16）を掲げることができる。これら３遺跡の存続時期については、細かな変遷まで詳細に検討されていないため、連綿と続き継承されているとは断定できないが、大まかな傾向は読み取れよう。つまり、前期後半期では、鵜川に面した南部丘陵側の縁に中核的な集落があり、中期初頭から前葉期では、鵜川下流左岸と南部丘陵でも鯖石川に近い位置にそれぞれ中核的な集落が配されているとすることができる。これらと半径１㎞ほどのところに、竪穴住居や大形建物を伴わず、広場を形成しない集落が点在している様子をうかがうことができるのである。ただし、屁振坂遺跡の位置は、剣野Ｂ遺跡と十三仏塚遺跡のほぼ中間にあり、どちらと密接な関係にあったのかは、未発見遺跡が多いと考えられる現状では留保せざるを得ない。また、中期初頭から前葉期における中核集落の配置は、後期前葉期における剣野Ｄ遺跡と十三本塚北遺跡においても継続しており、領域的な問題が内包されている可能性があるが、今後の課題としておきたい。

なお、図で示された範囲内における縄文遺跡23カ所のうち、前期後半期から中期前葉期の遺物が出土した遺跡は16カ所を数え、全体に占める割合も70％に達する。この数字は、極めて高いとせざるを得ず、該期以外の時期とは、大きく隔たった状況にあることは確かである。しかし、遺跡数の増加は、当時の人口増とイコールで評価できるとすることは早計となろう。この課題については、屁振坂遺跡における集落の意味付けとも関わる事項であるため、第Ⅴ章において若干の検討を試みることとしたい。

中世～近世　当該期に関わる遺構は、屁振坂遺跡の場合では焼土坑ということになる。この焼土坑の機能については、明確にされているとは言いがたいが、出土するものが木炭であり、壁が焼けていることを単純に評価すれば、燃料としての木炭生産であった可能性が高い。とすれば、木炭の原料となる雑木等の伐採や山野への立ち入りのための権利等の問題が関わってくる。屁振坂周辺は、半田・横山・藤橋・軽井川の大字界が接する土地であり、地形等による明瞭な境界線がないことから、なんらかの境界区分の目安が必要となるのではないだろうか。該期の遺跡としては当該地唯一の藤橋向山の塚（図版１）［柏崎市教委1986］は、このような境界区分の目安と言った意味が込められていたのかも知れない。屁振坂は、大字軽井川地籍であり、軽井川の集落との関わりが想定できよう。

ところで、当該地の小字名は「屁振坂（へふりさか）」であるが、これは「火を振る坂＝火振坂（ひふりさか）」が転化したものといわれている。その意味は、松明等によって火を振って合図を送っていたことだと言われている。合図の送り先は、屁振坂から軽井川の沢沿いの真東に位置する安田城と考えることが最も妥当である。当該地が、軽井川地籍であることについて示唆的な地名であるとすることができよう。

III　遺跡と遺構

1　遺跡と調査区

1）　現状と層序

屍振坂遺跡は、柏崎市大字軽井川字屍振坂地内、現在の柏崎市向陽町1915番地１ほかに所在する。今回の宅地開発の対象となった区域は、小字名「屍振坂」のほぼ全域に相当し、その面積は25,263.39㎡である。試掘調査の結果、本調査の対象となった範囲は、おおむね30m四方、面積1,092㎡である。当該地の現状は、向陽団地として造成された住宅地に隣接した山林であったが、地形的には中位段丘に相当する。しかし、東側には比高差20mほどまで浸食を受けた沢が入り込み（字西ノ沢）、南側には試掘調査段階に古代の鉄生産関連遺跡の存在を想定した小規模な沢が形成されるなど、かなり浸食を受けている。中位段丘本体とは、北側でややくびれつつ接続するが、現状では尾根状を呈した小丘となっている。この小丘の規模は、裾付近で東西150m、南北180mほどであるが、縄文時代の集落は上部における30m四方ほどの平坦部に営まれていた。

本遺跡の基本層序は、調査区でも斜面をやや下った廃棄場の調査区壁（A～B－5＋7mライン）では、第Ⅰ層：腐葉土層（現表土）、第Ⅱ層：褐色土層、第Ⅲ層：暗褐色土層、第Ⅳ層：地山層となる（図版10参照）。しかし、試掘調査段階において確認した第８トレンチ南壁（本発掘調査B－４グリッド杭付近に相当）の基本層序は、第Ⅰ層：腐葉土層（現表土）、第Ⅱ層：にぶい黄褐色土、第Ⅲ層：黄褐色地山層であった。両者を比較した場合、斜面下方では土層の色調が褐色や暗褐色を呈し、かなり黒色化するが、上部の平坦地では暗色化が顕著でなく、地山の色調に近くなっていた。遺構が主に分布していた台地平坦部における遺物包含層が、地山土に近い色調であったことは、遺構内に充満する覆土にもかなりの影響を与え、遺構プラン確認をかなり難しくした。遺物包含層は、B－４グリッド杭付近の層序では第Ⅱ層が該当する。廃棄場においては、第Ⅲ層と第Ⅳ層の中間に設定された廃棄場の第１層と第２層から遺物が出土していることから、この２枚の層が遺物包含層と考えられる。両者の対比については、色調と細分された層位が一致しないことから、単純な対比は難しい。しかし、斜面下方における黒色化の程度が高いとした場合、B－４グリッド杭付近の第Ⅱ層と廃棄場の第１・２層がおおむね対応するものと判断したい。

2）　調査区の設定とグリッドの配置（図版２）

本発掘調査の範囲については、試掘調査結果に基づき遺構が検出された範囲、およびこれと連続した平坦地を原則とすることとした。実際には、試掘トレンチの配置図と工事用の地形測量図を合成し、遺構位置から一定の余裕を見て一辺40mとした。これ以外の開発区域については、工事を先行して実施することとしたため、更に安全のため幅を設けた。発掘調査着手段階では、四方全てが土取りされて、ピラミッド状をなしていた。実際の発掘範囲は、四周が土取りした法面であることから、安全のために幅３mほどの縁を残して調査することとしたため、実際の調査区は33m×37mほどとなった。

グリッドは、調査区にあわせて任意に設定することとし、大グリッドは10m四方、小グリッドは２m四方とした。大グリッドは、南西－北東ラインを南東側からA・B・C‥‥のアルファベットで、南東―北

西ラインを算用数字の１・２・３……で標記することとし、グリッド名は西側コーナーの交点（杭）で示した。南西－北東ラインは、真北から東へ56度振れる方位となった。小グリッドは、大グリッドを２ｍで分割し、25コマ設定した（図版２参照）。

なお、今回は国家座標軸によるグリッドが組めなかったが、施行責任者である㈱植木組の協力を得て、各グリッドの座標を測量した。参考までに以下に記しておく。

Ａ－２グリッド杭：Ｘ＝ 73,208　Ｙ＝608,871
Ａ－５グリッド杭：Ｘ＝ 89,238　Ｙ＝634,208
Ａ－５＋ 7.2m杭：Ｘ＝ 93,088　Ｙ＝640,296
Ｃ－２グリッド杭：Ｘ＝ 90,076　Ｙ＝598,217
Ｄ－５グリッド杭：Ｘ＝114,558　Ｙ＝618,223

2　遺構の分布と配置

1）　検出遺構の概要

屁振坂遺跡から発見された遺構は、縄文時代では柱穴と考えるピットなど75基、土坑５基、炉跡と考えられる焼土遺構１基、土器などが廃棄されていた廃棄場１件のあわせて82基となる。また、中世から近世の所産と考えられる焼土坑５基が検出され、本遺跡からは合計87基の遺構を見出すことができた。これら以外には、腐葉土が詰まっていたり、また完全に埋まり切れていない幅の狭い溝跡数条検出されたが、近代から現代の所産と判断し、今回は調査対象から除外した。以下に、時代別に遺構の概要をまとめておきたい。

縄文時代　縄文時代の遺構は、土坑とピットが大半を占め、竪穴式となる住居跡は検出されなかった。遺構の分布状況については、図版３に掲げたとおりで、ピットや土坑が散漫に分布しているといった状況であった。しかも当該時代の遺構数は、すべて合わせても82基であり、遺跡としてはかなり小さな規模とせざるを得ない。遺構配置は、墓坑と考えられる土坑が西側において１基、また調査区西端では不整形な土坑１基も検出された。本遺跡の大半を占めるピットは、尾根筋にあたる頂部域から東側斜面にかけて主に分布し、北西部や南部ではほとんど検出されなかった。小規模な廃棄場と考えられる範囲は、調査区の東端部に存在し、緩斜面がやや急となる位置にある。遺物出土量は概して少なく、土器などは細片が多い。したがって、一般的に土器捨て場と表現されるまでの形成には至っていなかった。このように見てくると、本遺跡の意義を余り高く評価できなくなるのだが、これら遺構が台地に穿たれた意味、あるいは本遺跡の性格を考えて、正しく評価していく必要があろう。

本遺跡から検出された遺構の大多数を占めるピットの意味は、小さいながらも柱穴と判断せざるを得ない。柱穴は、当時における住居を建築する際には必ず必要な基本的な要素である。確かに発見された遺物は少ない。しかし、小規模ながら廃棄場を形成していること、墓坑と考えられる土坑が１基確認されたこと、柱穴と考えられるピットが確認されただけでも75基にのぼることなどは、集落を想定可能ならしむるものである。これらの点を積極的に評価し、住居復元を最大限に試みた結果が、図版４に示した住居の配置図である。一部重複したものも含めて、推定される住居の数は、計12棟となる。前述したとおり、遺構覆土と地山層との峻別が難しく、完全に全てを検出できていないとすれば更に数棟の存在は想定でき、最大15棟には達する可能性を秘めている。この想定を前提とできれば、本遺跡は決して小規模な集落とはな

らないのである。屁振坂遺跡から確認された縄文時代の遺構は、住居等集落を構成するものであるということを前提として、報告していくこととする。

そこで、確認されたピットを柱穴と仮定し、各柱穴の規模や深度及び覆土並びに配置から住居を想定した場合、前述のごとく12棟が把握された。住居の平面プランや上屋構造等は不詳とせざるを得ないが、柱穴の配置は１棟を除き五角形を原則としている状況が看取される。各住居の配置は、尾根筋部よりやや東側に７棟が密集し、西側に１棟、南西側に２棟、北側にも１ないし２棟が想定できる。これらを住居とした場合、全体の集落構成の特徴としては、広場を持たないあるいは意識した配置となっていないことがまず掲げられよう。また、一部に重複もしくは一部の柱穴を再利用して住居を建てていることから、全てが同時存在ではないことが判る。状況からすれば、少なくとも４ないし５段階はあったと考えられ、同時存在した住居は３棟前後が想定される。

中世～近世　当該期に区分される遺構は、焼土坑５基である。しかしながら、土坑内から検出された遺物は皆無であり、具体的な時期を知ることはできなかった。したがって、当該焼土坑の時期について本報告では、中世～近世としているが、藤橋東遺跡群の網田瀬Ｂ遺跡西区で検出された焼土坑のように、古代の可能性を持つものがあり、本遺跡例についても古代に遡る可能性を持っているとせざるを得ない。

焼土坑の分布は、調査区の西側に２基、南側に２基、北辺に１基の５基が検出されたが、これらを各々Ａ群、Ｂ群、Ｃ群として群別したい。前２者のＡ群とＢ群の事例を見ると、浅い土坑とやや深い土坑がセットをなしていることが判る。Ｃ群は１基のみであるが、調査区外に１基が想定できそうである。

3　遺構各説

本遺跡から検出された遺構は、時期的には縄文時代と中世～近世の遺構ということになる。中世～近世の遺構とは、前述のごとく焼土坑５基のみであることから、本節では種別により遺構説明を行うこととし、以下において住居跡とピット（柱穴）、土坑、廃棄場、焼土坑に区分して概要を述べたい。なお、各遺構の種別を示す記号については、住居：ＳＩ、ピット（柱穴）：ＳＫｐ、土坑：ＳＫ、廃棄場：ＳＸ、焼土坑：ＳＫ、炉跡：ＳＲである。

1）　住居跡とピット（柱穴）

本遺跡から検出された遺構は、ピットを主体に若干の土坑で構成されている。これらを単純に図示し、互いに有機的な関係を見出さないとすれば、図版３に示したとおりピット・土坑が散漫に分布するだけの遺跡となってしまう。しかし、確認されたピットには明らかに柱を建てたと考えられるものがあり、廃棄場や墓坑と考えられる土坑の存在など、住居を伴う集落であることは確かである。今回の報告にあたっては、これらの調査結果を積極的に評価し、検出されたピットを柱穴と捉え、でき得る限り住居に伴うものとして住居跡を推定復元することとした。その結果は、図版４に示したとおりである。推定復元された住居は、柱穴のみで構成され、炉跡も１基が可能性を持っている程度でほとんどないに等しい。また、地山面までの掘り込みがないことからいわゆる平地式の住居を想定しているが、床も検出されていないなど、住居と認定できる物証のような具体的な根拠は乏しい。したがって、ここで住居跡としたものは、あくまでも推定されたものであり、断定すると言うことはかなり難しい。しかし、住居の有無は、集落と考える本遺跡の性格を大きく左右する。今後の課題を多く残すことになるが、縄文社会理解に向けた一つの仮定

として住居を積極的に認定し、以下にその概要を記すこととしたい。

ＳＩ－79住居跡（図版６・23）

本住居跡は、調査区内のほぼ中央に位置し、Ｃ－３グリッド北半から検出された。柱穴は、ＳＫｐ－63・66・67・68・69の５基が野球のベースをやや歪めたプランで配置される。遺構確認段階では住居の形態（平面プラン）や柱穴数などの見当が不明だったこともあって、ＳＫｐ－73を加えた６本柱：六角形を想定していたが、最終的にはＳＫｐ－73をＳＩ－108の柱穴と判断し、５本柱の住居と推定した。柱穴の配置から推定される入口は、63－69の大きく開口した辺が相当すると判断される。この場合の主軸は、Ｎ－162°－Ｗを指向する。本遺跡で推定復元された住居のほとんどは、入り口側と判断される方位が東から南にかけてを指向しているが、本住居のみ南よりやや西側を指向していた。住居内の施設である炉跡や床面などはまったく検出されなかった。床面が検出されなかったことにより、本住居の規模を明らかにできないが、柱穴間で示せば、間口が４ｍ、奥行き3.5mほどとなる。柱穴の規模は、68を除いた４本が30～40cm代と本遺跡では大きい部類に入る。ただし、深度については、30cmを超えるものが66と69の２本だけで、ほかは20cmに満たなかった。これら柱穴の覆土は、すべて褐色土であり、覆土内には木炭粒が含まれていたが、69は特に多かった。遺物については、63から細片となった縄文土器１個体２片が出土している。胎土は茶褐色で小粒砂を若干含むが、焼成は悪く、文様も摩滅等により不明である。所属時期については、細片のため明らかにできない。ただし、ＳＫ－70・71土坑については、その位置から本住居と関連する可能性があり、ＳＫ－71から出土した土器群の中期初頭を、本住居の時期と一応想定しておきたい。

ＳＩ－98住居跡（図版８・24）

本住居跡は、調査区の中央部からやや東によったところに位置し、グリッドではＢ－３からＣ－３にわたって検出された。柱穴は、ＳＫｐ－83・84・85ａ・88・89の５基で、平面プランはＳＩ－161住居跡とかなり近似した形態を呈している。85ａ－88を間口とすれば、主軸はＮ－123°－Ｅを指向する。その規模は、柱穴間で測れば間口で2.8m、奥行き2.8mとなる。床面は検出されていない。また炉跡とは、焼けて赤変していた91が相当するものと考えられるが、91についてはその位置からＳＩ－99住居跡にも関わることが推量される。柱穴の規模は、直径が30cm前後のもので占められる。深度は、最も浅い85ａで14cmであるが、おおむね20cm前後から25cmほどで差異は顕著でない。柱穴の覆土は、茶褐色土・褐色土がそれぞれ１基あるが、残りの３基は暗褐色土であった。覆土内には木炭粒が含まれているが、遺物が出土した89においては特にその量が多かった。遺物は、縄文土器片が２個体６片ほどが出土している（図版□－□）。時期的には第II群土器に含まれることから、中期初頭に比定できる。本住居跡の時期についても、遺物量が本遺跡では多いほうであることから、おおむね縄文土器の時期として差し支えないであろう。

なお、本住居の柱穴ＳＫｐ－89は、ＳＩ－99住居跡の柱穴（ＳＫｐ－90）と重複し、これより古いことが確認されいる。間口の位置がほぼ同じであり、炉跡も継承されている可能性が高いことから、時期的には大きな隔たりはないものと判断されることから、ＳＩ－99住居跡は、ＳＩ－98住居跡の建て替え住居の可能性が高いものと考えられる。

ＳＩ－99住居跡（図版８・24）

本住居跡は、ＳＩ－98住居跡と重複し、ほぼ同じ位置に検出された。柱穴は、ＳＫｐ－81・82・85ｂ・87・90の５基である。平面プランは、左右の柱穴間の距離が大きく異なり、かなり崩れた五角形を呈している。85ｂ－87を間口とした場合、主軸方位は、Ｎ－122°－Ｅを指向しており、ＳＩ－98住居跡とほぼ同じ方位をとっている。柱の配置からみた住居の規模は、間口で2.8m、奥行き3.0mを測る。床面は検出

されていない。ＳＲ－91が炉跡とすれば、住居が緩斜面に構築され、低いところに炉跡が位置することから、上方では若干の表土を削り、下方は表土が残されて床となり、その面において炉が設定された可能性が高い。地山面に検出されたＳＲ－91の焼土化が顕著でないことからも推量されるが、このような床面については、前述のＳＩ－98住居跡についても同様であったと考えられる。柱穴の規模は、81が直径30cm前後とやや大きいものの、ほかは20cm前後からこれに満たないもので占められ、概して細い柱で建築されていたことがうかがわれるが、深度もこれと対応するかのように全てが20cm以下であった。柱穴の覆土は、81が褐色土であったが、82は黒褐色土で、ほかが暗褐色土と概して黒色化した覆土となっている。覆土中の木炭粒の含有は少なかった。遺物は、81から石器の剝片が出土したのみで、時期等を峻別できないが、ＳＩ－98住居と大きな隔たりを想定しなければ、ＳＩ－98住居跡の後続しつつおおむね中期初頭期の範囲に所属するものと考えられる。

ＳＩ－107住居跡（図版５・25）

本住居跡は、本遺跡では最も高い位置に構築されていたもので、Ｃ－３グリッド杭付近から検出された。柱穴は、ＳＫｐ－58・59・100・101・102の５基で、かなり整った野球ベース状のプランをなしている。住居の規模は、101－102間を間口とすれば、間口3.3m、奥行き3.5mを測り、主軸方位は、Ｎ－95°－Ｅを指向する。床面及び炉跡は検出されていない。柱穴の規模は、全ての直径が30cm以下であり、25cm前後のものとなっている。深度は、斜面上方にある58・59が30cmを超えるものの、同レベルの100が20.5cm、下方に位置する101・102は10cmに満たないものであった。覆土は、褐色土から暗褐色土のもので、土色そのものは、ほかの住居より概して明色を呈していた。覆土内における木炭粒の含有は概して少なかった。遺物は、58と101から縄文土器が出土しているが、すべて細片のため、時期等を特定することはできない。

ＳＩ－108住居跡（図版６・26）

本住居跡は、調査区内のほぼ中央部にあたるＣ－３グリッドに位置し、住居が最も密集した区域内に存在する。柱穴は、ＳＫｐ－73・74・75・76・106の５基である。住居は、76－106が間口と考えられるが、規模としては間口4.2m、奥行き2.7mとなり、奥行きがかなり狭くなっている。主軸方位は、Ｎ－113°－Ｅを指向する。床面及び炉跡はまったく検出できなかった。柱穴の規模は、20cm前後のものが２基、30cm前後のものが２基、40cm前後のものが１基とかなり不揃いとなっている。柱穴の深度は、20cm前後から未満のもので占められ、概して浅い。柱穴の覆土も、暗茶褐色土・明褐色土・暗褐色土とバラエティーが認められる。覆土に含まれる木炭粒は概して少なかった。遺物は、76と106から各々１点の縄文土器細片が出土している。しかし、摩滅が著しく、文様等も明かでないことから、時期を特定することはできない。

ＳＩ－126住居跡（図版７・27）

調査区の中央からやや北寄りに位置し、Ｃ－３グリッドからＤ－３グリッドにわたって検出され、ＳＩ－161住居跡と重複する。本住居に伴う柱穴は、ＳＫｐ－110・115・116・117・119・120の６基と考えられる。この６本のうち、ＳＩ－161住居跡と共有する柱穴として119が存在するが、ピット内のテラスが重複の結果と判断される。本住居の平面形は、床面等が確認できなかったため明らかにできなかったが、柱穴の配置がほかの住居とは異なる六角形のプランとなっていることから、基本的には楕円形住居が想定されよう。ただし、入り口部の位置はよく判らない。住居の規模は、長軸をなす110－115の柱間で4.5m、短軸は116－120の柱間で2.8mを測る。主軸を長軸とすると、Ｎ－132°－Ｅを指向する。柱穴の規模は、110が直径40cmとやや大きいほかは、すべて30cm以下と小さい。深度は、２基が17～18cmのほかは11～13cm内に納まりかなり浅い柱穴で占められている。柱穴の覆土は、土色から見ると一定せず、個々によって

バラエティーがあるが、木炭粒の含有はかなり少なかった。柱穴からの遺物は、115から縄文土器の細片1点が出土しているだけであり、時期等を特定することができない。ただし、ＳＫ－118土坑が本住居の推定プラン内の中央に位置することから、本土坑については一応ＳＩ－126住居に伴うものと考えたい。ＳＫ－118出土土器群は、第Ⅰ群土器に属することから、本住居跡については前期最終末と推定しておきたい。

ＳＩ－161住居跡（図版７・27）

調査区の中央からやや北寄りに位置し、Ｃ－３グリッドからＤ－３グリッドにわたって検出され、ＳＩ－126住居跡と重複している。本住居に伴う柱穴は、ＳＫｐ－109・111・113・114・119の５基で、平面プランはややくずれた五角形を呈している。住居の規模は、109－111の間口で3.0m、奥行き4.5mほどを測る。主軸は、Ｎ－156.5°－Ｅを指向する。柱穴の規模は、直径がすべて30cm以下で、20cmに満たないものが含まれる。深度も、斜面上方に位置する109で17cmを測る以外は10cmほどしかなかった。柱穴の覆土については、褐色土を中心としてややバラエティーを持っており、木炭粒の含有はかなり少ない。遺物は、115から縄文土器細片１点が出土したのみであり、時期等を特定できない。ただし、ＳＩ－126住居跡を本遺跡最古の前期最終末と考えた場合、これと重複する本住居は、中期初頭が想定され、住居の痕跡を残す位置に改めて建築された可能性が考えられるのではないだろうか。

ＳＩ－141住居跡（図版７・28）

調査区内では最も北側に位置し、Ｄ－４グリッドから検出された。本住居については、128・122と121がほぼ直線で並ぶため想定したものだが、本遺跡の住居跡が五角形を基本とすることからすれば、122・125・128と未検出のピット２基により１棟、121・127と未検出のピット３基により１棟の住居が想定されるため、ＳＩ－141住居跡として１棟を推定するにはかなり難しいところがある。一応この地点にも住居が想定されることとして指摘しておくにとどめたい。

ＳＩ－142住居跡（図版５・29）

調査区内では最も東側、緩斜面の縁部分に位置し、Ｂ・Ｃ－４グリッドから検出された。柱穴は、ＳＫｐ－130・131・132・133・134の５基で構成されるが、地形の傾斜による制約を受けたためか奥行きがあまりなく、全体としては長方形プランを呈している。住居の規模は、間口をなす133－134間で3.0m、奥行きは1.6mとなる。主軸の方位は、Ｎ－92°－Ｅを指向し、ほぼ真東を正面としている。柱穴の規模は、20～30cmと小さく、深度も20cmを前後したものとなっている。覆土は、暗褐色～褐色土を基本とし、木炭粒を少量含むものである。遺物は、130から礫が出土したのみで、時期等は特定できない。なお、130は129と重複し、130が古い。両者は位置的に近接しているこから、129は130の建て替えに際し掘られた柱穴の可能性がある。

ＳＩ－158住居跡（図版５）

調査区の南側、Ｂ－３グリッドから検出された住居である。ただし、柱穴はＳＫｐ－93・95・152・153の４本のみしか検出されなかったため、全体のプランが明かでなく、おそらく東側を向くであろう間口の規模なども明確でない。柱穴の規模は、30cm前後、深度も93を除けば30cmに近く、かなりしっかりした柱穴となっている。本住居跡周辺には、このほかに３基のピットが検出されているが、93・154（155）・95の配置を見るとさらにもう一棟が想定できそうである。覆土は明褐色土・褐色土・暗褐色土とバラエティーがあり一定せず、木炭粒の含有は少なかった。遺物は、95から縄文土器片が出土しているが、粗製土器で細片のため時期を特定できない。

ＳＩ－159ａ住居跡（図版８・30）

本住居跡は、調査区の最も西側に位置し、Ｄ－２グリッドから検出された。ＳＩ－159ｂ住居跡と重複し、両者には建て替えの関係が想定されるが、新旧については確認できなかった。柱穴は、ＳＫｐ－143・145・146の３基と、ＳＩ－159ｂと重複する144・148がある。平面プランは、野球のベース形を呈した五角形で、間口の148－143間は2.6m、奥行き2.6mを測る。主軸方位は、Ｎ－163°－Ｅを指向し、概して南向きの住居となる。柱穴の規模は、143・145が30cmほどとなるほかは20cmほどと小形であった。深度は、145が46cmと特に深く、ついで144・146が27～28cm、ほかは10cmに満たなかった。覆土は、145が明黒褐色土と黒かったほか、明茶褐色土（143）、褐色土（144）、明褐色土（146）、暗褐色土（148）とまったく別個であったが、木炭粒の含有は多く、特に145・146からは焼土粒も検出されている。なお、145・146の柱痕内から磨石や敲台用の台石が出土したが、すべて火で焼かれていた。縄文土器は、144・146・148から出土しているが、すべて細片のため、時期等は不詳である。

ＳＩ－159ｂ住居跡（図版８・30）

本住居跡は、ＳＩ－159a住居跡と重複して検出された。柱穴は、ＳＫｐ－147・156・157のほか、ＳＩ－159a住居と共有する144・148がある。住居の平面プランは、ほぼ野球のベース形を呈し、間口3.4m、奥行き2.7mを測る。主軸は、Ｎ－120°－Ｅを指向する。柱穴の規模は、20cm前後と小形であり、深度も144・156が20cmを超えるもの、ほかは10cm前後と浅いものであった。覆土は、暗褐色土が主体であるが、156は明褐色土、ＳＩ－159aと重複している144は褐色土となっている。木炭粒の含有は概して多い。遺物は、重複していない柱穴では、156から縄文土器が出土しているが、細片のため時期の特定には至らなかった。

２）　土坑・土壙

屈振坂遺跡から発見された縄文時代の土坑・土壙は、５基である。これらのうち、墓坑と考えられるのはＳＫ－140土壙の１基だけで、このほかについては性格付けは困難である。以下、個別に概観したい。

ＳＫ－56土坑（図版９・33）

調査区西端に位置し、Ｄ－２グリッド杭付近から検出された。本土坑の発見は、表土剝ぎ段階に玦状耳飾りが出土したことにより、調査区を手掘りによって拡張し検出したものである。平面形は、長方形状を呈するが、ゆがみが著しく、一定のプランを意識しない落込みのような遺構である。規模は、長辺がおよそ2.57m、短辺がおよそ2.13mを測る。深度はおおむね40cmほどを測るが、底面の凹凸が著しく一定していない。覆土は、黒褐色土を主体とし木炭粒を多量に含み、焼土粒も含まれていた。遺物は、玦状耳飾りをはじめ磨製石斧などが出土し、土器類も比較的多く出土した。時期的には中期初頭頃に比定できる。ただし、本土坑の性格などは明らかにできなかった。

ＳＫ－70・71土坑

Ｃ－３グリッド中央から検出された細長い土坑である。両者の重複や新旧については明らかにし得なかった。70の規模は、長軸84cm、短軸45cm、深度は10cmと浅いものである。覆土は明褐色土である。71は、規模は70と同じであるが、深度は７cmとかなり浅い。覆土も同じ明褐色土であった。71からは、中期初頭の底部を中心とした１個体の土器が出土している。本土坑の性格は不明であり、場合によっては、ＳＩ－79住居跡に関連したり、あるいは遺物包含層の浅い落込みの可能性もある。

ＳＫ－118土坑（図版７・32）

ＳＩ－126住居跡に伴うと考えられる土坑で、Ｄ－４21グリッドから検出された。平面形はほぼ円形を

第２表　屈振坂遺跡遺構一覧表

番号	グリッド	種　別	平 面 形	規模／長軸×短軸	深度　cm	覆　　土　／木炭粒		遺物	備　　考
51	D－2	焼土坑	円形	115×97	8	図版11	◎	木炭	
52	D－2	焼土坑	円形	96×95	22	図版11	◎	木炭	
	C－3								
53	E－4	焼土坑	円形	100×94	36	図版11	◎	木炭	
54	B－4	焼土坑	円形	140×127	10.5	図版11	◎	木炭	
55	B－5	焼土坑	楕円形	130×100	17	図版11	◎	木炭	
56	D-1•2	土坑	不整形	257×213	35.5	図版９	－	土器	
	E-1•2							石器	
57	B－5	廃棄場	——	————	——	図版10	土	器	
	D－5							石器	
58	D－3	ピット	円形	30×28	31	褐色土	○	土器	SI－107
59	D－2	ピット	隅丸方形	22×20	34.5	褐色土(ソフト)			SI－107
60	D－3	ピット	円形	28×26	7	褐色土			
61	C－3	ピット	円形	35×34	6	明褐色土			浅い単なる窪み？
62									欠番
63	C－3	ピット	円形	38×35	19	褐色土	○	土器	SI－79
64									欠番
65									欠番
66	C－3	ピット	円形	42×40	31	褐色土	○		SI－79
67	C－3	ピット	円形	33×31	18	褐色土	△		SI－79
68	C－3	ピット	円形	26×21	14	褐色土	△		SI－79
69	C－3	ピット	方形	40×25	39	褐色土	◎		SI－79
70	C－3	土坑	楕円形	84×45	10	明褐色土			包含層の落込み
71	C－3	土坑	楕円形	84×45	7	明褐色土		土器	包含層の落込み
72	C－3	ピット	円形	32×30	12	暗褐色土			
73	C－3	ピット	円形	42×38	16.5	明褐色土			SI－108
74	C－3	ピット	円形	20×18	17	暗褐色土	○		SI－108
75	C－2	ピット	円形	27×25	21				SI－108
76	C－3	ピット	不整形	20×18	20	暗茶褐色土	△	土器	SI－108
77	C－3	木根痕	円形	30×25	16.5				木根痕
78	C－3	ピット	円形	22×20	18.5	褐色土	△		
79	C－3	住居跡	——	————					図版６
80	C－3	ピット	円形	45×34	16	茶褐色土			遺構？
81	C－3	ピット	楕円形	36×27	18.5	褐色土	△	石器	SI－99
82	B－3	ピット	円形	23×21	16	黒褐色土	○		SI－99
83	C－3	ピット	方形	34×30	20	褐色土	△		SI－98
84	B－3	ピット	方形	34×30	25	茶褐色土	•		SI－98
85 a	B－3	ピット	円形	26×24	14	暗褐色土			SI－98
85 b	B－3	ピット	円形	19×14	16	暗褐色土			SI－99
86		撹乱	——	————	—				
87	B－3	ピット	円形	20×15	10.5	明褐色土	•		SI－99
88	B－3	ピット	円形	29×25	24	暗褐色土	○		SI－98
89	C－3	ピット	楕円形	40×30	18.5	暗褐色土	◎	土器	90より古い　SI－98
90	C－3	ピット	円形	18×18	20.5	暗褐色土			89より新しい　SI－99
91	B－3	炉跡	円形	22×20	—				
92		——	——	————	—	黄茶褐色土			単なる窪み
93	B－3	ピット	方形	34×27	9.5	褐色土	•		浅い皿状　SI－158
94	B－3	ピット	楕円形	40×29	14	褐色土	•	石器	
95	B－3	ピット	楕円形	30×25	25	明褐色土	○	土器	２段　SI－158
96	C－3	ピット	円形	30×28	14	暗褐色土			
97		木根痕	——				•		
98	B－3	住居痕	——						
	C－3								
99	C－3	住居跡	——						
100	C－2	ピット	円形	23×22	20.5	褐色土	△		SI－107
101	C－3	ピット	円形	25×20	8	暗茶褐色土	•	土器	SI－107
102	C－3	ピット	円形	26×22	7.5	暗茶褐色土	－		SI－107
103	C－3	ピット	円形	28×22	23	褐色土	◎	礫	
104	C－3	ピット	円形	20×18	25.5	褐色土	•		杭穴状
105	C－3	ピット	円形	25×20	4.5	茶褐色土	•		
106	C－3	ピット	円形	32×30	22.5	暗褐色土	○	土器	SI－108

※木炭粒：　◎非常に多い　○多い　△少ない　・若干　－なし
※※遺　物：　土器＝土器類　　石器＝石器類（含フレーク・耳飾り）

番号	グリッド	種　別	平 面 形	規模／長軸×短軸	深度　cm	覆　　土　／木炭粒		遺物	備　　考
107	C－2 D－2	住居跡	——						
108	C－2	住居跡	——						
109	C－3	ピット	円形	25×22	12	褐色土	△		SI－161
110	C－4	ピット	円形	40×40	7	茶褐色土	－		SI－126
111	C－4	ピット	円形	19×18	11	暗褐色土	・	土器	SI－161
112	C－4	ピット	円形	26×24	14	褐色土	－		
113	D－4	ピット	円形	28×24	11	暗茶褐色土	・		SI－161
114	D－3	ピット	円形	25×20	7	褐色土	・		SI－161
115	D－4	ピット	円形	29×27	8	暗褐色土	－	土器	SI－126
116	C－4	ピット	円形	27×24	11	褐色土	・		SI－126
117	C－4	ピット	円形	25×25	18	暗褐色土	・		SI－126
118	D－4	土坑	円形	55×52	18	明褐色土	・	土器	
119	C－4	ピット	円形	30×26	17	明褐色土	・		テラス有　SI－126・161
120	D－4	ピット	円形	29×26	13	上層：暗褐色土 下層：黄褐色土	・ ・		SI－126
121	D－4	ピット	円形	30×28	10	褐色土	・		SI－141
122	D－4	ピット	方形	30×29	35	茶褐色土	・		テラス有　SI－141
123	D－3	ピット	円形	26×25	17	暗褐色土	・		
124	——								欠番
125	D－4	ピット	円形	24×24	16	褐色土	○		SI－141
126	C－4 D－4	住居跡							
127	D－4	ピット	方形	36×34	26	褐色土	・		SI－141
128	D－4	ピット	楕円形	34×24	35	褐色土	○		SI－141
129	C－4	ピット	円形	20×20	17.5	褐色土	△		130より新しい
130	C－4	ピット	円形	22×20	19	暗褐色土	△	礫	129より古い　SI－142
131	C－4	ピット	楕円形	30×20	19	褐色土	・		SI－142
132	B－4	ピット	楕円形	29×23	12	褐色土	・		SI－142
133	C－4	ピット	楕円形	25×19	23	暗褐色土	○		焼土粒含む　SI－142
134	B－4	ピット	円形	25×21	25	褐色土	△		SI－142
135	——								欠番
136	——								欠番
137	——								欠番
138	——								欠番
139	B－4	ピット	楕円形	22×15	25	褐色土	・		
140	C－2	土壙墓	方形	81×70	15.5	図版８		土器 礫	
141	D－4	住居跡							
142	B－4 C－4	住居跡							
143	D－2	ピット	楕円形	35×25	8.5	明茶褐色土	・	土器	SI－159a
144	D－2	ピット	円形	25×21	27	褐色土	・	土器	SI－159a・b
145	D－2	ピット	円形	29×25	46	明黒褐色土	◎	礫	SI－159a
146	D－2	ピット	円形	20×19	28	明褐色土	◎	土器 礫	焼土粒含む　SI－159a
147	D－2	ピット	円形	20×15	7	暗褐色土	○		SI－159b
148	D－2	ピット	円形	23×20	12.5	暗褐色土	○	土器	SI－159a・b
149	——								欠番
150	——								欠番
151	D－2	ピット	円形	28×25	9.5	褐色土		土器	
152	B－3	ピット	楕円形	33×25	37.5	暗褐色土	・	石器	SI－158
153	B－3	ピット	円形	29×25	24	明褐色土	・	石器	SI－158
154	B－3	ピット	円形	25×22	7	明褐色土	・		
155	B－3	ピット	円形	17×16	9	暗褐色土	○		
156	D－2	ピット	円形	19×18	21.5	明褐色土	○	土器	SI－159b
157	D－2	ピット	円形	20×17	7	暗褐色土	○		SI－159b
158	B－3	住居跡							
159	D－2	住居跡							
160	B－5	ピット	円形	33×28	4.5				
161	C－4 D－4	住居跡							

呈し、規模は55×52cm、深度は18cmを測る。覆土は、明褐色土を主体とし、木炭粒を少量含むものであった。遺物としては前期最終末頃と考えられる土器が数個体分出土した。性格などは明らかにできなかった。

ＳＫ－140土壙（図版８・31）

Ｃ－３グリッドから検出された土壙である。平面形はおおむね長方形を呈し、長辺81cm×短辺70cm、深度は15.5cmを測る。長軸の方位は、Ｎ－80.5°－Ｗを指向する。長軸における断面形をみると、底面は東側へ緩く傾斜し、西側がやや高くなっていることから、頭位はほぼ西向きの可能性がある。長辺側の底面付近には、直径10cmほどの小孔が１対穿たれていたが、目的等は判らない。覆土は、上層と下層に大きく大別できる。上層（１・２層）は橙色の地山土と明褐色土で、しまりなくソフトな土層である。下層（３～５層）はかなり固くしまりがあり、地山土と明黒褐色土で構成される。上層・下層とも地山土の混入が多く、埋土の可能性が高い。今回第２層と第４層について、土壌をサンプリングしたが、分析を行うまでに至らなかったため、墓坑としての確認はできなかったが、状況からして墓坑の可能性が高いと判断される。遺物としては、縄文土器の細片が出土したのみで、骨片などは確認できていない。

３）　廃棄場

ＳＸ－57としたもので、調査区の東部、Ｂ～Ｃ－５グリッドにおいて確認されたものである。位置的には、遺跡本体の平坦地からやや傾斜を強くした地点にある。当該地点の覆土は、黒褐色土を基調としており、食物の残滓などを廃棄することによって黒色化が進められたものと考えられる。ただし、遺物の出土量は概して少なく、いわゆる土器捨て場的な状況までは発達していなかった。遺物は縄文土器を中心とし、石器類は少なかった。時期的には中期初頭期の土器類で占められていた。

４）　焼土坑

本遺跡からは、合計５基の焼土坑が検出された。平面的な分布からは、Ａ群（ＳＫ－51・52）・Ｂ群（ＳＫ－54・55）・Ｃ群（ＳＫ－53）の３群に分けられる。また焼土坑の形態は、平面形では円形や楕円形などが見受けられるが、深度からすれば大きく２種に類型化できる。第Ⅰ類は、表土を掘削してほぼ地山面を火焼面とするもの、第Ⅱ類は地山面を20cmから40cm近くまで掘削して火焼面としたやや深いものである。第Ⅰ類と第Ⅱ類の関係は、本遺跡の分布からすれば互いにセットとして機能していた様子をうかがうことができる。したがって、Ｃ群については、第Ⅱ類の１基のみ調査されているが、調査区外の近接した位置に第Ⅰ類に相当する焼土坑が存在していた可能性が高いことになる。焼土坑の性格については、炊事や暖房用の燃料となる木炭を生産した小規模な木炭窯である可能性が高く、時期的には古代以降、中世～近世のものと目される。ただし、本遺跡では時期を確定できる遺物等は確認できなかった。以下、類別により概要を述べておきたい。

第Ⅰ類とした焼土坑にはＳＫ－51・54の２基がある。法量においては若干の大小があり、平面形態においても楕円形と円形がある。ただし、平面形態で機能の差はないものと考えられる。火焼面は底面を中心に広く焼土化しているが、これが本類の特徴と考えられる。第Ⅱ類の焼土坑は、ＳＫ－52・53・55の３基である。火焼面は側壁を中心に焼土化が著しいが、底面ではほとんど焼土化に至っていない。覆土は、木炭粒によって全体に黒色化が著しいものと、地山土のブロックで埋められたと考えられるものの二者がある。前者ではＳＫ－53・55の２基、後者にはＳＫ－52がある。

なお、第Ⅰ類と第Ⅱ類の機能的な差異などは明らかにできなかった。

Ⅳ　出土遺物

1　縄文土器

屁振坂遺跡から出土した縄文土器は、前期末葉～中期初頭に比定できるものであった。ＳＫ－118・ＳＫ－56・ＳＸ－57から出土したものが大半を占め、時期的差異から第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器に大別できる。

1）　第Ⅰ群土器（図版12－１～５・図版13－39～40）

縄文時代前期末葉に比定できるものを本群とした。

１は、浅黄色を呈する円筒形の深鉢である。口縁部に貼付による鋸歯状文を施し、頸部以下には単節ＲＬ縄文を斜行施文している。同様の文様構成をもつ資料は、鍋屋町遺跡例［柿崎町教委1960・金子1987］等にみられる。しかし、鍋屋町遺跡例が口縁部に帯状の粘土を貼付した後、その下部を三角状に刻み取る印刻によって鋸歯状文を描出するのに対し、本資料はあらかじめ三角状に整えた粘土を貼付し、その縁を先端の細い棒状工具によって調整して鋸歯状に描出しているのが特徴である。

２は暗橙色を呈し、１と共伴して出土した。口縁部が外傾し、胴部のやや張り出す深鉢である。文様は多截竹管状工具の内面を連続的に押し引きして、器面のほぼ全面に結節状沈線文を密施している。三角形を基調に重層的に施文され、部分的に菱形となっている。三角形で区画された内部には横走する結節状沈線文も施されている。胴部上半で器面を上下に分割する横走結節沈線文も認められるが、三角状モチーフよりも後に施文されていることから、区画文としての役割が付与されていたかは疑わしい。また、胴部下半では、三角形の規格性が崩れ始め、やや曲線的に文様が施文されているのが特徴である。

３～５はＳＫ－118において、１～２と共伴して出土した資料である。橙色～暗橙色を呈し、いずれも二次焼成による器面の摩耗が著しい。３は胴部の張り出す深鉢で、単節ＬＲ斜行縄文が施されている。４・５も深鉢で、摩耗によって文様が消失しているが、斜行縄文と思われる痕跡が僅かに認められる。

39・40はＳＸ－57から出土したものである。出土状況から中期初頭に含まれる可能性は否定できないが、文様の特徴から本群として捉えた。ともに口縁部資料で、橙色を呈している。第Ⅱ群土器に比べて器壁が薄く、先端の細い棒状工具によって、口縁部から斜格子目文が施されている。縦走の沈線を施した後に斜走の沈線を交差させて斜格子目に描出しており、全体的に斜めのモチーフとなっている。また、39には最上部の交点にのみ円形刺突文が認められるが、40にはみられない。類似資料は前期後葉からみられるが、斜行沈線同士の交差によって斜格子目に描出するのが一般的である。本資料には後葉期からの系譜を強く看取できるが、モチーフ的にはかなり崩れた形態を示しているといえよう。

2）　第Ⅱ群土器（図版12－６～33・図版13－34～38・41～64）

縄文時代中期初頭に比定できるものを本群とした。文様の特徴から、ａ～ｃ類に分類が可能である。

ａ　類　沈線文を主体的に施す資料である。６は口唇部に撚糸文（Ｒ）が回転施文され、口唇部～胴部上半にかけてクランク状の未調整隆帯が下垂している。クランクの中央は半円状に突出し、隆帯に沿って多截竹管状工具による平行沈線文が粗雑に施文される。頸部には平行沈線による斜格子目文がみられるが、

右傾のものは乱雑である。色調はにぶい橙色を呈する。8は口唇部に棒状工具による刻みが施された深鉢である。口縁には山状の突起がみられるが、山状突起の左側にも小さい瘤状の突起が認められ、対となっている。頸部には、横走と斜走の平行沈線を組み合わせた斜格子目文が施されるが、横走のものはやや左傾を意識したと思われる。にぶい橙色を呈する。34～36は口縁部に沈線文の密施された深鉢である。暗橙色～橙色を呈する。36は多截竹管状工具による集合沈線が全面にみられるが、34・35は二条一対の棒状もしくは櫛歯状工具による施文であり、全面に施されていない等の相違が認められる。37は横位の平行沈線文を多截竹管状工具によって施した後、施文具を二条一対の棒状もしくは櫛歯状工具に替え、やや斜行気味の沈線文を施している。41は器面の摩耗が著しいため明確ではないが、同様のものと思われる。46も縦位の沈線文だけであるが、同じ種類の施文具を用いており、二条一対の棒状もしくは櫛歯状施文具を使用して文様を施すことは、これらの資料に共通した特徴として挙げられよう。57は横位の平行沈線文の下部に斜行平行沈線文が施された深鉢の胴部で、暗橙色を呈する。本群の他の資料に比べて胎土が粗い。30は淡黄色を呈し、横位および縦位の平行沈線文が多截竹管状工具によって施文されている。また、17・37は縦位の、42は横位の平行沈線文が多截竹管状工具によって施されている。

b　類　隆帯を主体に文様が構成されるものを本類とした。7は橙色を呈するキャリパー形の深鉢である。隆帯によって器面を数段に分割している。口縁部文様帯は斜走隆帯によって区画され、平行沈線で描出された空間内部には、斜格子目文が充填されている。胴部には単節ＬＲ斜行縄文がみられる。

c　類　いわゆる粗製土器を便宜的に一括した。斜行縄文の施文されたものと、無文のものが本類の主体で、本遺跡出土土器の大半を占めている。暗橙色～橙色を呈している。64は底部が張り出し、単節ＲＬ斜行縄文が施される深鉢である。底部内面端部には棒状工具による調整痕が残されている。また、63には縦位撚糸文（Ｌ）が施されている。

3）　そ　の　他（図版12－12）

その他の時期に比定される土器である。12は頸部に鎖状隆帯の施されたもので、縄文時代中期後葉～後期前葉期に属するものと思われる。ＳＫ－56からの出土であるが、混入品である可能性が考えられる。

2　石　器　類（図版13～14）

本遺跡から出土した石器類は、概して少なく、図化できるものは限られていた。出土した石器の種類も、玦状耳飾のようないわゆる特殊遺物がある反面、石鏃や石錘に代表されるような狩猟具および漁撈具が検出されておらず、不明な点が多い。

65はＳＫ－56の遺構確認面で検出された矩形の玦状耳飾である。半分を欠損しているが、非常に良質の蛇紋岩を用いている。66～68は不定形剝片石器で、69は剝片である。66は凝灰岩製、67～69は安山岩製である。70は安山岩製の打製石斧である。短冊形を呈し、両面加工されているが、風化が著しい。71・72は蛇紋岩製の磨製石斧で、ともに刃部を欠損している。72には両面からの擦切痕が認められ、擦切技法によって作出されたものである。73・74は安山岩製の磨石で、両面に磨痕が認められる。74は一部を欠損しているが、欠損部が赤化しており、欠損後に被熱したものであろう。75は安山岩製の台石で、両面に敲打痕が認められる。ＳＫｐ－145に、破片の状態で廃棄されていたものである。

V 総　　括

1　屁振坂遺跡の縄文集落とその性格

1）　はじめに

屁振坂遺跡から発見された縄文時代の遺構は、土坑やピットなどを主体に1,000mほどの調査区内から82基が検出された。その密度は、13㎡余りに１基の土坑あるいはピットが分布する程度と、極めてまばらな分布状況にあるとせざるを得ない。しかも、竪穴住居跡は確認されず、今回住居跡として推定した12棟についても床面の検出はなく、また炉址の存在も確定的でないなど、住居の存在を物証から具体的に証明することが極めて困難な結果となっている。したがって、今回積極的な意図をもって推定した住居を否定したり認めなかった場合、本遺跡の性格や意義がいかなるものとなるかは想像に堪えない。

しかし、推定された住居は、柱穴５基が野球のベース形に配されるという一つのパターンが見受けられ、同様の平面形の住居が多少変形しつつも９棟存在するという事実、墓坑と考えられる土坑の存在、また廃棄場が想定される区域など、一般的に集落とされている遺跡の要素をいくつか持ち合わせていることも確かである。また、量的には多くないまでも、前期末葉及び中期初頭の土器類・石器類が、ある程度生活を維持できる組成において発見されていることは、屁振坂という地において、当時の人々がなんらかの生活を営んでいた証拠である。このような生活の場こそ、集落の範ちゅうで理解されるものである。集落の存在が想定される以上、一定期間の定住がなされたことを意味するが、その場合当然のこと住居が必要となる。しかし、誰もが認定可能な竪穴住居が存在しないとすれば、どのような住居が想定されるのであろうか。屁振坂遺跡においては、主に野球のベース形に配される柱穴パターンについて、住居として推定し、本遺跡を集落として積極的に取り扱おうとするものである。ただし、屁振坂において12棟ほどの住居跡を推定したが、柱穴の配置に一つのパターンは見出せても、これを一般化するには、他遺跡の事例が不明確となっている。この点については、竪穴住居を主眼においた従来の縄文集落研究ではほとんど検討されてこなかったという問題が内包されており、縄文社会を豊かに理解していくには物足らないとせざるを得ない。そこで、屁振坂遺跡のような小規模な遺跡とはどのような遺跡であったのか、まずこの問題について調査結果から遺跡の性格等について検討を試み、当時の時代的な背景、あるいは自然等の環境問題等と絡め、縄文社会理解のための視点を述べてみたい。

2）　柏崎平野における縄文集落とその類型

柏崎平野における縄文時代の集落調査は、最近に至ってその事例が増えているが、調査の成果まで報告された事例は少ないのが実情である。このため、本地域での集落の実態まで総括的に述べることは時期尚早であるが、地域と時期を限定しつつ概観し、集落の類型について若干の検討を試みたい。

屁振坂遺跡周辺の縄文集落　第II章で述べ第２図に示したとおり、屁振坂遺跡周辺における縄文時代の遺跡は23件を数える。これらの全てが発掘調査されていないため、住居跡を確認した事例は少なく、厳密に言えば集落と特定できない遺跡が多い。しかしながら、少なからず遺物が発見され、またその立地から集落を想定することは可能であることから、これらの遺跡を一定期間の定住の跡、つまり集落と捉え稿を

進めることとしたい。

柏崎平野における草創期から前期前半までの遺跡は、平野全域を見ても5カ所あまりしかなく、その分布は極めて希薄である。遺跡数の増加が顕著となるのは、前期の後半以降中期～後期前葉期で、その後の遺跡数は再び減少に転じている。屈振坂遺跡周辺においてもこの傾向は同様であるが、中期中葉以降の減少傾向をうかがうことができる。

屈振坂遺跡周辺において、最も遺跡数が増加するのは、前期後半から中期前葉期であり、23遺跡中16カ所の遺跡から遺物が採集され、全体に占める割合も70%に達する高率となる。この数字は、全ての遺跡が明らかになされていない以上確定されるものではないが、他時期の状況と対比すれば極めて高いとせざるを得ない。特に、最近の傾向としては、山間部における尾根筋や山頂付近、あるいは屈振坂遺跡のような中位段丘地内において遺跡数の増加が顕著となっている。

ところで、遺跡数の増加とは、人口増とイコールで評価されがちで、1遺跡に何人の人口として計算される。しかし、当該地一帯における前期後半から中期前葉の遺跡数の増加が意味するものは、単純に人口の増加として評価できるであろうか。この点については、屈振坂遺跡のような遺跡の評価、つまり集落としての性格を明らかにすることが必要と考えられる。

前期後半～中期前葉期の集落　当該期の遺跡は、屈振坂遺跡周辺だけではなく、市内の全域でも概して多く確認されている。遺跡が発見された位置あるいは立地を見ると、例えば国光の塚群遺跡［柏崎市教委1983］のように、近世と考えられる塚群が構築されるような馬の背状の尾根部に立地する中期前葉期の遺跡があり、また分水嶺の頂部に立地していた夏渡の百塚遺跡［柏崎市教委1989］でも前期後半と考えられる遺構・遺物が検出されている。いずれも、竪穴住居跡は検出されておらず、わずかなピットと少量の土器・石器が出土したもので、屈振坂遺跡と同様な住居を想定するにしても1棟か多くても2棟程度の遺跡であった。

国光や夏渡の場合、ほとんど平坦地をもたない尾根筋に立地していたが、ある程度の平坦地を有したところに立地する遺跡としては、屈振坂遺跡のほかに、田塚山遺跡群では中期初頭頃のD地区と前期後半のE地区が確認されている［柏崎市遺跡調査室編1994］。これらの集落では、やはり竪穴住居跡は検出されず、遺構は主にピット・土坑で構成されている。ピットの規模は、屈振坂遺跡の事例と同じく小さなもので占められ、住居の形態としては平地式が想定される。しかも、住居の床面や炉跡も検出されていない。したがって、集落のイメージとしては、屈振坂遺跡の集落としてほぼ間違いがないものと判断される。

また、中期初頭～前葉期において集落のほぼ全域が調査された事例として、横山東遺跡群の大沢遺跡や雨池遺跡と、藤橋東遺跡群の呑作A遺跡や京ヶ峰遺跡が掲げられる［柏崎市教委1995］。これら4遺跡とも中期初頭から前葉の集落であった。横山東遺跡群の場合も、竪穴住居こそ確認されなかったが、雨池遺跡では2つの炉跡をもつやや大型の平地式と考えられる住居跡などが複数存在し、大沢遺跡では広場の存在が明確であり、堀立柱建物も1棟が確認されている。藤橋東遺跡群では、両遺跡ともに竪穴住居が存在する。さらに、呑作A遺跡では、遺構群が中央の広場をめぐり、京ヶ峰遺跡では土器捨て場をめぐって馬蹄形状に遺構群が配置するとともに、広場が意識されていた可能性を持っている。

広場をもつ集落跡としては、前期後半期では横山東遺跡群の大宮遺跡が発掘調査によって確認されている［柏崎市教委1994］。中期初頭から前葉の環状集落事例としては、確認調査されただけではあるが、剣野B遺跡において確認されており、十三仏塚遺跡でもその可能性が高い。これら3集落は、遺跡の規模と遺構密度からしても、本地域では中核になり得る集落であったとすることができる。

集落の類型　以上、前期後半から中期前葉期の縄文集落について12例ほどを例示し、その概要を述べた。すべてが正式報告されてはいないが、若干ながら類型化を試みておきたい。

まず、広場が設定されるなどある一定の規制をもって集落が形成されている場合と、尾根部や平坦地の中央部などに遺構が密集して規制が顕著ではない集落とに、大きく二大別が可能なようである。本稿では便宜的に前者を第Ⅰ類型とし、後者を第Ⅱ類型としたい。

第Ⅰ類型とした集落の事例を見ると、環状に遺構群がめぐり、中央の広場が明確に意識された大宮遺跡や剣野Ｂ遺跡と、概して遺構の密度が希薄な呑作Ａ遺跡や大沢遺跡が存在する。両者の相違とは、その集落の存続時期との関連が強く、基本的な意味では大きく変わらない可能性が高い。しかし、集落形成にあたっての集団の結束あるいは食料獲得など立地等の適不適などが背景にあったと考えられること、また同時存在の場合を想定すれば、両者にはなんらかの関連性があり、結果として差異が生じてしまったことも考えられる。このため、一応両者をＡ類とＢ類に細分し、前者を大宮類型、後者を大沢類型と仮称しておきたいが、類例の増加によっては更に細分が可能となるかも知れない。

第Ⅱ類型とした集落は、その立地や周辺の地理的な環境に左右されている可能性が考えられる。したがって、本類型においても両者の差異は基本的に少ないものと判断できる。しかし、夏渡の百塚遺跡や国光の塚群遺跡の立地が、台地など平坦地の少ない山間部に位置するのに対し、田塚山遺跡群や屁振坂遺跡では鯖石川や鵜川をひかえた中位段丘地帯に位置しており、地理的な環境を含む立地や想定される住居数においては、比較的明瞭な差異が認められる。このため、本類型においても両者を細分してＡ類とＢ類とし、前者を屁振坂類型、後者を夏渡類型と仮称することとしたい。

柏崎平野における縄文集落の類型とは、従来から指摘されているセトルメント、例えば多摩ニュータウンの事例と対比すれば［小林1973］、第Ⅰ類型Ａ類（大宮類型）はほぼＡパターンに対比が可能である。第Ⅰ類型Ｂ類（大沢類型）については、Ｂパターンの内容に近いが、集落内に広場が設定されている点などはＡパターン的である。また、多摩ニュータウンのＣパターンは、柏崎平野では第Ⅱ類型Ｂ類（夏渡類型）との対応が考えられる。しかし、第Ⅱ類型Ａ類（屁振坂類型）については、Ｃパターンより規模が大きく、またＢパターン的な意味合いを含む内容をもっていることから、単純な対比はできない。このような差異については、類型化の視点に関わる差異も想定されるが、両者が地理的に遠く隔たり、自然的な環境も対照的であることに起因した地域的な差異である可能性も高い。日本海側と太平洋側など、自然環境の異なるさまざまな地域でのセトルメント・パターンについて、個々に類型化し、相互に対比していくという検討が今後必要と考える。

なお、第Ⅰ類型と第Ⅱ類型の集落では、貯蔵穴の有無など集落を構成する遺構組成に差異がある。元来、該期の集落からは、貯蔵穴と考えられる土坑の存在は希薄であり、住居内の天井部などで貯蔵されていたと考えられるが、第Ⅱ類型ではほとんど検出されていない特徴がある。この貯蔵穴の有無は、集落の意味を検証する上で、大きな意義をもつものとすることができよう。

3）　屁振坂縄文集落の検討

前項において、柏崎平野の縄文集落を大きく２類型に分類した。両者は、主に広場の有無によって区分されるものであり、集落形成のパターンに差異がある。ここでは、屁振坂遺跡の集落について検討し、大区分した集落両類型の性格を見極めるための試みとしたい。

住居跡とピット（柱穴）の概要　検出されたピットは75基、推定復元された住居跡は12棟である。住居

の柱穴として復元に用いたピットは、一部重複もあるが合計57基で、全体の76%に相当する。復元に用いられなかったピット19基と、遺構確認面の乾燥等によって検出できなかったピットの存在を想定し、さきほどの割合から推定すれば、遺跡全体ではおおむね15棟ほどの住居数が想定できる。

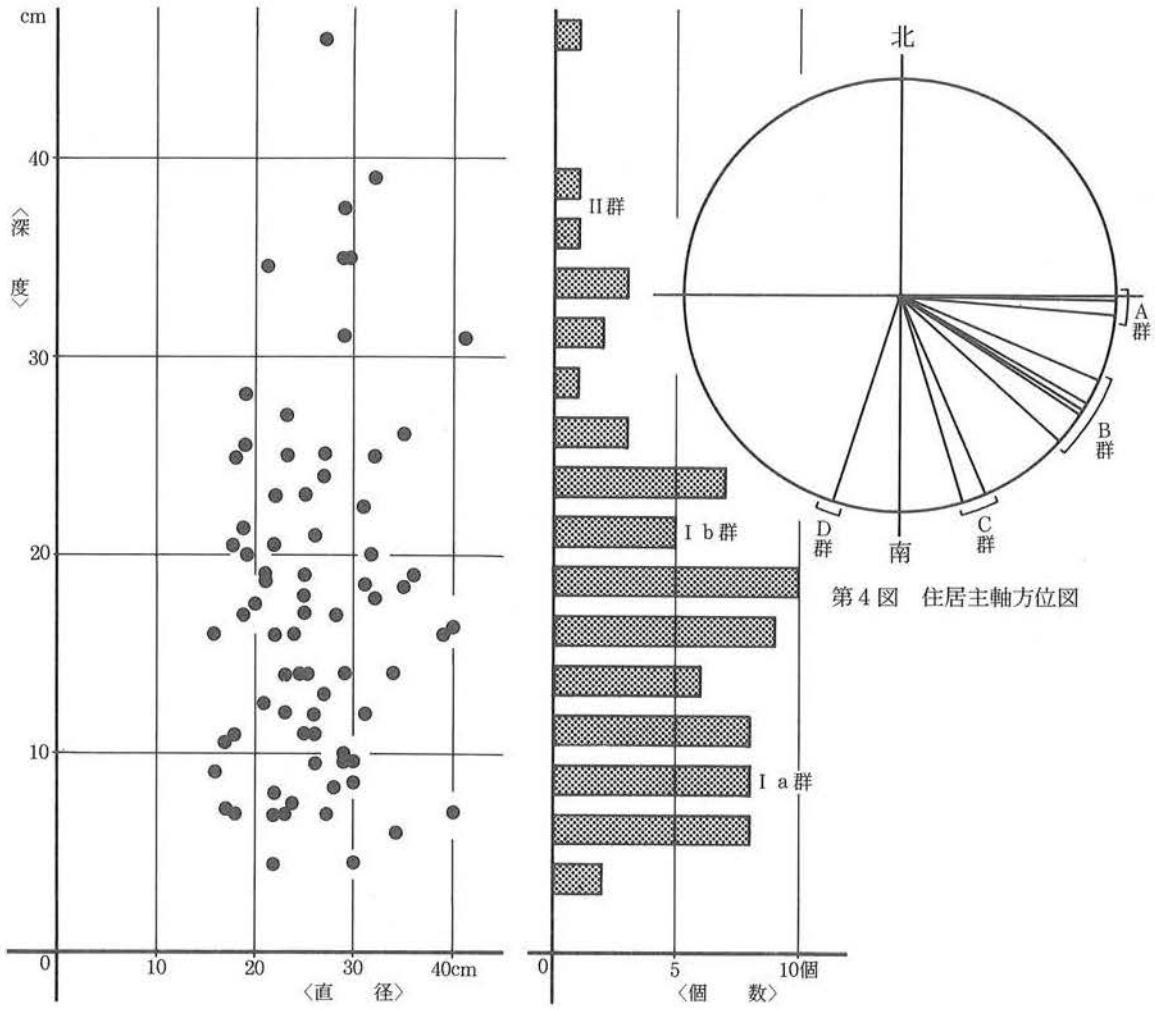
推定復元された住居跡は、明確にできなかったＳＩ－158とＳＩ－141を除くと、６本柱の住居としてはＳＩ－126が１棟想定されるだけで、ほかはすべて５本柱によるものである。住居の平面プランは、遺構確認面に達する掘り込みがないことからまったく不明である。しかし、今回復元された住居の柱穴は、基本的には５本柱であり、これらを結んでできる図形が五角形であることは、円形もしくは楕円形プランを基本としていた可能性が高い。しかも、５本柱を基本としていることは、それぞれの住居とも上屋構造では共通するものであったことを示唆しており、一定の構築方法や構造などの規格があったとすることができるのではないだろうか。

ピットの規模は、大きいものでも直径が40cmあまり、直径の長軸が30cm以上を測るものは28基で、全体に占める割合は37.3%しかなく、平均でも26cmで、小さなものは直径で20cmに満たない。また、深度は、30cmを超えるものが８基しかなく、平均でも17.8cm、浅いものは10cmに満たないなど、矮小なピットで占められている。第３図に、各ピットの直径について、長軸と短軸の平均値と深度の相関関係を示した。これを見ると、直径では25cm～35cmの間に大半が集中ししていることが判る。また、深度については、ほとんどのピットが５cmから25cmほどの間に集中している。細かく見ると、10cm前後（Ｉａ群）と、20cm前後（Ｉｂ群）にそれぞれの高まりが見受けられ、深いものでは25cm前後（II群）に小さな高まりがある。本遺跡よりも相対的にランクが上の集落となれば、おそらくII群かそれ以上に大きな高まりが生じてくるものと思われる。

また、ピットの覆土を見ると、柱回りを固定するためのいわゆる根固めの痕跡がほとんど見受けられず、かなり簡便に柱が立てられていたことを示している。このような状況は、住居復元に用いたピットについても同様であり、これらピットから推定される住居の柱もせいぜい直径が10cm前後であり、最大でも15cmを測るものは極めて少なかったのではないだろうか。このようにピットの規模が概して小さいという本遺跡の特徴とは、構造物である各住居の上屋構造の程度を反映していることになる。つまり、住居の屋根の構造が簡易であり、重量そのものが軽く、細い柱で充分な構造であったことを意味しよう。具体的な構造については、類推を重ねてしまうことになるが、雨露がしのげる最低限の小屋掛けだったのではないだろうか。したがって、本地方のように雪の多いところでは、積雪に耐え、冬を越せるような構造ではなかったことが、想定される柱の太さと柱穴の深度などから判断できる。

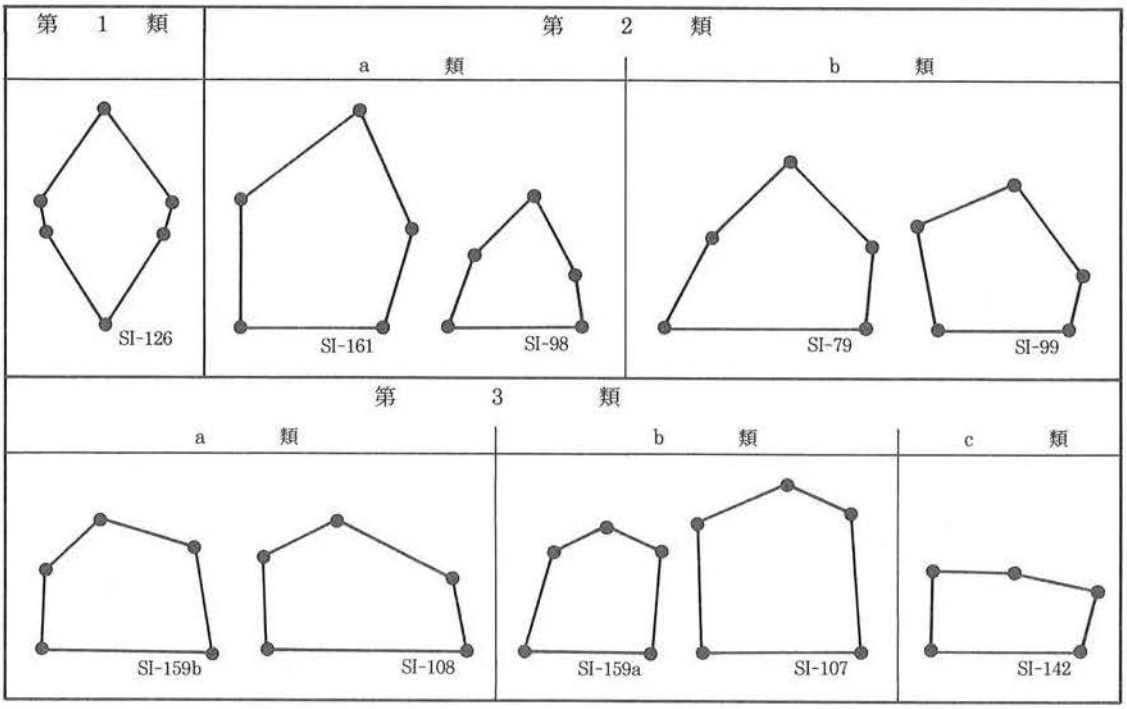
住居の主軸方位　各住居跡において主軸方位についてみると、大半が東から南にかけての方位をとり、おおむね４群に細別できる。Ａ群は、おおむね真東を指向するもので、ＳＩ－107・142の２棟の住居跡が該当する。Ｂ群は、おおむね南東に方位を取り、５棟（ＳＩ－98・99・108・126・159ｂ）が該当し、本遺跡では最も好まれた方位である。Ｃ群は、おおむね南南東に方位をとるもので、２棟（ＳＩ－161・159ａ）の住居跡がある。これら３群については、Ｂ群を中心にＡ群とＣ群の方位が指向されていることからも、基本的には南東志向にあったものとするができよう。したがって、南南西に方位をとるＤ群の１棟（ＳＩ－79）はやや特異な存在のようである。このように見てくると、住居の主軸方位そのものは、本遺跡ではほぼ全期間にわたって同じ志向が継承された可能性が高く、方位による時期的な変遷というより、異なる方位をとる住居が組み合うことによって集落を形成していた可能性のほうが高いものと考えられる。

なお、住居の主軸方位が概して一定してた事由としては、主に風向きに関わる可能性が高い。本地域で



第3図　柱穴・ピット法量分布図

第4図　住居主軸方位図



第5図　屈振坂遺跡平地式住居の形態分類図

は、冬期間の季節風も北西の風が強いが、今回調査を実施した７月から８月にかけての夏季においても、主に北西の風が遺跡を吹き抜けていた。このため、入り口用の正面は、この風下に向けて設定されていた可能性が高いように考えられる。それは、柱穴の規模に象徴的されるように、住居の上屋構造そのものの重量が軽かったことが予想され、これを固定する柱も華奢であったことなど、かなり必然的な選択であったように思われる。

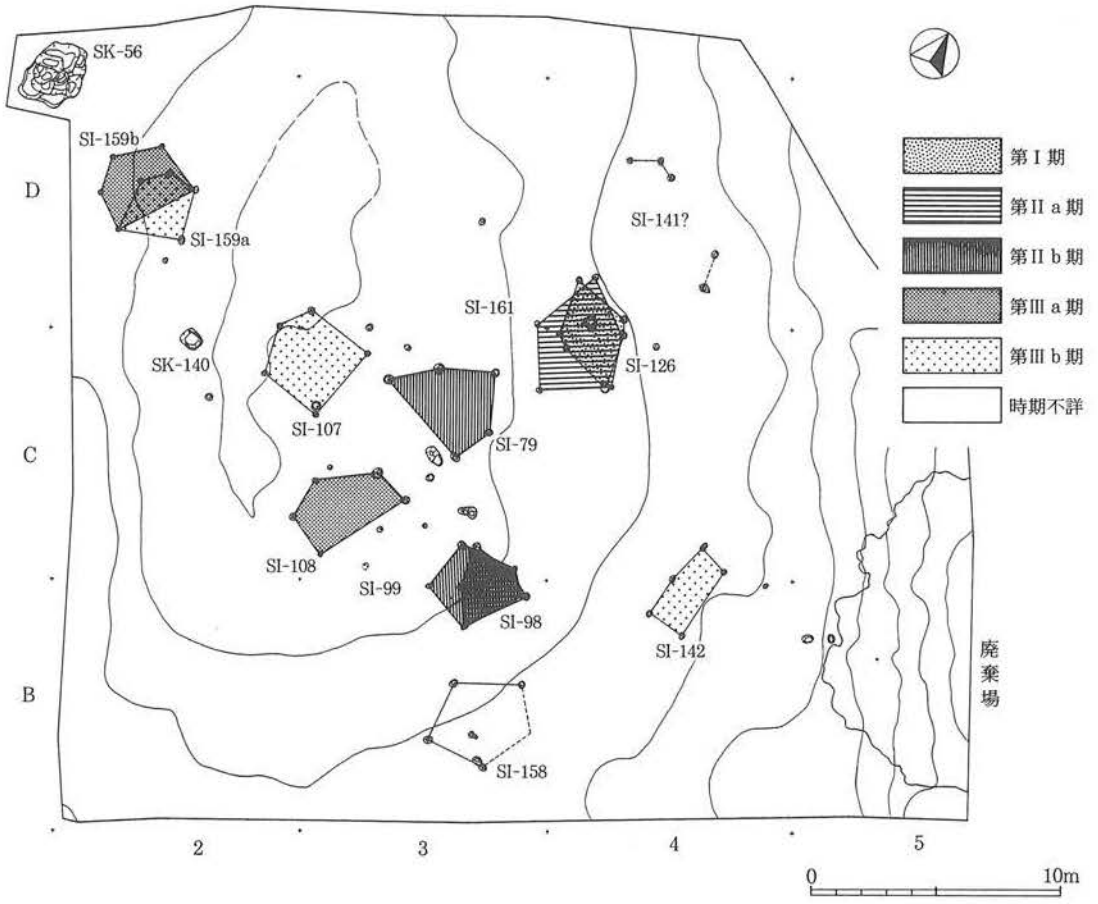
住居跡平面形態の分類と集落の変遷　屈振坂遺跡における縄文集落には、推定された住居跡が12棟存在し、最大15棟ほどが想定できる。しかし、重複事例が３例確認されていることから、これら全てが同時存在していなかったことが確実であり、当然集落としての変遷を考えざるを得ない。今回は、本遺跡で提示した住居そのものが、ほかの遺跡などの事例によって検証されておらず、さらに集落変遷まで言及することには躊躇せざるを得ない。しかし、推定された住居形態や重複関係に矛盾がなく、今回の検討が問題提起の意味を含むものであることから、今後の叩き台を意図し、住居の形態について分類するとともにその変遷を考え、集落の変遷について試案を提示しておくこととしたい。

第５図は、本遺跡で推定された住居跡のプランを集成し、平面形態について分類を試みたものである。平面形態には、あまり強い規制が認められないことから、この形態分類も厳密な細分とまでいかないが、大きく３類には区分できそうである。第１類は、六本の柱を持ち平面形が六角形を呈するものである。形態としては左右対称形となり、均整がとれている。本遺跡では１棟が確認できた。第２類は、奥柱の位置が外側にあって、鋭角的な平面形態を呈するものとしたが、この角度の差異によってａ類とｂ類とに細分できる。第３類は、奥柱の位置が住居内の中心に近づき、第２類に比して鈍角を呈するものである。奥行きの長さによって、今回はａ類・ｂ類・ｃ類の３類に細分した。ａ類は、第２類の形態とかなり近似するが、奥行きがなく奥柱での角度はかなり鈍角となる。ｂ類は、奥行きがあって左右にある側柱の間隔も一定して、全体としては均整のとれたプランとなっている。ｃ類は、基本的にはｂ類に近いが奥行きが極めて狭く、奥柱での角度もかなり直線に近くなり、全体のプランも長方形状を呈するものである。本遺跡では１例であり、斜面の傾斜が強くなるところに位置していることから、多分に地形に左右された形態の変形である可能性が高い。

第１類については、中央の土坑から出土した土器群によって、本遺跡では最古となる前期最末期に比定されている。第２類との形態的な関係では、柱の数を合わせれば互いに類似したプランを呈することから、第１類から第２類への系譜がたどれそうである。同様に、第３ａ類の形態と、第２ｂ類とはかなり類似性が強いことから、第２類から第３ａ類への変遷も指摘できそうである。このことは、住居の重複として、第１類と第２ａ類、第２ａ類と第２ｂ類、そして第２ｂ類と第３ａ類という３つの事例が存在し、柱穴の一部を共有して重複していることから、時期をそれほど隔てずに建て替えもしくは再利用等がなされた可能性が高い。以上のことは、各類が第１類→第２ａ類→第２ｂ類→第３類（ａ）という変遷観で捉えられる可能性を秘めていることとなり、重複する３事例の前後関係も想定できることになる。

屈振坂縄文集落における変遷とは、基本的には住居形態の分類とその変遷観に連携する。前述したように、住居の平面形態を検討すれば少なくとも４段階の変遷が予測でき、第３ａ類から第３ｂ類への変遷を加えると５段階が想定できる。ここでは、この５段階を整理し、３期に大区分しておきたい。

第Ⅰ期は、住居形態第１類の段階とし、本遺跡ではＳＩ－126住居跡が該当する。第Ⅱ期は、住居形態第２類の段階で、重複関係と住居形態の細分により２時期に細分される。古段階のａ小期では、ＳＩ－161・ＳＩ－98住居跡の２棟、また新段階のｂ小期でもＳＩ－79・ＳＩ－99の２棟が検出されている。第Ⅲ



第6図　屈振坂縄文集落における住居群の変遷試案（1：300）

期は、住居形態第3類の段階であり、第II期と同様にして新古2段階に細分できる。古段階のa小期は、ＳＩ－108・ＳＩ－159bの2棟、新段階のb小期ではＳＩ－159a・ＳＩ－107・ＳＩ－142の3棟の住居跡が該当する。各時期の住居数は、平面形態が判明したものだけであるため、平均すればおおむね3棟が同時存在し、集落を構成していた可能性が高いものと考えられる。

集落の変遷で捉えられた各時期については、第Ⅰ期はＳＫ－118土坑から出土した第Ⅰ群土器から、前期最終末に比定することができる。第II期および第III期については、住居形態からすれば、概してスムーズな変遷がたどれることから、相前後した時期が想定される。しかし、第Ⅰ期としたＳＩ－126住居跡の形態とは、大きく変化していることから、第Ⅰ期と第II期についてはある程度の断絶を想定せざるを得ない。本遺跡の出土土器群からすれば、第II期と第III期は第II群土器の時期として捉えることが可能であり、中期初頭期の幅の中で理解されるものと判断したい。

4）　第II類型集落の性格とセトルメント・システム

従来の集落論は、どちらかといえば大規模集落を中心に据えて検討が進められ、いわゆる小規模集落は脇役に回っていた。この背景には、大規模集落＝中核集落とし、これを頂点とした言わばピラミッド型志向の集落論が前提にあったように思われる。が、果たしてそうであろうか。また、従来の集落論には、かなり細分化して論じられる傾向が見受けられるが［丹羽1987］、その結果から縄文社会の何が見えるのか

については課題が多いように思われる。

本地域における集落類型については、大きく二大別して類型を試みた。両者の関係とは、単に中核的な集落とそれに付随するという関係ではなく、車の両輪のような密接な関係が存在するように思えてならない。屈振坂遺跡の縄文集落は、本地域においては第II類型集落の典型的な事例の一つと評価することができる。当該集落を理解するということは、必然的に第I類型集落へのリサーチともなり得る。本項では、第II類型集落の特徴から、第I類型集落との関連性を考察し、問題提起的な意味合いから両者の性格付けについて試案を述べてみたい。

第II類型集落と住居構造　屈振坂遺跡の縄文集落から特徴つけられる第II類型集落とは、比較的狭い台地上もしくは尾根筋などに立地する。遺構組成で見ると、土坑とピットが主体をなし、広場を特に設定しないが、食物残滓等を廃棄する区域をもち、集落を形成する上での規範は看取できる。土坑の性格は墓坑と考えられ、貯蔵穴の存在は極めて希薄である。また、ピットについては、性格を明らかにできないもの、あるいは木根痕などが多少含まれるであろうが、大半は柱穴と考えられる。これらの柱穴から復元できる住居には、半地下式の竪穴住居は存在せず、すべて平地式と考えられるもので構成されている。平面形態については、床面の検出事例がないことから確認できないが、円形や楕円形と推測され、各柱穴を結んだ図形では屈振坂の場合、前期最終末では6本柱：六角形、中期初頭では5本柱：五角形（野球ベース形）を呈する。ただし、柱穴の配置には強い規制がなく、形態は一律ではない。しかし、中期初頭では5本柱で共通しており、上屋の構造そのものの造作では、一定の建築方法があったことが推定できる。しかし、柱穴の規模及び深度は極めて矮小であり、簡易な上屋構造しか持ちえない住居で構成されていたことが判る。炉跡の存在が不明確であることも本類型の特徴である。屈振坂遺跡の場合では、同時期同時存在する住居数は、おおむね3棟前後で、検出された遺構から小規模遺跡と評されても、集落としては決して小さくない。遺物の出土は概して少ないが、土器類や石器類とも日常的な生活をする上での組成はそろっている。ただし、第二の道具と言われるような土偶や石棒などはほとんど見受けられない。

夏冬集落の想定　さて以上において、第II類型集落の特徴について概略を述べたが、相対する第I類型の集落について、主に相違する点を略述しておきたい。まず、立地としては、河岸段丘や中位段丘において、平坦地が概して広く、一定の空間をもっている場に形成される。住居等の遺構群は、広場をめぐり環状を呈するとともに、竪穴住居が構築され、貯蔵穴も少ないながら存在する。柱穴の規模は概して大きく、大形の柱穴を持つ構造物、あるいは大型の建物が存在する。遺物には、第二の道具の存在が明らかである。

このように、第I類型と第II類型ではかなり対照的な様相をもっていることが確認できるであろう。両者の差異について、集落間の上下関係あるいは本村と出作り的な村の関係とするかなど、いくつかの視点がある。しかし、このような垂直志向では理解できない問題がある。それは、住居が簡易であること、貯蔵穴を基本的に持たないこと、炉跡が不明確なことなどである。このような集落は、半年近くも積雪に覆われる地域で、果たして越冬が可能なのであろうか。柱穴から想定される簡易な上屋構造では、数十cmの積雪でも倒壊の危険がかなり高い。貯蔵穴なしでは、越冬用食料の確保に不安が残り、厳寒期における暖房として炉の火気は不可欠であることから、炉床における焼土化が見られないことは不自然であり、さらに簡易な小屋掛けでは保温に必要な気密性に欠けるであろう。第II類型の集落とは、越冬もしくは積雪期への対応を欠いた集落の可能性が高いのではないだろうか。つまり、春から秋にかけての集落と考えることが妥当と判断されるのである。

また、第II類型の集落では、竪穴式の住居は存在せず、平地式の住居で構成される。両形式の住居の機

能や使用形態については、火山灰下に埋もれた古墳時代の屋敷の事例が参考となる。群馬県西組遺跡・黒井峰遺跡・中筋遺跡の事例では、複数の平地式住居群のほか竪穴式住居や高床式の建物がセットで１軒の屋敷を形成していたことが確認されている。このことは、同一屋敷内において、両形式が併存していることを意味する。そして平地式住居にも厨房施設があり、竪穴式にはなかった多量の遺物が平地式で出土し、２遺跡で被災した季節が夏と秋であったことが判明している。これらの事実は、竪穴式と平地式では季節による住み分けがなされていたことを示し、『日本書紀』景行天皇条における「冬則ㇾ穴、夏則柱住ㇾ巣」の記載とも符合するとされているのである［大塚1996］。群馬県の事例は、屈振坂遺跡の時代とは大きく隔たるが、竪穴式が雨に弱く、湿気が強い住居形式であることについては、時代差を考慮する必要はないであろう。したがって、平地式住居とは、春から秋にかけて居住した住まいであり、平地式の住居で構成される第II類型の集落とは、越冬の備えを持たない集落であったと考えたい[1)]。このことはすなわち、第Ｉ類型の集落が秋から春にかけて、越冬に備えた集落であったとすることになる[2)]。集落に居住する集団という面からすれば、積雪期にはいくつかの集団が集まって越冬し、春から秋にかけては個々別々に居住していた状況を示すことになる。秋と春、広場は祭りの場となったであろうし、冬はさまざまな情報交換がなされ、そして婚姻の季節となったのではないだろうか。

ところで、越冬用の冬集落への移動に際しては、それまで住した住まいは片づけられ、春再び組み立てられるなどといったことが繰り返されていた可能性が考えられる。しかし、屈振坂遺跡で推定された住居プラン（柱穴の配置）の形態分類と、同時存在した住居の変遷とは、想定上ながらかなり整合していると言わねばならない。したがって、屈振坂の縄文集落が、春から秋にかけてのシーズンに集落が営まれたとしても、毎年のシーズンに必ず訪れていたというわけではなく、断続的であった可能性も示しているのである。このことは、第II章でも述べたとおり、当該期の遺跡数増加の背景と考えられる。本地域における遺跡数の増加とは、見かけ上のものであり、正確な人口とは、第Ｉ類型の集落によって積算されることになる。遺跡数が極めて増加するという本地域の前期後半～中期前葉期のセトルメント・システムとは、夏冬集落を前提として理解されなければならないのである。

５）　おわりに

最後に、本論での課題と今後の課題の意味を込めて述べ終わりとしたい。

前段において、夏冬集落を想定したが、この発端とは前期後半から中期前葉における遺跡数の急激な増加があり、その背景を見極めることにあった。このため、柏崎平野における該期の縄文集落について類型化を試み、二大別された集落類型の性格について、屈振坂における縄文集落の検討から夏冬型の集落を想定した。今回の試みは、遺構密度が希薄な遺跡について、どのように理解するのかという問題提起を意図している。したがって、集落復元に用いた住居などは、床も炉跡もなく、柱穴の配列も整っているとは言いがたいものであり、このような住居をどこまで認定可能かは、今後ほかの遺跡における検証が必ず必要であることは言うまでもない。また、従来のいわゆる大規模集落を中心に据え、地域の中核的な集落から縄文社会を見極めようとするピラミッド型志向による集落論では、当該期に激増する第II類型の集落を理解しがたい。とくに、今回対象とした前期後半から中期前葉期ではそれが顕著であり、中期中葉以降とは違った展開があったのではないだろうか。その意味においては、前期中葉頃とともに中期前葉期末は一つの画期をなしている可能性が高いように思われる。

ところで、屈振坂遺跡の調査は、前述のとおり７月後半から８月中頃までに実施したが、時期的には真

夏に相当する。発掘調査は、雑木の林をすべて伐採、表土を重機によって剝いでなされた。実は、日陰が何もなく大変暑い調査となったのである。新潟県地方は、関東地方とは異なり、夏はよく晴れて暑い。屁振坂の縄文集落を夏集落と仮定したとき、その景観とはいかなるものであったのかと考えさせる。雑木の林が密集していたとすれば、たとえ木陰があり丘の上であったとしても、風通しは良くない。かといって、全てを切り払ってしまえば、真夏の太陽に晒されてしまうことになる。下刈りがなされ、手入れされた林の中が住み良かったように思える。しかし、冬集落の景観とは、広場が設定されていること、煮炊き・暖房には薪が必要であり、いくつかの集団が住居を構えるとすれば、その用材が必要となる。したがって、集落域の樹木は伐採されていた可能性が高く、そのほうが日当たりが良好である。単なる経験からの憶測ではあるが、新潟県地方における環境に適した集落の景観があったのではないだろうか。

もう一つ、今回、春から秋にかけての夏集落と、秋から冬にかけての越冬可能な冬集落を想定したが、夏冬集落が必要となる前提には、実は本地域における積雪期の存在を見極めなければならない。ただ、この問題については、いまだ定説はなさそうなため、見通し的に触れておきたい。

冬、日本海沿岸を中心に雪を降らせるメカニズムとは、寒気にさらされた日本海の海水面から立ち上る水蒸気が、上空において冷やされ、日本列島の背骨にあたる山脈によって遮られるためとされている。したがって、日本海における海水面の温度上昇がポイントになるものと考えられる。日本海への本格的な対馬暖流の流入は、およそ8,500年前頃とされることから［安田1982］、海水温の上昇もこの時期以降に顕著となったものと考えられる。海水準の変動は、富山湾の事例からすれば、「１万年前に水深40mにあったのが8,000年前に水深20mまで上昇し、6,000年前には現海水準より高くなり、縄文海進の高海水準は6,000～4,000年前までつづいた。それが、2,000年から1,500年前の間、縄文晩期、弥生期の２m前後の海水準低下をみて約1,500年前に現在に回復」したとされ、この海水準変動の型は新潟県地方でも大同小異とされている［藤井1986］。したがって、海水準のピーク期、冬の日本海からはかなりの水蒸気が立ち上り、豪雪となった可能性が高いのではないだろうか。このピーク期前半の時期とは、本地域では遺跡数が増加する前期後半から中期前葉頃に相当する。環境適用への過渡期、夏冬集落は大きな意味を持っていたのかも知れない[3)]。

今回述べたことは、今後更に検証が必要であるが、当該期における状況が仮に的を得ていたとすれば、中期中葉以降への影響は大きかったことが予測できる。それは、柏崎平野と言ったややせまい地域ではなく、もっと広い地域で見極める必要があるかも知れない。この課題は、今回設定した時期の範囲外であり、別の機会に譲らざるを得ないが、縄文時代の通史的な理解のためには必要な課題であり、今回の試論と合わせ、検討を深めていくこととしたい。また、集落形態についても、単に細分すれば良いものではなく、綜合して見極めていく必要もあろう。さらに、自然環境的な差異は、当然該地に住む人にとっては、大きな制約であり、また異なった利用価値となる。したがって、縄文集落の地域的な展開は、今後更に突き詰めていく必要があり、相互の比較検討は、当時の情勢を理解していく上で重要な意味をなすものと思われる。今回の検討とは、一つの叩き台であり、更に検証を深めることとしたい。

註

1）　平地式住居については、夏向きの住居であり、竪穴式は冬向きの住居であったと考えられる。ただし、竪穴式はその構造から夏には向かないものである。しかし、平地式の場合は、上屋構造や小屋掛けによっては冬でも快適に過ごすことが可能な住居であり、竪穴式住居が無くても越冬可能な集落が存在することは当然のことと考えられる。この場合、柱穴の規模に差異が生じるものと考えられる。

2）　第Ⅰ類型とした集落とは、秋に各単位集団が集合して越冬し、春には再び個々別々に小集落を営むと想定した。しかし、このような集落は、やはりその地域にあっては核となり得る集落であることから、春に至って全ての単位集団が立ち去るとは考え難い。第Ⅰ類型の集落が形成されるということは、それだけ安定した基盤を備えていると考えられ、１ないし数個の単位集団は残存し、当該集落の維持管理も担っていた可能性が想定できる。

3）　早期や前期前半以前は、概して移動の機会が多く、中期中葉以降は定住期間の長期化が大集落の形成へと至っていた可能性が考えられる。本稿で対象とした時期は、ちょうどその中間期に相当することから、移動と定住及び集落形成という観点からすれば、通史的な画期をなしていると言えるのではないだろうか。

2　縄文時代前期末葉から中期初頭への土器変遷

1）　はじめに

今回の調査で屈振坂遺跡から出土した縄文土器は、概ね前期末葉（第Ⅰ群土器）と中期初頭（第Ⅱ群土器）に大別されるものであった。第Ⅰ群土器には貼付による鋸歯状文や彫り込みの浅い結節状沈線文の施された資料等がみられ、第Ⅱ群土器には隆帯文を主体に文様が構成される土器がある等、それぞれ特徴的な内容を示しているといえよう。そのため、本節では縄文時代前期末葉から中期初頭における土器群の変遷を概観し、屈振坂遺跡出土土器の編年的位置付けを行いたい。変遷の概観は新潟県下で出土した資料を主体的に行ったが、北陸地域では比較的該期資料の整っている石川県能都町真脇遺跡例［能都町教委・真脇遺跡発掘調査団1986］も基本的骨格に含めた。また、新潟県の地域性等から、南東北地域の資料も補足的に視野に入れた。なお、今回提示する変遷試案は、型式論的方法を基盤に資料を操作し、層位的な出土状況等の明らかな事例については、それを参考に補正して作業を行ったものである。

2）　縄文時代前期末葉土器群の変遷試論

昭和34年に柿崎町鍋屋町遺跡の発掘調査が実施されて以来、鍋屋町式土器は新潟県における縄文時代前期末葉を代表する土器型式となった。本項では、この鍋屋町式以降を対象にして、土器の変遷を試論し、併せて屈振坂遺跡第Ⅰ群土器の位置付けを行いたい。

第1段階　文様モチーフは蜆ヶ森式や刈羽式からの流れの中にあり、無文地上に結節状浮線文で装飾し、浮線文の間隔がやや広い一群である。第7図－1・7を示準資料とした。資料数が少なく、一時期を占めるというよりも、先行土器群から後続土器群へ移行する様相を示す過渡期的な段階であろう。口縁部が外反あるいは外傾し、頸部で一旦括れた後、胴部が張り出している。平縁のものと波状口縁のものがある。口縁部に横位結節状浮線文を3条施し、頸部には入組状文が描かれ、その間を菱形状や斜行の結節状浮線文で充塡する。入組状のモチーフが欠落し、菱形状になる例（5）や、口唇部に粘土紐を縦位に貼り付け、その下位に3条一対の結節状浮線文を鋸歯状に施し、横位結節状浮線文を3条施文する例（1）等もみられる。入組状文は上下方向から伸びているが、中央で連結しないのが特徴的である（1・7）。頸部下端にも横位結節状浮線文を3条施文して器面を区画し、胴部には羽状縄文や斜行縄文等が施されている。大木5式に比定できる資料も魚沼地域等にみられ（8）、南東北地域からの影響も大きかったと考えられる。そのため、補足的に宮城県や福島県の大木5式も図示した（2～4・9）。口唇部に施されたキザミの下位に、3条一対の横線を施文し、その下段には3条の沈線による鋸歯状文がみられる例もあり（9）、ネガとポジ、沈線文と結節状浮線文の違いはあるが、ある程度の類似性が看取できる。したがって、この段階は大木5式に対比できると思われ、諸磯c式との併行関係も示唆される。なお、6は結節状浮線文の間隔が広いこと等から第1段階に含めたが、第2段階まで下る可能性は大きい。

第2段階　この段階の最大の特徴は、印刻技法が多用されることである。そのため、鋸歯状印刻文を口縁部に施した例が大半の資料に認められる。また、頸部以下に施される結節状浮線文や半隆起線文等の間隔が狭くなることも顕著な特徴として挙げられる。型式論的方法によって、更に細分できると思われ、ここに試論するが、特に新しい様相を示す一群は第4段階へ直接移行することも考えられるため、第3段階と併行する可能性が高い。

第2段階の古い様相を示す一群は、11・12・18・19を示準資料とした。10は、第1段階からの過渡期的資料として位置付けた。口縁部に鋸歯状印刻文を施文し、第1段階における口縁部の結節状浮線文による鋸歯状文（1）が鋸歯状印刻文に変化したことが想定される。しかし、12のように鋸歯状印刻文が欠落する資料もみられる。頸部の入組状文は連結し、渦巻状あるいは蕨手状になるが、円形状にはならない。このような渦の巻き方は、蜆ヶ森式からの系譜を残すものであり、北陸的な要素といえよう。口唇部の貼付粘土紐は幅広に変化して瘤状を呈し、数は減少する。渦巻状文・蕨手状文の間を充塡する文様に大きな変化は認められないが、結節状浮線文が密施されたことにより多条化している。また、形式や器面の分割等は第1段階のものをほぼ踏襲しているが、円筒形になるもの（12）、あるいは鉢形で胴部にまで結節状浮線文が施される例（18）等がみられるようになる。第2段階の特徴は印刻技法が多用されることとしたが、文様のモチーフ間を印刻する例（19）が出現するのもこの段階である。17には結節状浮線文に変って半隆起線文が施されているが、この段階に対比することが可能であろう。なお、21は文様構成が示準資料とは別系統のものと考えられ、やや後発的な要素が感じられるが、口唇部の瘤状突起や口縁部の鋸歯状印刻文の特徴、あるいはその下に施される多条の横位結節状浮線文等から、この段階に一旦含めたい。

第2段階の新しい様相を示す一群は、古い様相を示す一群に比べて後発的な要素が認められることから分離したものであるが、完全に後続するものではなく、古い様相を示す一群との重複期間が想定される。22・24・30・31・32を示準資料とし、23は古い様相から新しい様相への過渡的な資料、27～29は第2段階全般に伴う粗製土器として捉えた。これらの一群では、第1段階で認められた頸部の括れや胴部の張り出しはやや緩くなっている。口唇部上の瘤状突起は、古い様相のものに比べてより大きくなり、数も減少して第3段階と共通した様相を示す。この瘤状突起がさらに大形化し、強調されて耳状を呈する資料もみられ（22・25・31・33）、これらの要素から第3段階と一時期を共有する可能性もある。文様に半隆起線文を用いる資料が増加するが、一方で結節状浮線文も残存している。頸部の渦巻状文・蕨手状文はより精緻化し、その脇に充塡される菱形状文も渦巻状文や斜行する文様に沿って描かれるようになる。また、文様の脇を印刻する資料も増加する。横位の区画文はより多条化し、平行沈線文によって描出されたその上端あるいは下端に、結節状浮線文や鎖状隆帯を施している例（22・32）もみられるようになるが、これらは真脇遺跡例に顕著であり、地域差として捉えたい。しかし、真脇遺跡例では、器面の要所に結節状浮線文を配する例（22）や、波状口縁に沿った文様下を水平横線で区切る例（24）が存在する等、器面の横位分割が多段化する兆候が認められ、第3段階への準備が既に始まっているといえよう。なお、33の胴部文様からは第3段階の土器群との関連性が看取されるが、器面の横位分割が多段化していないこと、横位区画文に直接連結して渦巻状文が施文されていること等から第2段階に含めた。35は54と共通した文様構成が認められ、第4段階にまで対比可能なものであるが、口縁部文様が33に近似しているという視点から本段階に置いた。34は平行沈線文を雑然と施し、彫り込みが浅いこと等から、施文の簡素化が認められ、第4段階へと直接変遷する可能性もある。このように、第2段階の新しい様相を示す一群には、第3段階と共通する要素や第4段階へと移行することが想定される資料が認められ、第3段階とある程度の併行関係にある可能性が示唆される。

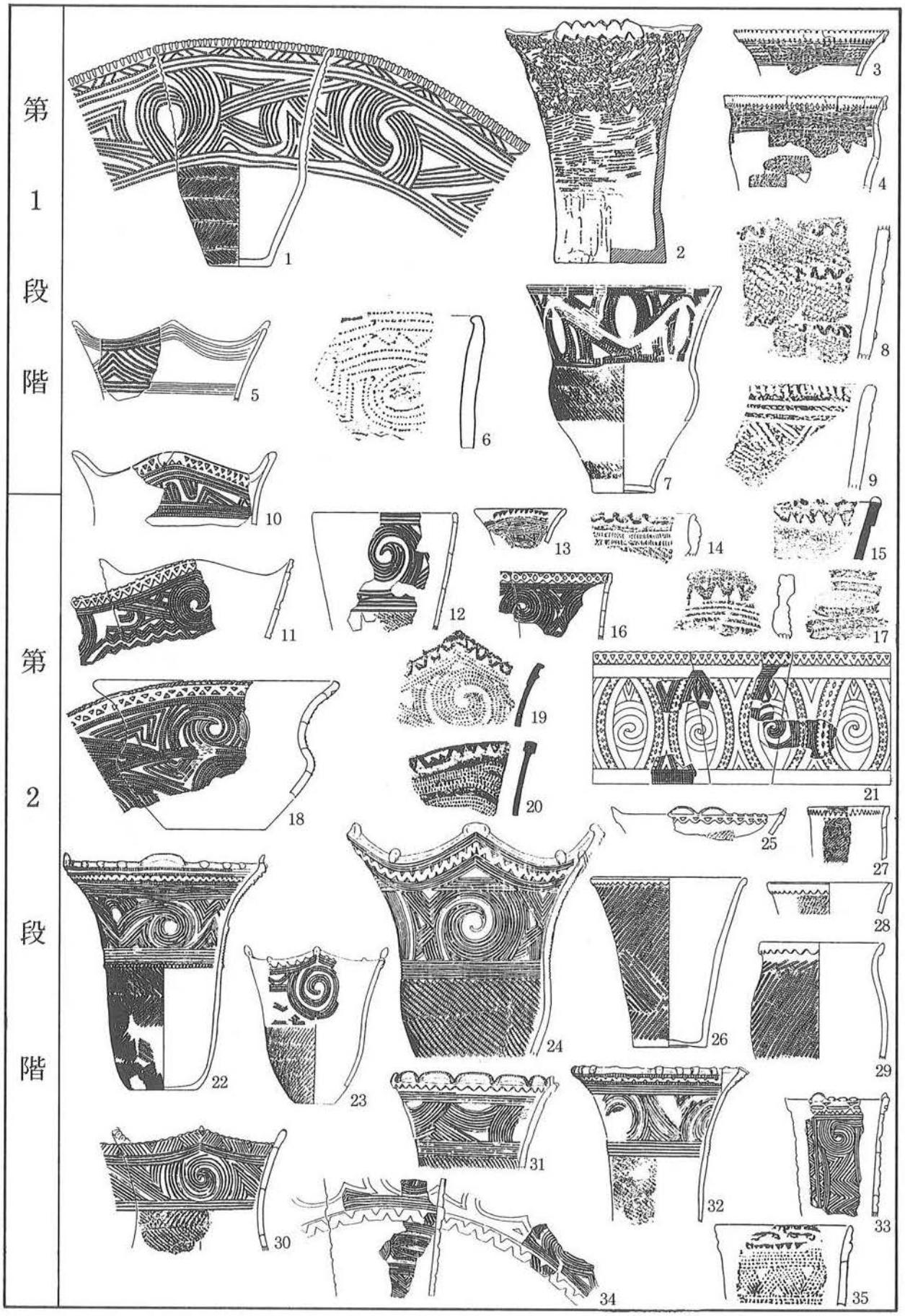
第3段階　福浦上層式の新しい類［小島1986ａ］を示準資料とする。真脇遺跡例に顕著に認められる一方、鍋屋町遺跡例には明確でないことから、第2段階の新しい様相との関係は、時期差というよりも地域差である可能性が極めて高い。しかし、両段階の差異は大きく、第2段階に比べて後発的要素が多いことから、便宜的に第2段階とは分離したものである。また、真脇遺跡においては、本段階の土器群がⅠ区イ

ルカ層南半からまとまって出土しているが、同一地点・同一層において第2段階の土器群が皆無であったことも、一旦分離することとした根拠である。将来的な資料の増加に期待し、特に新潟県内における分布状況を把握する作業を進めることによって、検証を深めていきたい。

第3段階は、口縁部が外反あるいは外傾し、胴部に丸味をもつ、平縁と波状口縁の深鉢で占められている。第2段階のものに比べて、頸部の括れが高い位置にあり、やや胴長になっている。そのため、第2段階との関係を時期差や地域差ではなく、形式の差異に起因する文様モチーフの違いとして理解することも可能であるが、やや後発的な要素を有することは否めない。口唇部には瘤状突起や耳状突起が配されるが、貼付粘土紐や結節状浮線文を鋸歯状に施すものもみられ（37・38・40・41）、さらに口縁部の形状に沿って結節状浮線文を施文する資料もある（46）。第2段階にみられた、波状口縁に沿った区画下に施された水平横線を波状の区画文に連結せずに施したり、器面の要所に配された結節状浮線文の間に単位文を施すこと等により、口縁部から頸部にかけての器面の分割がより多段化する。多段化によって文様の施文帯が増設されたことに伴い、この部位の主要文様としては、鋸歯状印刻文の他、結節状浮線文が大きな比重を占めるようになる。結節状浮線文は三角状や菱形状、あるいは半楕円状を基調とするモチーフで連続的に施され、半隆起線文が地文として施文されるが、これらのモチーフが欠落するものもみられる（41・43・45）。第2段階に含めた22では、数条の半隆起線文の上端や下端に結節状浮線文を施していたが、この部位に三角形を基調とする波状文等を結節状浮線文で施せば、そのまま半隆起線文は地文となる。第3段階の地文は、おそらくこのような過程によって獲得されたものであろう。一方、第1段階から第2段階にかけて、頸部の主要文様であった渦巻状あるいは蕨手状の文様は、胴部文様として一部の資料に残存するものの、この部位においては消失する。これは渦巻状文・蕨手状文の無意味化、あるいは形骸化を端的に示していると思われ、本段階が時期差であるとすれば大きな画期として捉えることができよう。また、本段階の結節状浮線文による波状文や三角状文・菱形状文等は、第4段階における貼付粘土紐による波状文へと移行することが想定できる。横位分割の多段化、口縁部から頸部にかけての地文の発生、及びその部位における渦巻状文・蕨手状文の消失等、本段階は第2段階から第4段階へ至る中間的な様相を示しており、これらが本段階の土器群に第2段階よりも後発的な要素を看取した所以である。しかし、北白川下層IIc式や同III式等には、地文として縄文を施す例がみられることから、第4段階における地文に関してはこれらの影響を充分に考慮する必要があろう。

また、口縁部から頸部にかけての文様帯が狭小化し、多段化する反面、胴部文様帯が拡大することも本段階の特徴で、第4段階においてもこの傾向が受け継がれる。しかし、主要な文様の施文域は依然として口縁部から頸部にあり、口縁部や頸部を主体的に飾ることは中期中葉に至るまで続く。胴部文様は、半隆起線文を緩やかな弧状に下垂させて器面を縦に区切り、その中を半隆起線文で埋めている。渦巻状文のみられるものと直線あるいは弧線が主体のものがある。第2段階とした33の胴部文様は、本段階の土器群に似たものであるが、渦巻状文は頸部の横位区画文に直接連結して伸び、施文部位も頸部に相当する位置で、無意味化・形骸化の兆候を示してはいない。しかし、本段階においては、渦巻文が横位の区画文からではなく、縦位下垂文から伸びており、施文部位も低く、視線の集中する位置に配されていない。そのため、これを渦巻状文・蕨手状文等の無意味化・形骸化を示しているものとして捉えたい。なお、渦巻状文以外の胴部文様は、三角状や半楕円状に施されており、第4段階にみられる胴部上半の三角状文や波状文へと変遷すると思われる。

第4段階　結節状浮線文に変って、非結節状の粘土紐貼付文が多用されることを型式論的な画期として

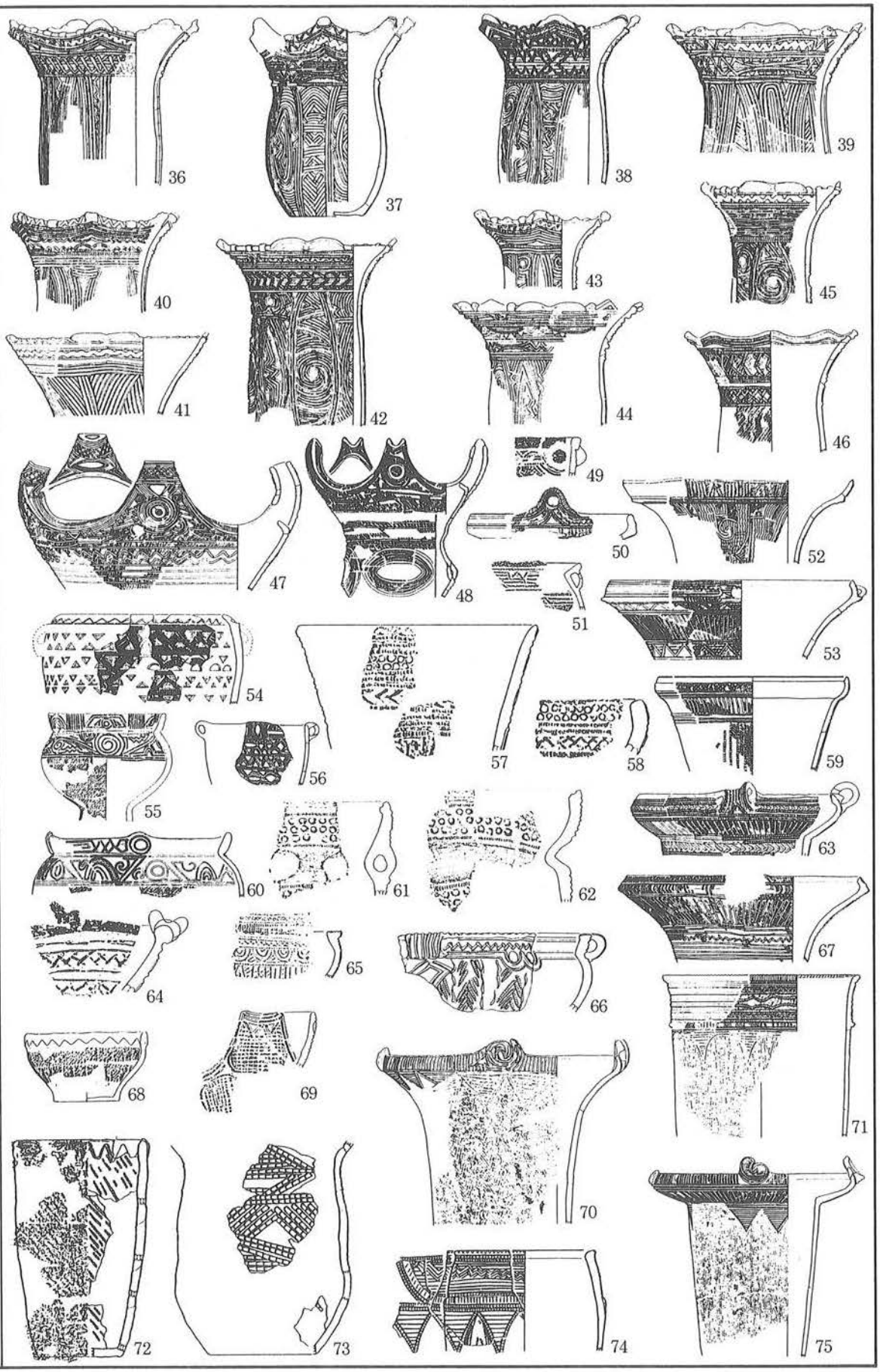


第7図　新潟県周辺地域の縄文前期末葉土器群変遷試案

※各段階内の上下が、必ずしも時間的序列を表わすとは限らない。　※第3段階は、第2段階に後続することが予測できるが、地域差である可能性も高い。

第3段階

第4段階



（新潟）尼振坂＝72・73　鍋屋町＝1・5・6・10～13・15・16・18～21・25～30・33～35・56　辻の内＝54　高塩A＝60・74　善光寺浜＝23
重稲場＝49～51・57・58・64・66・69　豊原＝63　干溝＝8・14・17・61・62　（富山）安田古宮＝7　小泉＝24・31
（石川）真脇＝22・32・36～48・52・53・59・65・67・70・71・75　（福島）青宮西＝9　（宮城）雷塚貝塚＝2　西林山＝3・4　小梁川＝22・55・68　（縮尺不同）

捉え、本段階を設定した。真脇式［小島1986ｂ］及び朝日下層式［小島1986ｃ］を示準資料としたが、本段階には不明瞭な点も多い。真脇式は真脇遺跡Ⅰ区イルカ層南半から、第３段階とした福浦上層式と出土区・出土層位を同じくしてまとまって出土した。一方、朝日下層式は真脇遺跡Ⅰ区イルカ層北半で、新保Ⅰ期［加藤1986］と混在して出土しており、出土地点から福浦上層式及び真脇式とは分離可能とされている。真脇式は縄文地に貼付粘土紐によって文様を描出することを特徴とし、朝日下層式は真脇式に比べてより細い粘土紐、いわゆるソーメン貼りを縄文地上に施すことを特徴として設定されたものであるが、真脇遺跡での出土状況だけをみると、それぞれの先行型式あるいは後続型式との分離はできない。また、真脇式と朝日下層式には、共通する要素が認められ、ともに第３段階からの変遷が想定されること。あるいは、朝日下層式には新保式と共通する文様構成がみられること等から、本段階の設定に際しては、あらかじめ第３段階及び第５段階（第８図）と時間的に重複する期間を想定する必要があろう。真脇遺跡例以外では、出土状況によって本段階の位置付けを行うことが可能な事例が管見資料中には認められず、現時点では明確な回答を出し得ない。そのため、本段階は第３段階よりも後発的で、かつ第５段階よりも先行的であることから便宜的に設定したものに過ぎず、更なる検証が必要である。

第４段階における土器群の形式は多岐に分化し、キャリパー形の深鉢も出現する。文様は結節状浮線文に変り、粘土紐貼付文を多用することが特徴であるが、地文として縄文を用いるようにもなる。縄文地文の獲得には、北白川下層Ⅱｃ式や同Ⅲ式等の影響による外的要因の関与を考慮する必要があろう。また、本段階においても、結節状浮線文や結節状沈線文を施す資料もみられ、これらの技法が完全に消失する訳ではない。さらに、鋸歯状印刻文が主体的存在でなくなることも特徴として挙げられる。新潟県内においては、他地域の土器型式に比定可能な資料が比較的増加し、地域間交流が活性化したことが示唆されるが、このような交流は少なくとも中期初頭にまで持続される［中野1994］。本段階は更に細分することが可能と思われるが、不明瞭な問題が多いため、今回は細分を行わないこととした。

本段階の土器群は、口縁部から頸部を多段に分割し、胴部文様帯を広く設定する等、基本的に第３段階における器面の分割を踏襲している。口唇部には縦位の貼付粘土紐を施すものや結節状浮線文を施文するもの、あるいは内面にキザミを施すもの等が出現し、口唇部文様が多様化する。口縁部から頸部にかけては、結節状浮線文や粘土紐貼付文等が縄文地上や無文地上に施される。モチーフは三角形を基調とする波状のものとともに、縦位や斜格子目状のものが発生する。特に、53の口縁部や頸部に施された三角状の結節状浮線文は、第３段階からの系譜として捉えたい。頸部の三角状文内は横位の貼付粘土紐によって充填されているが、これが次第に下端の区画を突き破って、70・71・74・75にみられる頸部や胴部上半のＶ字状文、さらには中期初頭のＹ字状文へと変遷すると思われる。74はＶ字状文の描出に結節状沈線文を用いており、従来の粘土紐貼付文から半隆起線文へという編年観の可否を問うための鍵を握る資料といえよう。また、48や67等の頸部に施されたジグザグの波状文は、施文手法や施文部位等に共通点が見出され、真脇式と朝日下層式が時間的に一部重複する可能性を示唆している。波状口縁の資料では、波頂部に円形文や円形突起を施す資料がみられ、一部平縁のものにも波及する（49）。これは37にみられたような波頂部の突起が変形したことが想定できるとともに、他地域からの影響も関与すると思われる。橋状突起あるいは眼鏡状突起（61・63）や、「の」の字状突起（70・75）も出現する。口縁部に円形の粘土紐貼付文が多用されるのも、本段階の特徴といえよう（57・58・59・61・62・65）。一方、54・56のように晴ヶ峰式からの影響を示す一群や、60のように大木６式との関連を示唆する資料等が新潟県内で増加する。60の類似資料として宮城県小梁川遺跡例（55）を図示したが、60に施された半円状文内に波状文を充填する文様は、

京都府北白川小倉町遺跡例等にも認められる。北白川小倉町遺跡例は北白川下層IIc式に編年されており［網谷1989］、従来の大木6式と北白川下層IIc式の時間的関係にも一考の余地を求める資料となろう。

本段階の土器群には、中期初頭の新保式と非常に近似した文様構成をもつ資料が認められる（70・75）。これは粘土紐貼付文と半隆起線文という相違によって、朝日下層式と新保式に分離された結果に起因するのだが、本段階には平行沈線文を格子目に施す資料もみられる（69）。竹管状工具による粘土紐の調整が次第に強調され、独立した［小島1986c］とすることは妥当であろうが、それは後発的要素を示すものであって、時間的分離の根拠とはならないであろう。新潟県内はもちろん、他地域の当該期資料には、半隆起線文あるいは平行沈線文を用いる資料が多くみられる。つまり、粘土紐貼付文と半隆起線文は併存しているのである。北陸だけが例外とは思えず、特に70や75等は新保式と併行関係にある可能性が極めて高いのではないか。真脇遺跡I区イルカ層北半で、両土器型式に含まれる資料が混在していたという事実も、時間的重複関係を示唆するデータとなろう。したがって、今回は型式論的視点によって第4段階と第5段階を区分したが、両段階は一部が併行関係にあることが想定されるのである。ただし、半隆起線文が粘土紐貼付文に比べて後発的な要素であることを否定するものではない。

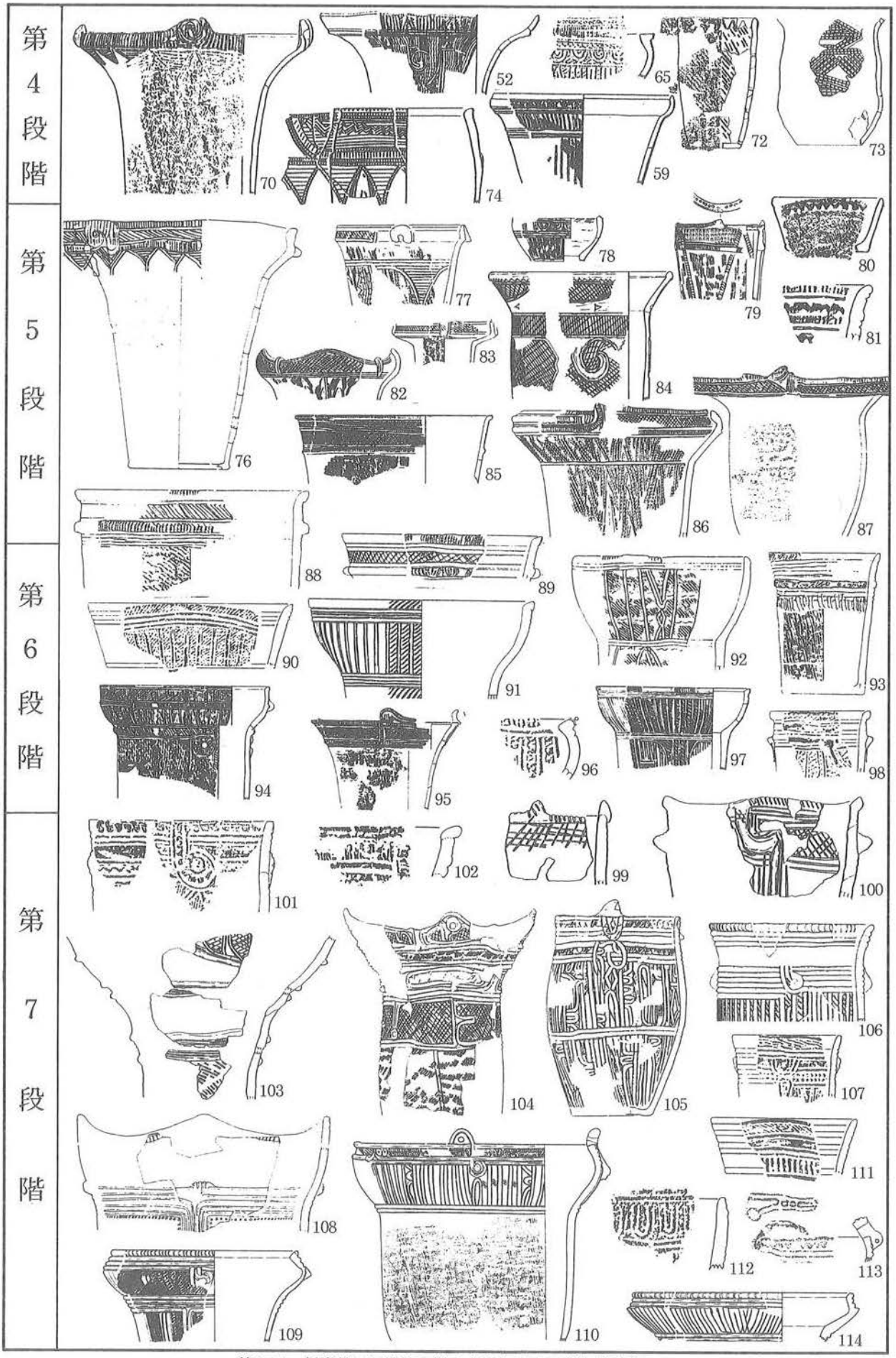
屈振坂遺跡第I群土器の位置付け　SK－118から共伴した第I群土器の一括性は極めて高い。72は口縁部に鋸歯状文を施し、頸部以下には斜行縄文を施文している。鋸歯状文は印刻技法を用いず、あらかじめ整形された三角状粘土の貼付によるものである。そのため、第2段階や第3段階等にみられた鋸歯状印刻文とは文様効果こそ同様であるが、施文技法の点で一線を画している。むしろ、施文技法の点では第4段階の粘土紐貼付文に近いのではないか。また、鋸歯状文の縁は棒状工具によって調整されているが、これも粘土紐貼付文の調整技法に類似するものと思われる。このような視点から、72を朝日下層式併行期に比定し、縄文時代前期終末期の第4段階に含めた。

73の類似資料は、管見資料中に見出せなかった。このような器形と文様の組み合わせは、特異であるといえよう。72との一括性が高いため、第4段階に位置付けた。結節状沈線文は彫り込みが浅く、形骸化の現れとして捉えることも可能である。その場合、形骸化した結節状沈線文を密施する手法は、中期初頭の集合沈線文との関連を示唆するものとも思われる。三角状文の内側に横位の直線状文を充填することも、第4段階の土器群に認められる特徴と一致する。しかし、三角状文の上下を横線で分割するモチーフは、第3段階の37にもみられ、3条一対の斜行文は第1段階や第2段階の土器群からの系譜として捉えられる要素であろう。そのため、73はこれらの系譜を受け継ぐ、第4段階の資料として理解したい。

3）　縄文時代中期初頭土器群の変遷試論

新潟県内における中期初頭の土器編年については、幾つかの試案が近年にも示されている［佐藤1991・寺崎1995］。今回提示する中期初頭土器群の変遷試案は、これらの論考と大差ないため、本項では各段階を概観する程度にとどめ、屈振坂遺跡第II群土器の位置付けを行いたい。なお、ここでは新保式期［加藤1986］までを対象とし、各段階の番号及び資料番号は、混同を避けるため前期末葉からの連番とした。

第5段階　新保式I期［加藤1986］に相当し、新潟県内においては第8図－76・87を示準資料とした。口唇部に絡条体圧痕文が施される資料がみられるようになるが、口縁部から胴部上半にかけての文様構成や、胴部の木目状撚糸文等、第4段階に含めた土器群とは不分別な関係にある。このような関係は、76・85・86・87等のような形式にのみ認められることではなく、78・80・81に施された文様や、79の口唇部に施文された円形貼付文等からも看取される。そのため、施文技法の相違が即時間的単位に置き換えられる



（新潟）屏振坂Ⅱ72・73・99・100・103　山崎A Ⅱ76・87　岩原Ⅰ Ⅱ106・108　剣野E Ⅱ101・102・112　（石川）真脇Ⅱ52・59・65・70・78？80・84・85・94・95・97・109・110・113・114　高塩A Ⅱ74　タテ Ⅱ91　大沢 Ⅱ77・82・83・86・89・96　豊原Ⅱ81・88・90・92・93・98・105・107・111　（長野）上赤塩Ⅱ104

第8図　新潟県周辺地域の縄文中期初頭土器群変遷試案

※各段階内の上下が、必ずしも時間的序列を表わすとは限らない。　※各段階の番号及び資料番号は、第7図からの連番とした。　（縮尺不同）

従来の編年観の妥当性には、疑問の余地が大きいであろう。

第6段階　新保式II期［加藤1986］にほぼ対応する。縦位平行沈線文の間隔が広くなるのが特徴とされているが［佐藤1991］、口唇部には絡条体圧痕文に変り、回転縄文が施された資料が多くみられることも大きな特徴として挙げられる。新潟県内には資料が少なく、90・91を示準資料としたが、傾向として認識される程度で、時間差として捉えることが出来ない可能性もある［佐藤1991］。

第7段階　新保式III期［加藤1986］に対比できる段階で、横位無文帯が成立することを特徴とする。口唇部には、竹管状工具による爪形文が施されるようになる。第5段階にみられた口縁部の突起は、頸部にまで下垂するようになり、新崎式に至る過程が看取される。また、三角形印刻技法による蓮華文が出現するのもこの段階である。口縁部から頸部を多段に分割し、更に胴部も2分割する資料がみられるようになる（105）。104は「松原土器」新段階［三上・上田1995］に含まれる資料であるが、文様帯構成が105に類似していることから例示した。しかし、長野県においては「松原土器」の編年的位置付けが確定しておらず、本段階に対比させることの可否は、今後熟慮する必要がある。

屈振坂遺跡第II群土器の位置付け　第II群土器は、屈振坂遺跡出土土器の主体を占める。文様構成の把握が可能な資料として、99・100・103を図示した。100は口唇部に縦位撚糸文が回転施文され、縄文と撚糸文の相違があるものの、口唇部文様は第6段階に近い。一方、横位無文帯や頸部にまで下垂する突起等、第7段階と共通する要素を多く内包していることが看取される。そのため、第6段階にまで遡る可能性を残しつつも、第7段階に位置付けることが可能であろう。99は口唇部の文様が爪形文ではなく、キザミであることから、文様効果において第6段階との関連が示唆される。また、口縁部上の突起は左端がやや膨らみ、極小突起状を呈していることから、87のような左右非対称突起の残存形態として捉えられる。しかし、横位無文帯が既に成立しており、100と同様に第6段階の可能性を残しつつも、第7段階に位置付けたい。103は隆帯を主文様とするキャリパー形の深鉢である。隆帯によって器面を分割し、口縁部には半隆起線による斜格子目文を施し、胴部には斜行縄文を施文している。また、頸部下端及び胴部上端の隆帯上には、平行沈線文が施されている。横位無文帯が認められ、第7段階に位置付けられると思われる。104との関連性が感じられるが、「松原土器」の内容が不明瞭であることから、明確化できない。屈振坂遺跡第II群土器で、ここに図示した3点の資料は、いずれも半隆起線文あるいは平行沈線文を斜格子目に施しており、横位無文帯成立後にも斜格子目文が残存することを示す事例として捉えることができよう。

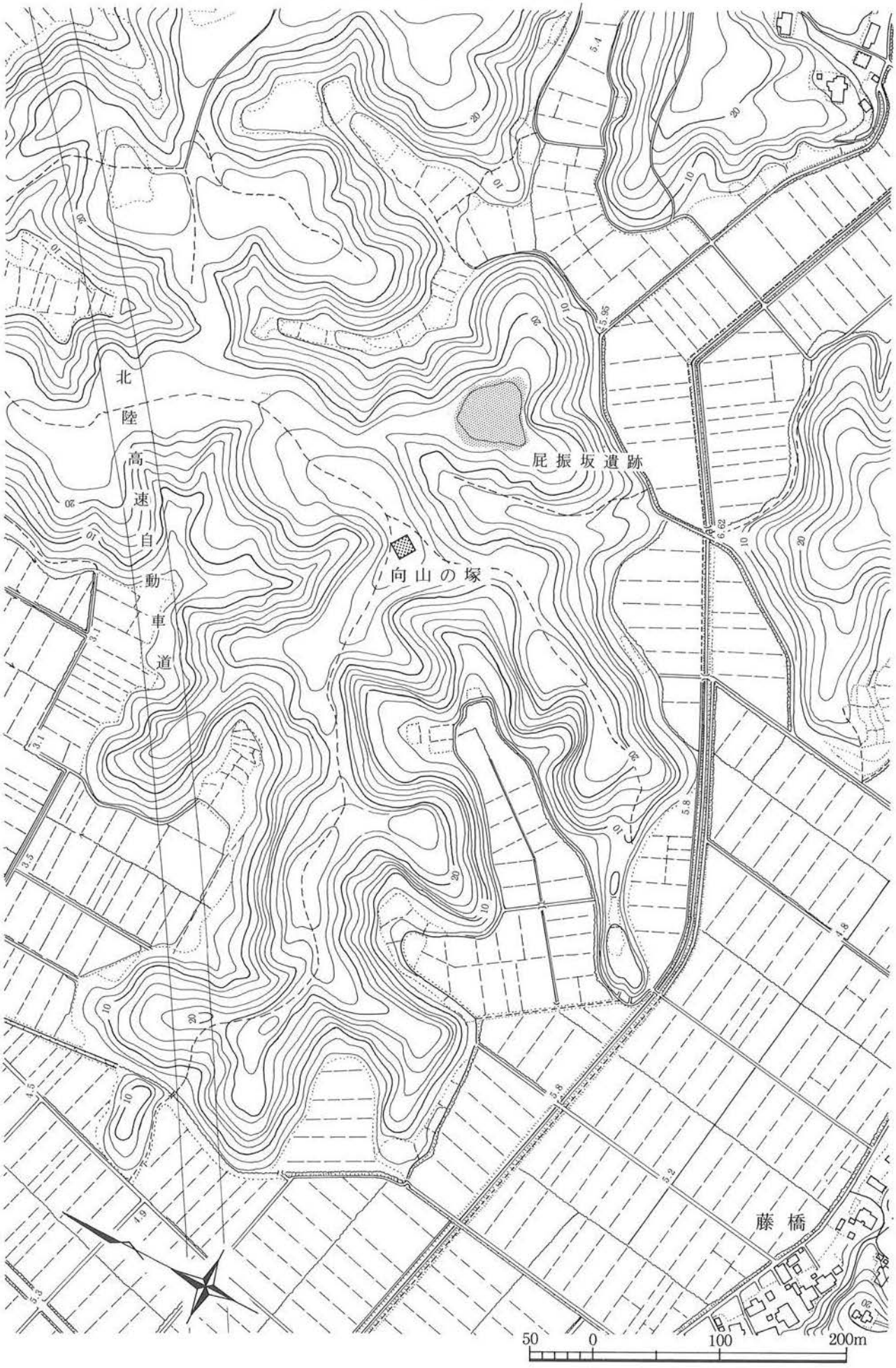
4）　おわりに

本節では縄文時代前期末葉から中期初頭への土器変遷を試論したが、第2段階と第3段階、第2段階と第4段階、第3段階と第4段階、第4段階と第5段階のそれぞれの関係や、第6段階の存否等、問題提起を行ってきた。そのため、編年としては幾分明瞭さに欠け、曖昧になってしまった感があるが、従来の型式論的編年観では捉え切れない、複雑な土器様相を考慮したためである。土器型式とは、便宜上設定された「方便」［山内1935］である。型式論的方法により、土器群の中に先行的あるいは後発的要素は確かに見出せるのであるが、それを即時間単位とすることには懸念を抱かざるを得ない。縄文土器の変遷は、地域差や各型式系統［中野1992］ごとによる差違、あるいは外的影響の多寡等によって複雑な様相を呈することは、既に周知されていることであろう。同一地域に複数の型式系統が併存することは充分に想定が可能で、系統の異なる土器群が即時間差とされてしまうことも少なからずあるのが現状であろう。今後は、より柔軟な試考による土器研究を推進することが肝要であり、これを本節での問題提起としたい。

〈引 用 参 考 文 献〉

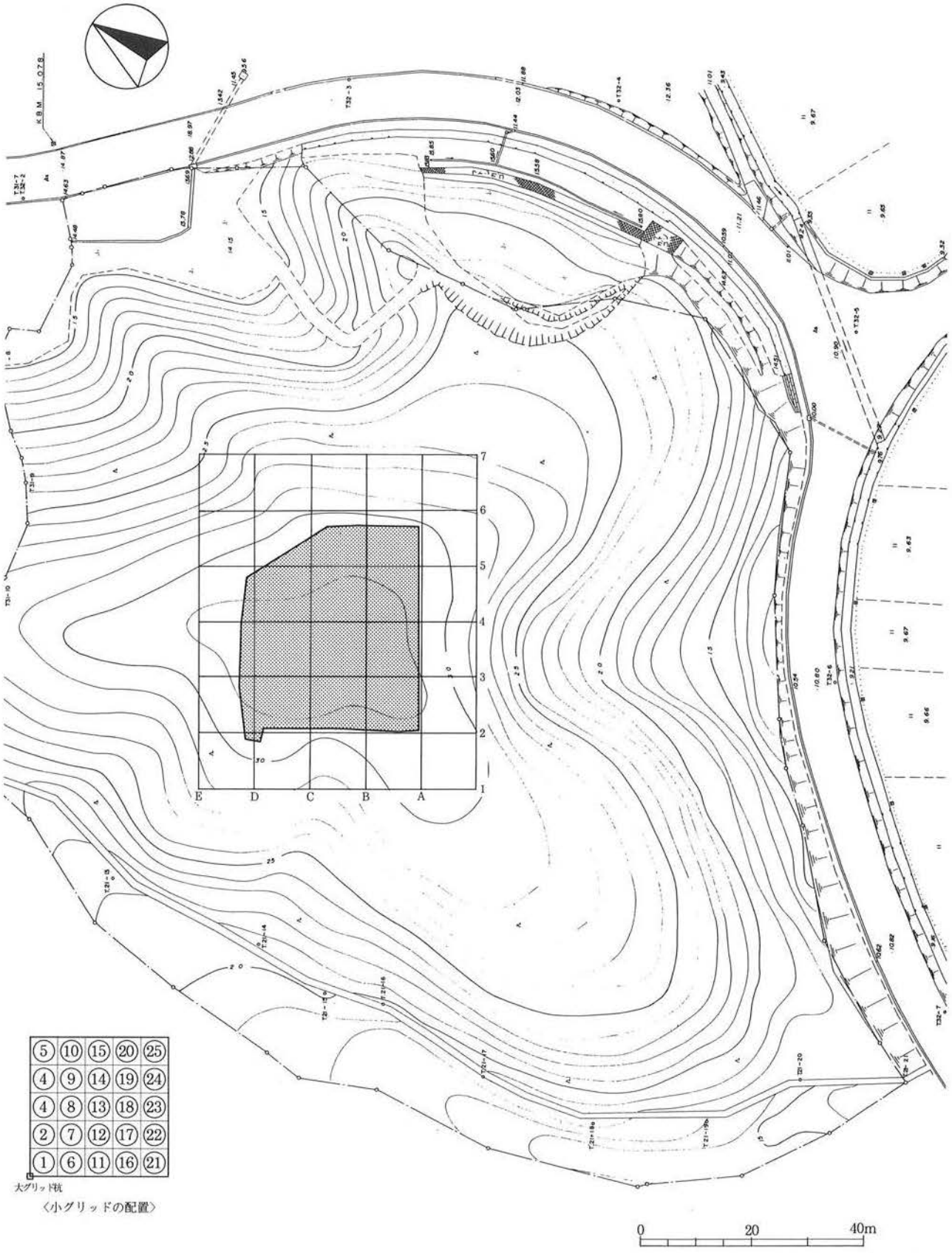
赤塩　仁・三上徹也　1993「中部高地における縄文前期末葉土器群の編年」『前期終末の諸様相』　縄文セミナーの会
網谷克彦　1989「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』1　小学館
石井克己　1987「黒井峯遺跡の概要」『月刊文化財』　288　第一法規出版
石原正敏　1993「新潟県の諸磯式土器」『前期終末の諸様相』　縄文セミナーの会
宇佐美篤美　1987「大原遺跡」『考古資料（図・拓本・説明）』（柏崎市史資料集　考古編１）　柏崎市史編さん委員会編
宇佐美篤美・高橋　保　1987「辻の内遺跡」『考古資料（図・拓本・説明）』（柏崎市史資料集　考古編１）　柏崎市史編さん委員会編
大塚昌彦　1996「火山灰下の家屋」『考古学による日本歴史』15　雄山閣出版
岡本郁栄　1987ａ「剣野Ｄ遺跡」『考古資料（図・拓本・説明）』（柏崎市史資料集　考古編１）　柏崎市史編さん委員会編
岡本郁栄　1987ｂ「高塩Ａ遺跡」『考古資料（図・拓本・説明）』（柏崎市史資料集　考古編１）　柏崎市史編さん委員会編
小野　昭・前山精明他　1988「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究　』　巻町編
柿崎町教育委員会　1960『鍋屋町遺跡』（1984　復刻版）
柏崎市教育委員会　1983『国光の塚群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第３）
柏崎市教育委員会　1986『藤橋向山の塚』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第６）
柏崎市教育委員会　1989『夏渡の百塚』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第９）
柏崎市教育委員会　1990ａ『千　古　塚』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第11）
柏崎市教育委員会　1990ｂ『剣野山縄文遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第12）
柏崎市教育委員会　1991ａ『十三本塚遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15）
柏崎市教育委員会　1991ｂ『小　児　石』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15）
柏崎市教育委員会　1994「横山東遺跡群現地説明会資料」
柏崎市教育委員会　1995『藤橋東遺跡群－写真でつづる発掘調査の概要－』（柏崎市埋蔵文化財調査図録第１集）
柏崎市遺跡調査室編　1994「田塚山遺跡群現地説明会資料」
加藤三千雄　1986「第８群土器　新保式期」『石川県能都町　真脇遺跡』　能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
金子拓男　1987ａ「鍋屋町遺跡」『考古資料（図・拓本・説明）』（柏崎市史資料集　考古編１）　柏崎市史編さん委員会編
金子拓男　1987ｂ「剣野Ｅ遺跡」『考古資料（図・拓本・説明）』（柏崎市史資料編　考古編１）　柏崎市史編さん委員会編
小島俊彰　1986ａ「第５群土器　福浦上層式期」『石川県能都町　真脇遺跡』　能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
小島俊彰　1986ｂ「第６群土器　真脇式期」『石川県能都町　真脇遺跡』　能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
小島俊彰　1986ｃ「第７群土器　朝日下層式期」『石川県能都町　真脇遺跡』　能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
小島俊彰　1989「十三菩提式土器様式」『縄文土器大観』1　小学館
小林達雄　1973「多摩ニュータウンの先住者－主として縄文時代のセトルメント・システムについて－」『月刊文化財』112号　第一法規出版
小林達雄　1986「原始集落」『岩波講座日本考古学』４　岩波書店
佐藤雅一　1991「埋没谷出土の縄文土器について」『山崎Ａ遺跡発掘調査報告書』（見附市埋蔵文化財調査報告第８）　見附市教育委員会
佐藤雅一・石坂圭介編　1994『干溝遺跡』（中里村文化財調査報告書第６輯）　中里村教育委員会
品田高志　1987ａ「十三仏塚遺跡」『考古資料（図・拓本・説明）』（柏崎市史資料集　考古編１）　柏崎市史編さん委員会編
品田高志　1987ｂ「剣野Ｃ遺跡」『考古資料（図・拓本・説明）』（柏崎市史資料集　考古編１）　柏崎市史編さん委員会編
品田高志・鈴木俊成　1987「剣野Ａ遺跡」『考古資料（図・拓本・説明）』（柏崎市史資料集　考古編１）　柏崎市史編さん委員会編
品田高志　1993「柏崎平野の古代鉄生産雑感－藤橋東遺跡群の発見とその意義－」『新潟考古学談話会会報』第12号　新潟考古学談話会
白鳥良一　1989「前期大木式土器様式」『縄文土器大観』1　小学館
寺崎裕助　1993「鍋屋町式土器について」『前期終末の諸様相』　縄文セミナーの会
寺崎裕助　1995「新潟県における中期初頭の土器－関東・中部高地系土器を中心として－」『中期初頭の諸様相』　縄文セミナーの会
中野　純　1992「『型式』に関する一般理論とその展望」『新潟考古学談話会会報』第９号　新潟考古学談話会
中野　純　1994「信濃川上流域（中魚沼地域）の縄文時代中期初頭土器群について」『干溝遺跡』（中里村文化財調査報告書第６輯）　中里村教育委員会
中野　純　1995「鯨波地区東部における縄文遺跡の立地」『柏崎市の遺跡Ⅳ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第20集）　柏崎市教育委員会
丹羽佑一　1987「集落」『季刊考古学』第21号　雄山閣出版
能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　1986『石川県能都町　真脇遺跡』
福島県教育委員会　1990「青宮西遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ』（福島県文化財調査報告書第227集）
藤井昭二　1986「埋没林と海水準変動」『季刊考古学』第15号　雄山閣出版
前山精明　1994「重稲場遺跡群」『巻町史　資料編１　考古』　巻町編
三上徹也・上田典男　1995「縄文時代中期初頭土器群について－長野県の動向－」『中期初頭の諸様相』　縄文セミナーの会
安田喜憲　1982「気候変動」『縄文文化の研究』１　雄山閣出版
安田喜憲　1986「気候と植生の変遷」『季刊考古学』第15号　雄山閣出版
山内清男　1935「縄紋式文化」『ドルメン』第４巻６号（1969『山内清男・先史考古学論文集・旧第11集』　所収）

屁振坂遺跡と周辺の旧地形　1：4,000



図版 2

発掘調査区とグリッドの配置　1：1,000

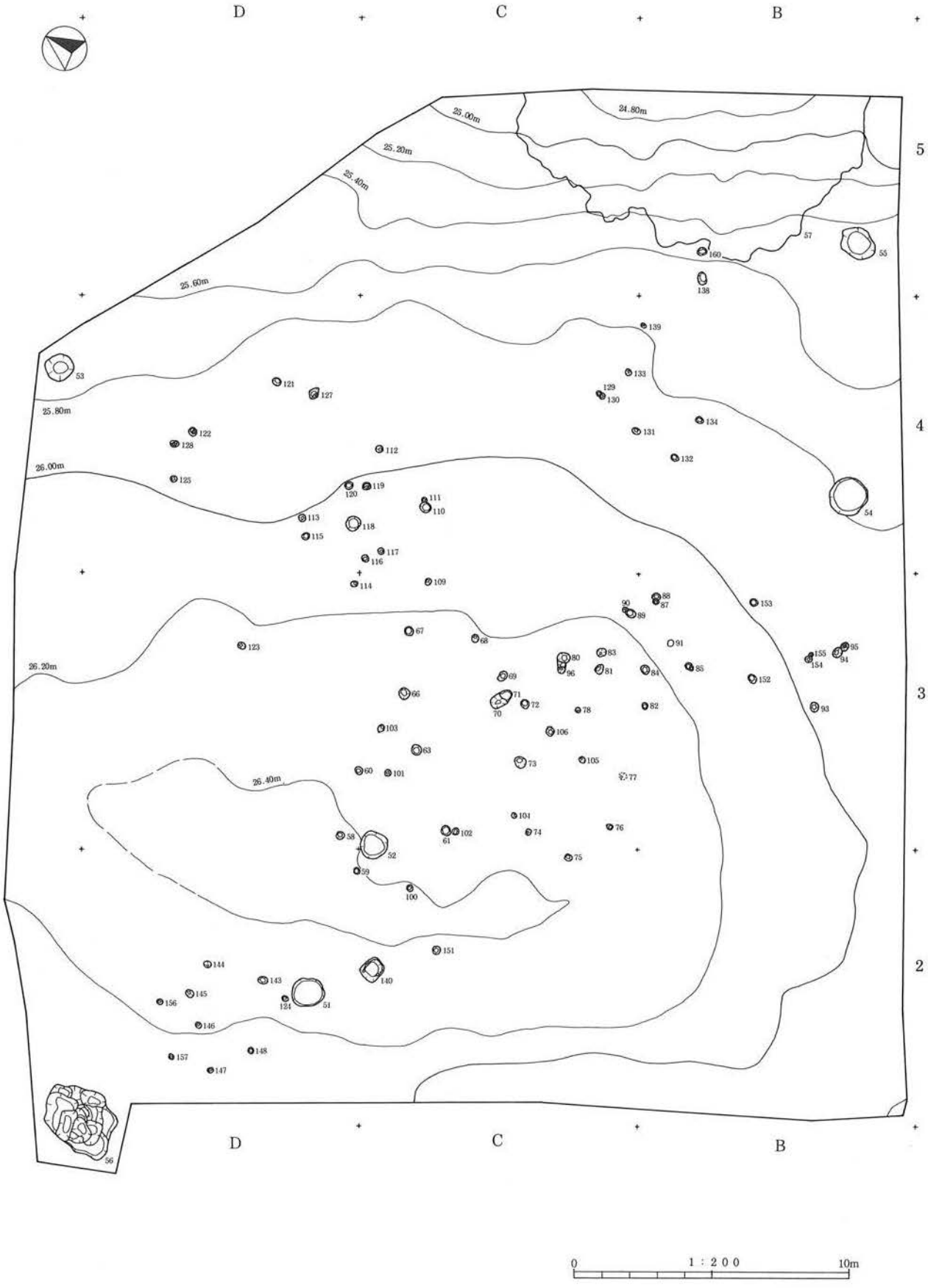


⑤	⑩	⑮	⑳	㉕
④	⑨	⑭	⑲	㉔
④	⑧	⑬	⑱	㉓
②	⑦	⑫	⑰	㉒
①	⑥	⑪	⑯	㉑

大グリッド杭

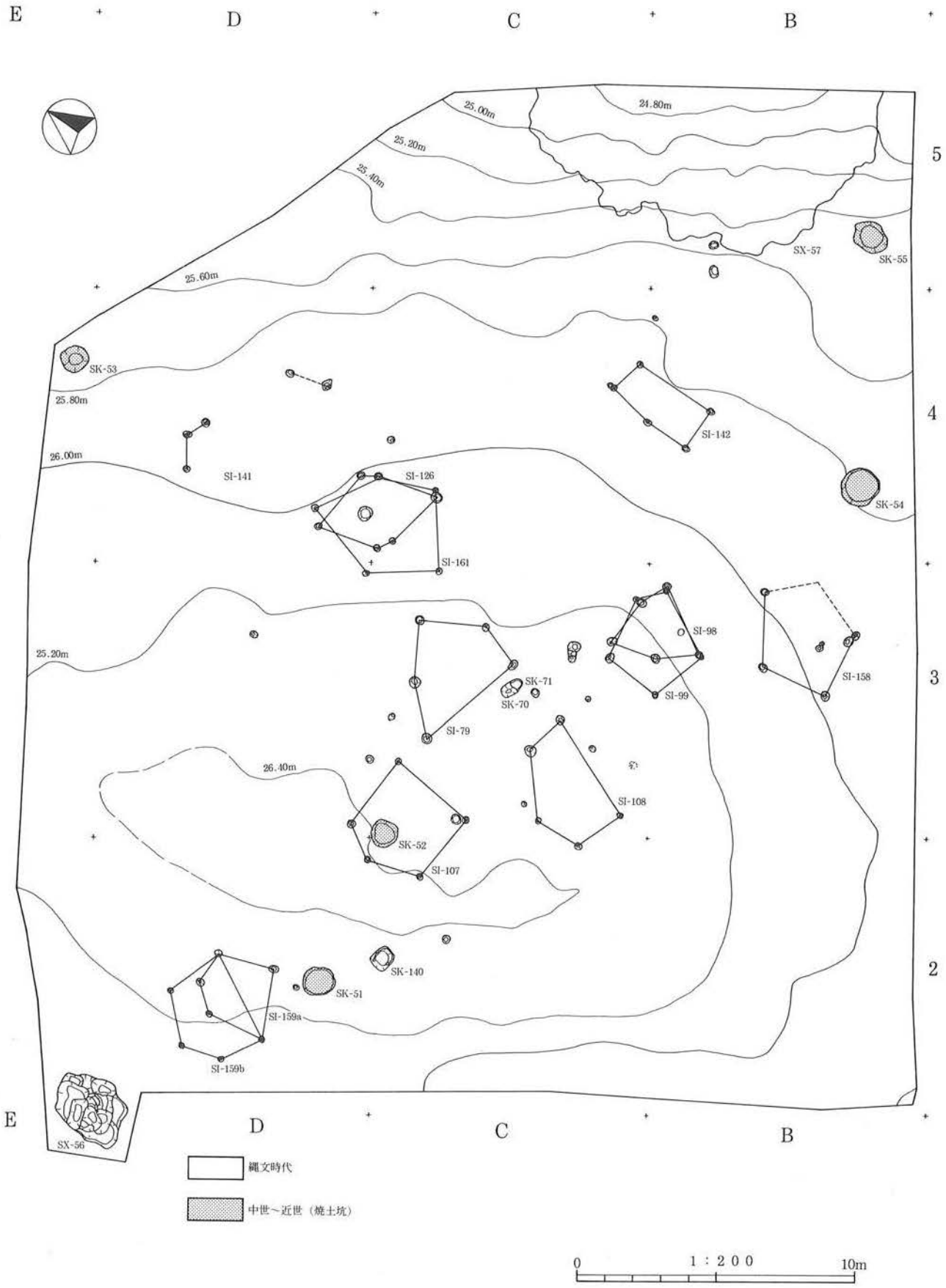
〈小グリッドの配置〉

屁振坂遺跡遺跡全体図

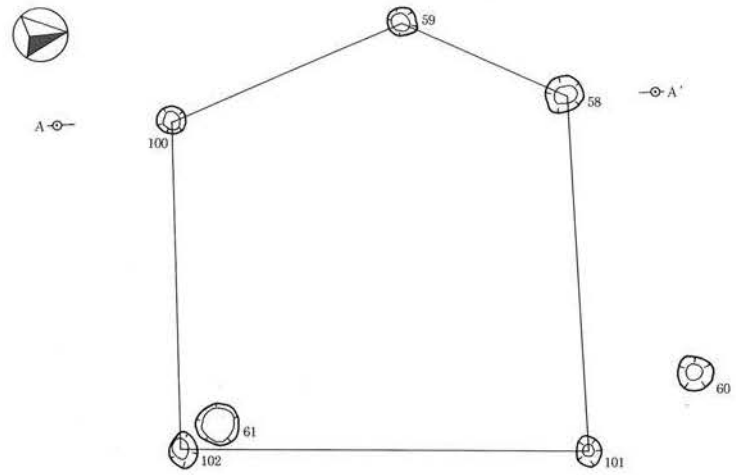

D
C
B
5
4
3
2
25.00m
24.80m
25.20m
25.40m
25.60m
25.80m
26.00m
26.20m
26.40m
0
1 : 200
10m

図版 4

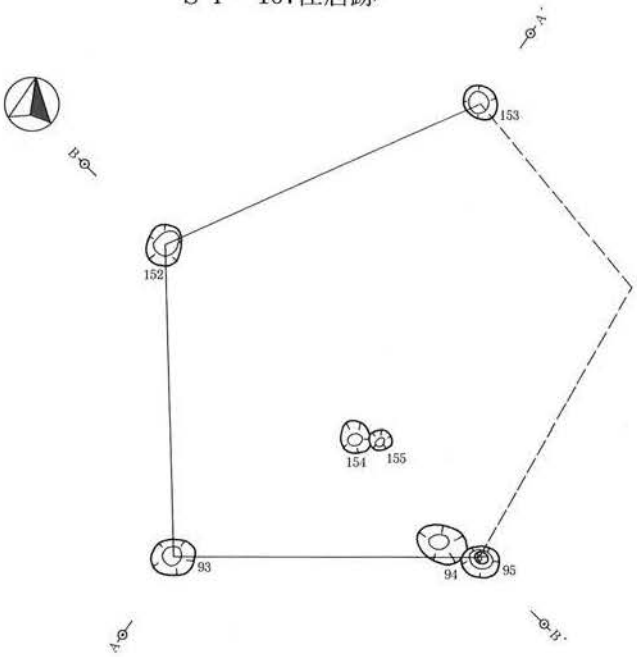
推定住居跡配置図　1：200



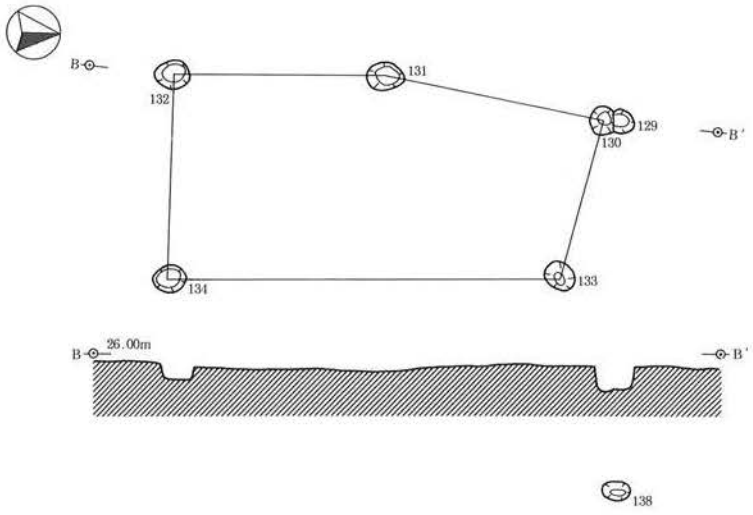
遺構個別図1（ＳＩ－107・ＳＩ－142・ＳＩ－158）



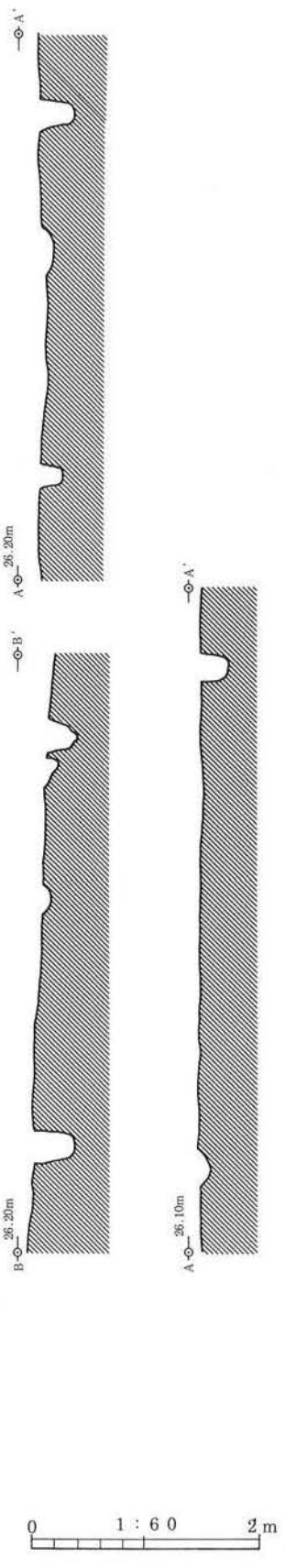
ＳＩ－107住居跡



ＳＩ－158住居跡

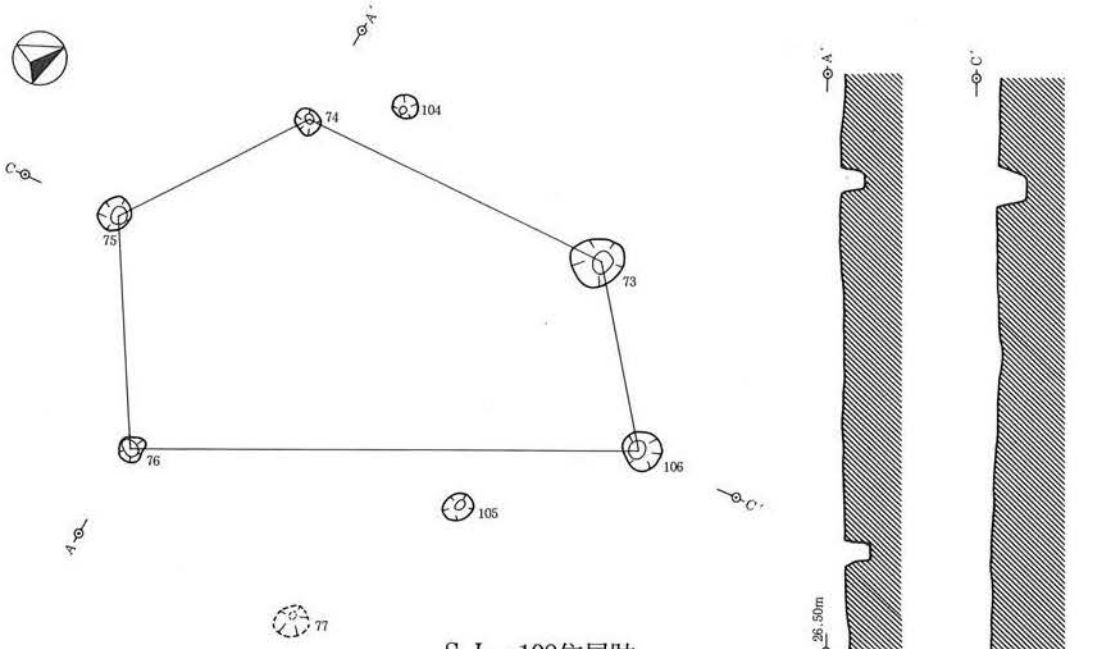


ＳＩ－142住居跡

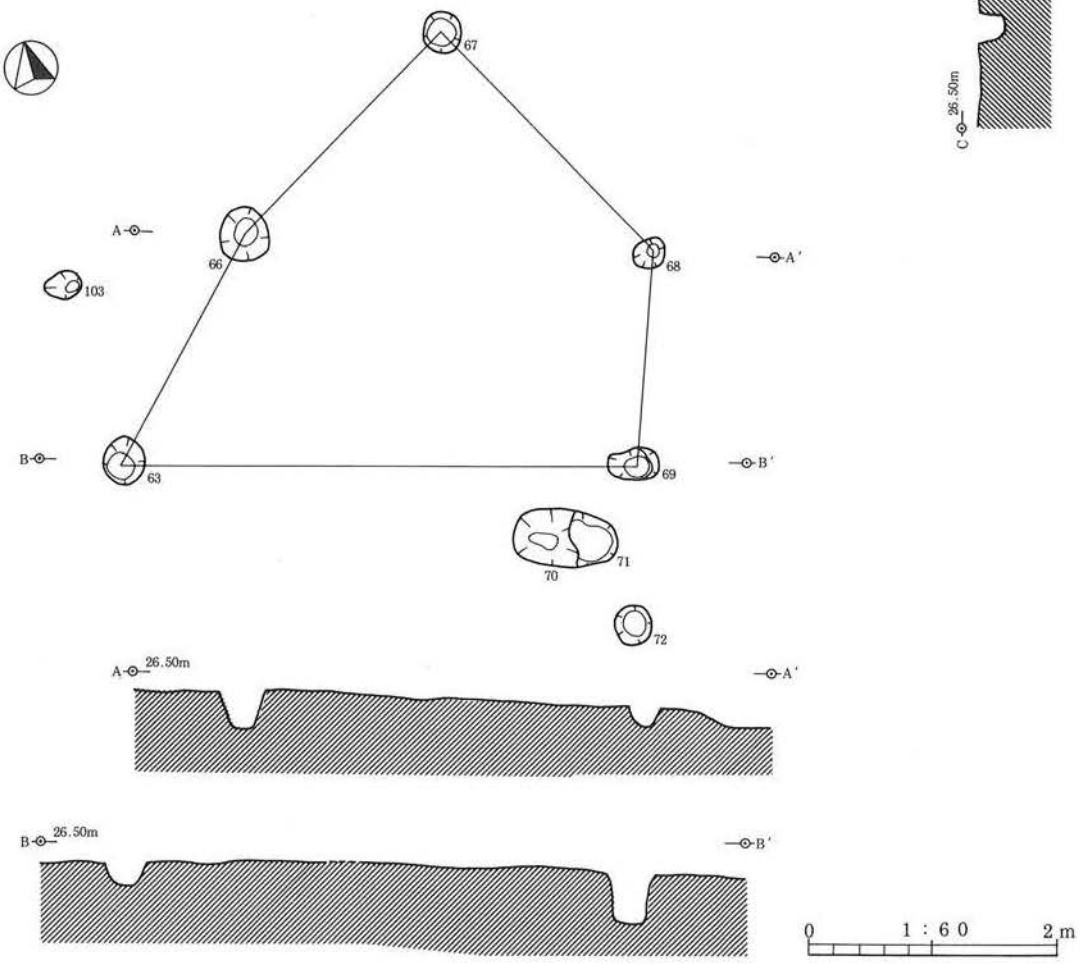


図版 6

遺構個別図 2 （ＳＩ－79・ＳＩ－108）

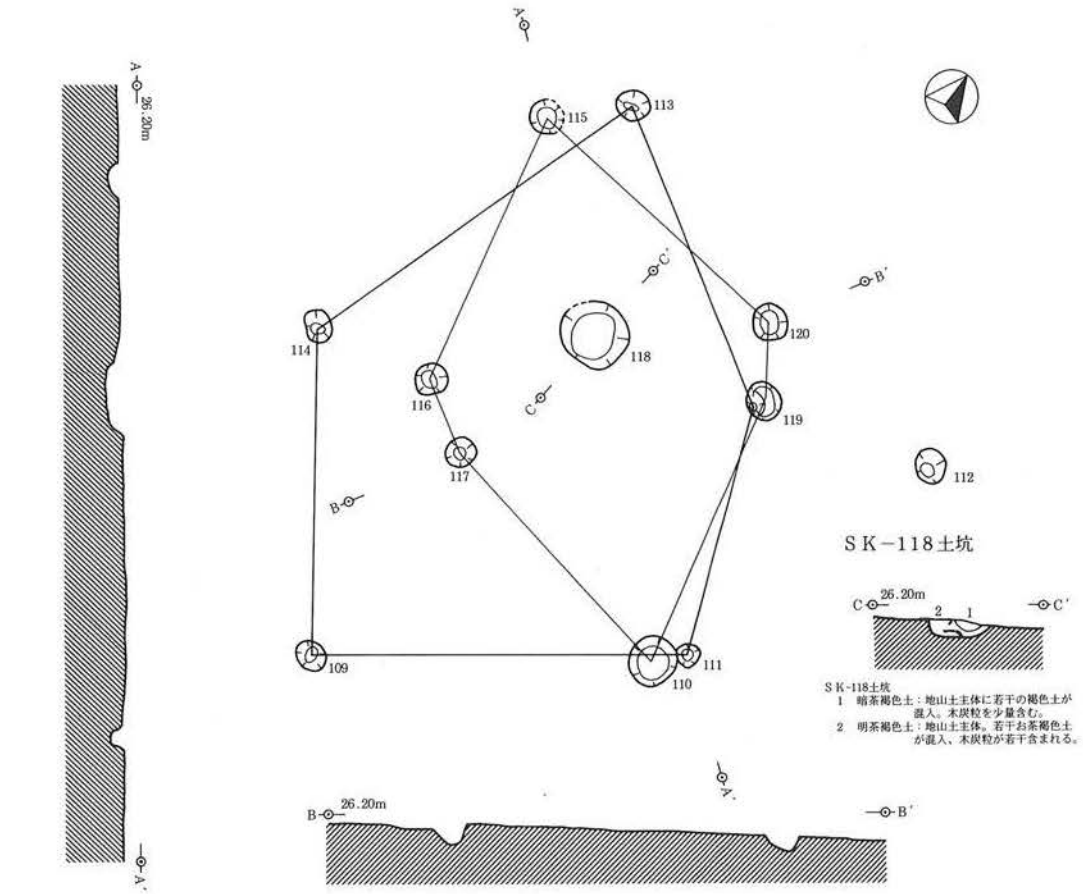


ＳＩ－108住居跡



ＳＩ－79住居跡

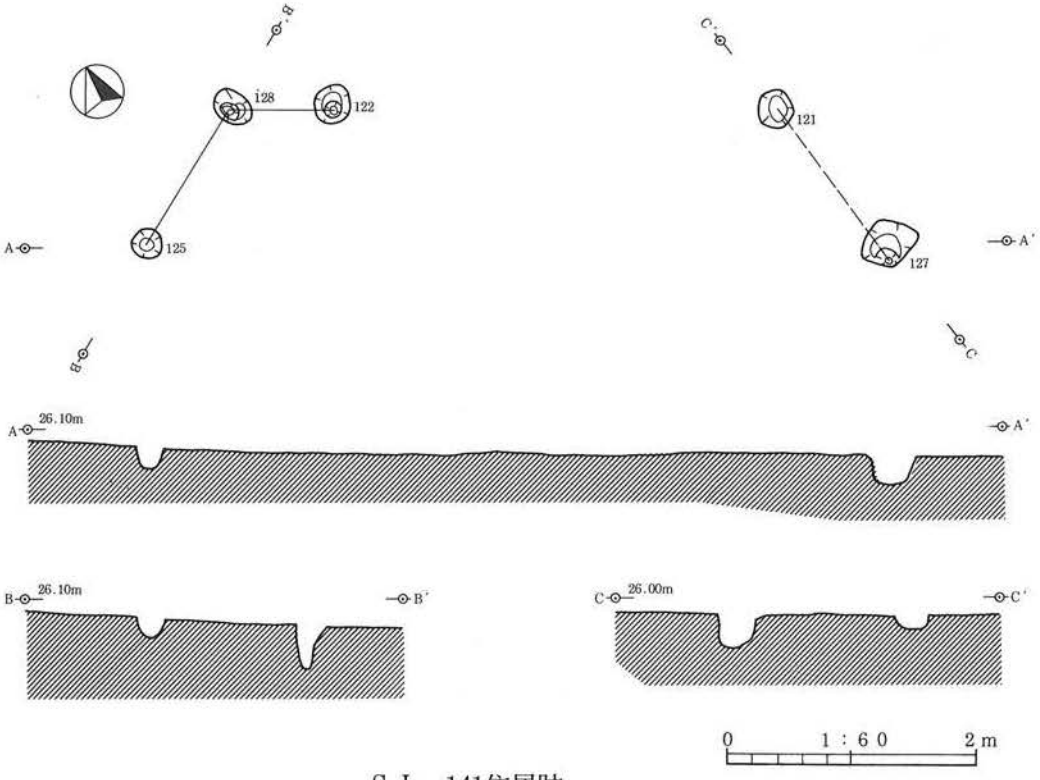
遺構個別図3 （ＳＩ－126・ＳＩ－161・ＳＩ－141・ＳＫ－118）



ＳＫ－118土坑

ＳＫ-118土坑
1　暗茶褐色土：地山土主体に若干の褐色土が混入。木炭粒を少量含む。
2　明茶褐色土：地山土主体。若干お茶褐色土が混入、木炭粒が若干含まれる。

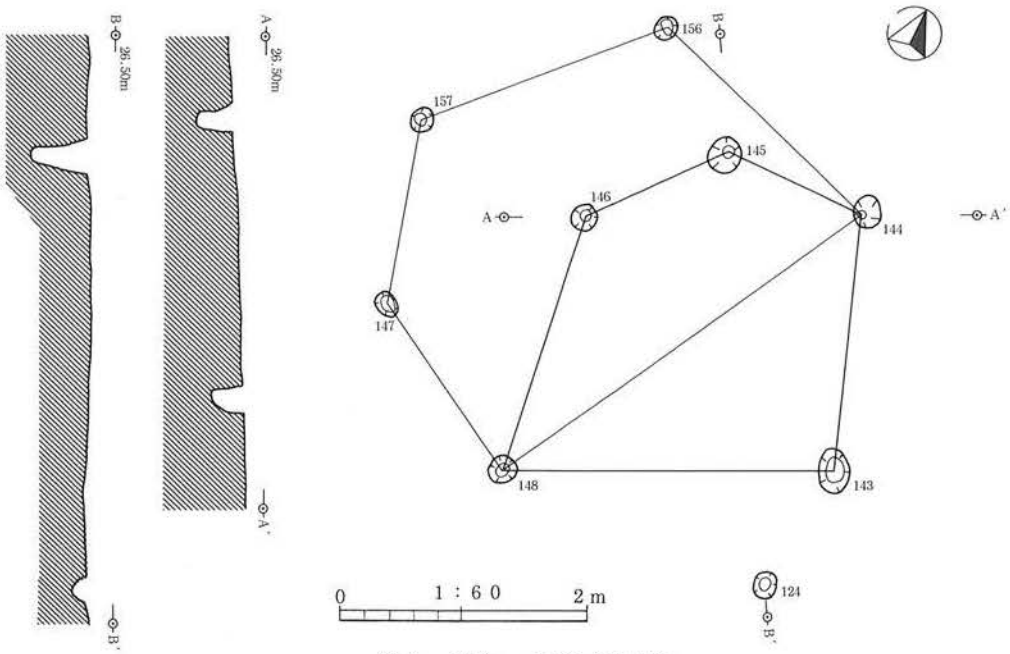
ＳＩ－126・161住居跡



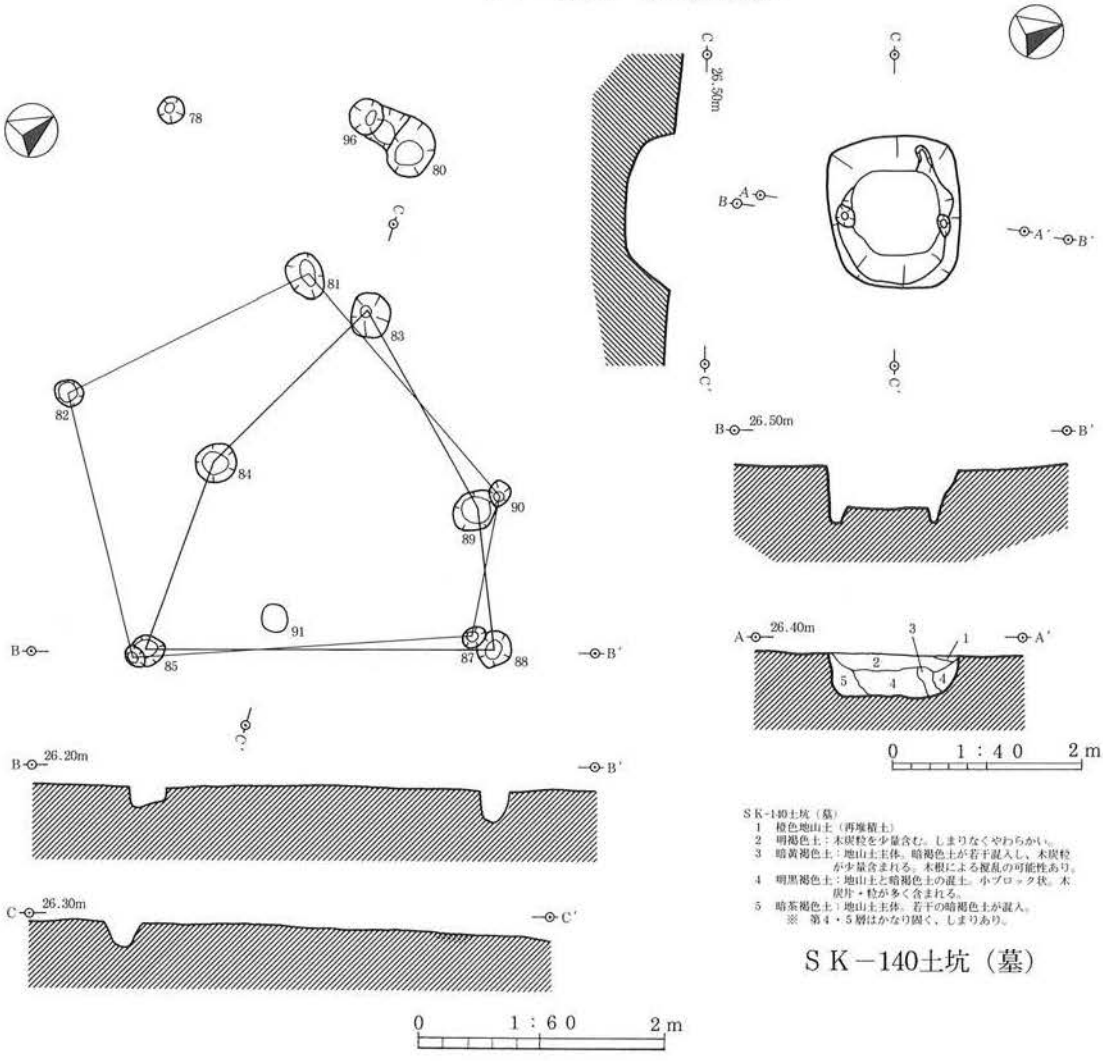
ＳＩ－141住居跡

図版 8

遺構個別図 4 （ＳＩ－159a・ＳＩ－159b・ＳＩ－98・ＳＩ－99・ＳＫ－140）



ＳＩ－159a・159b住居跡

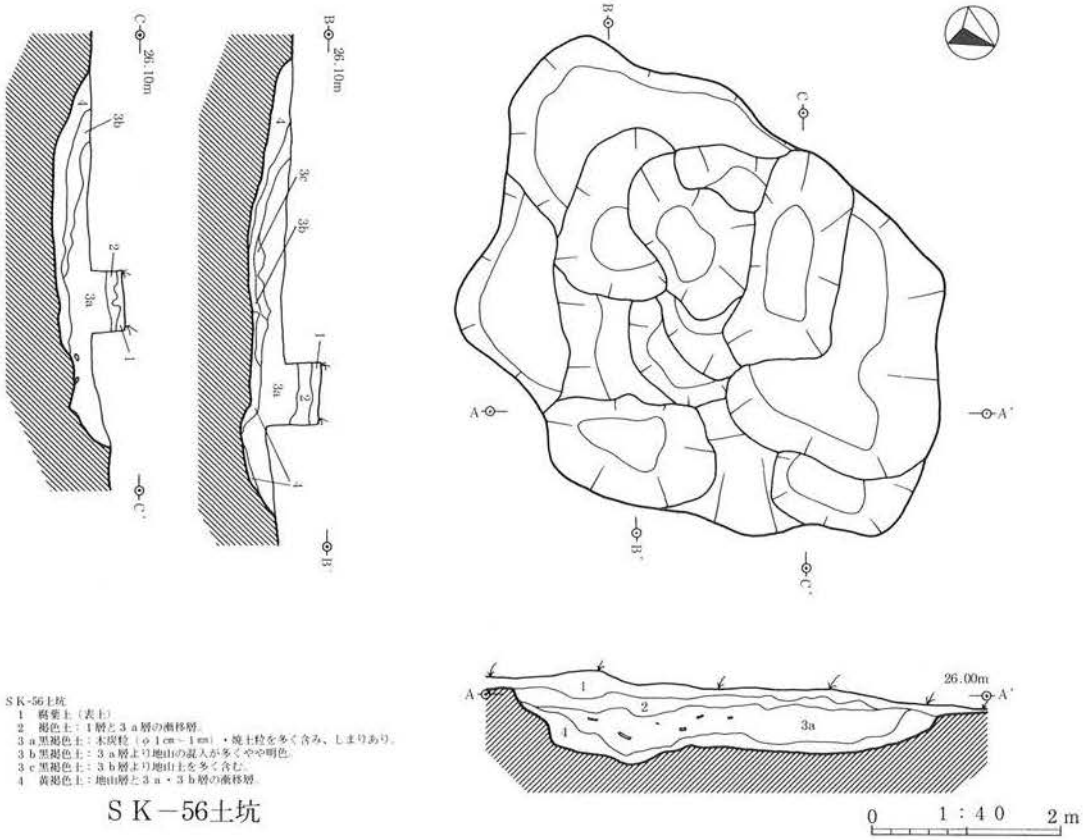


ＳＩ－98・99住居跡

ＳＫ-140土坑（墓）
1　橙色地山土（再堆積土）
2　明褐色土：木炭粒を少量含む。しまりなくやわらかい。
3　暗黄褐色土：地山土主体。暗褐色土が若干混入し、木炭粒が少量含まれる。木根による撹乱の可能性あり。
4　明黒褐色土：地山土と暗褐色土の混土。小ブロック状、木炭片・粒が多く含まれる。
5　暗茶褐色土：地山土主体。若干の暗褐色土が混入。
※　第４・５層はかなり固く、しまりあり。

ＳＫ－140土坑（墓）

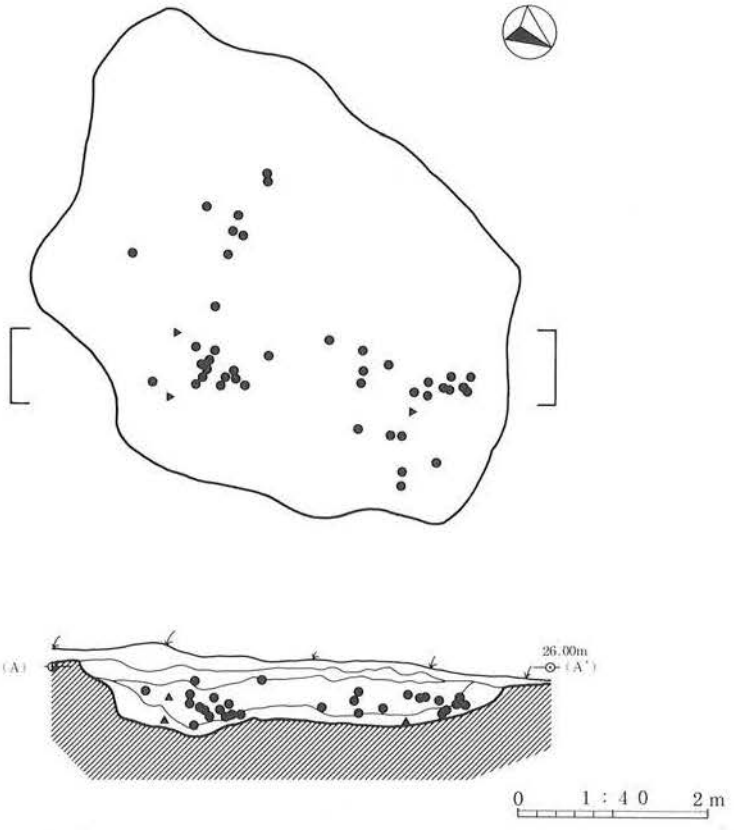
遺構個別図 5 （ＳＫ－56）



SK-56土坑
1　褐要土（表土）
2　褐色土：1層と3ａ層の漸移層。
3ａ黒褐色土：木炭粒（φ1cm～1mm）・焼土粒を多く含み、しまりあり。
3ｂ黒褐色土：3ａ層より地山の混入が多くやや明色。
3ｃ黒褐色土：3ｂ層より地山土を多く含む。
4　黄褐色土：地山層と3ａ・3ｂ層の漸移層。

ＳＫ－56土坑

0　1：40　2m

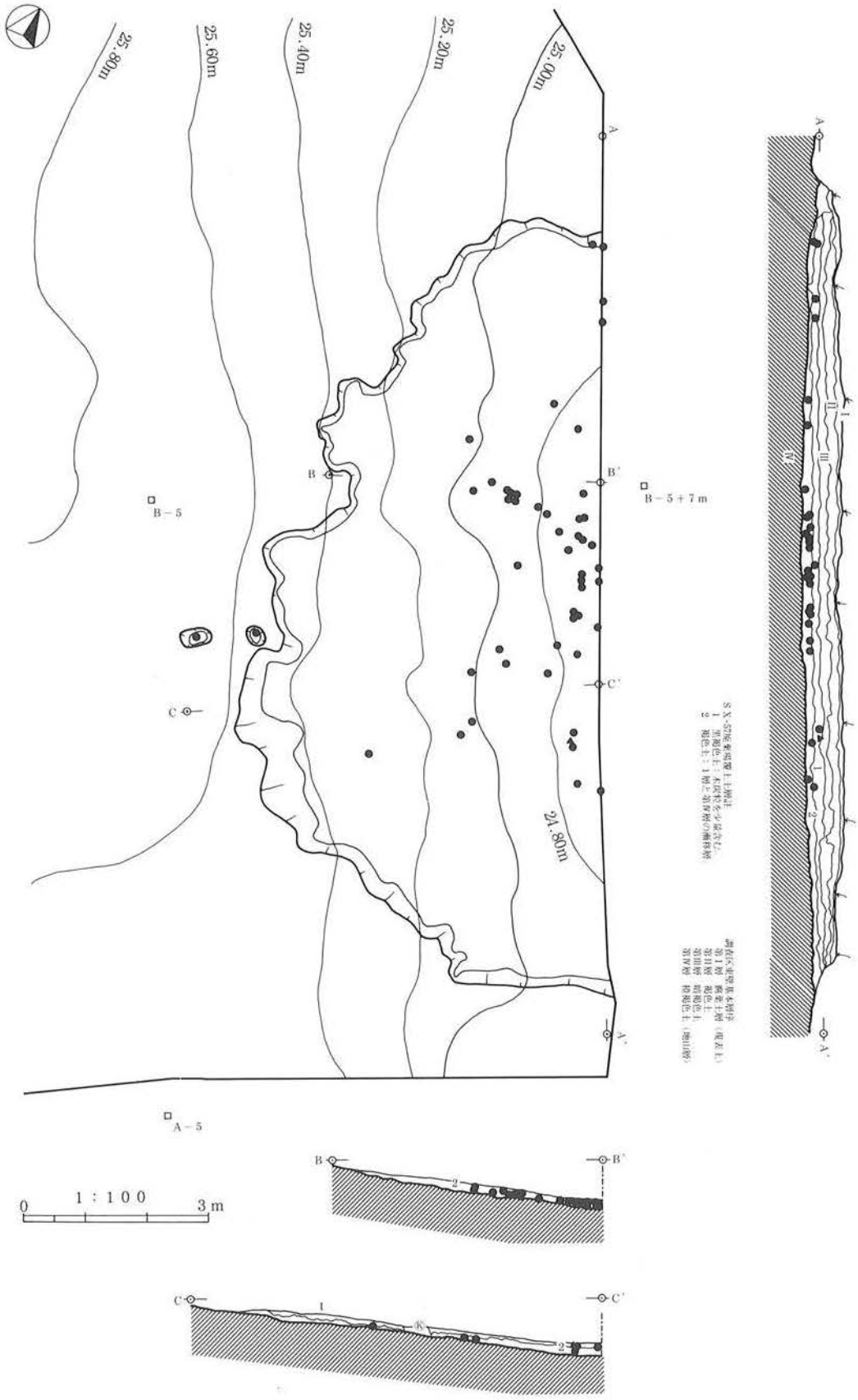


0　1：40　2m

ＳＫ－56土坑遺物出土分布図

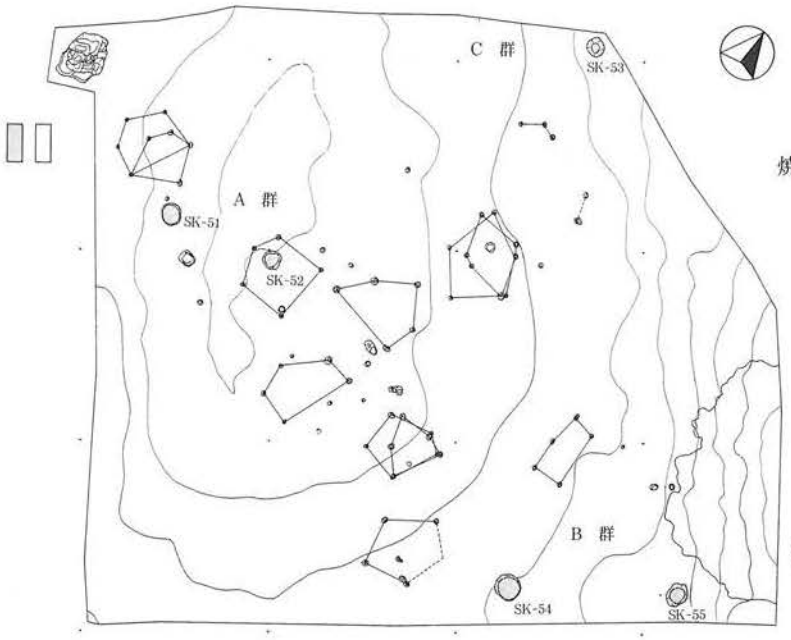
図版10

遺構個別図６（ＳＸ－57）



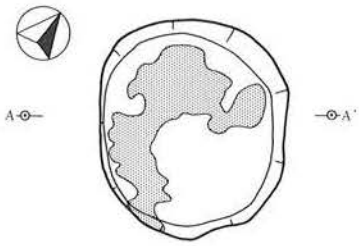
ＳＸ－57廃棄場全体図と遺物出土分布図

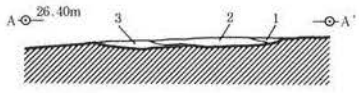
遺構個別図７（焼土坑：ＳＫ－51～55）



焼土坑分布図

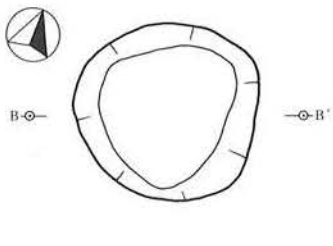
SK-51焼土坑

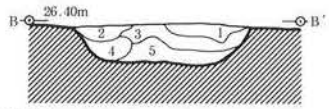




SK-51焼土坑
1 明褐色土：黄色地山土主体。木炭粒を多量に含み、大粒の焼土が多く含まれる。
2 明黒褐色土：黒色土と黄色地山土の混土。木炭粒・片を多く含み黒色を強くする。
3 褐色土：黒褐色土と地山土粒との混土。木炭粒と焼土粒を若干含む。

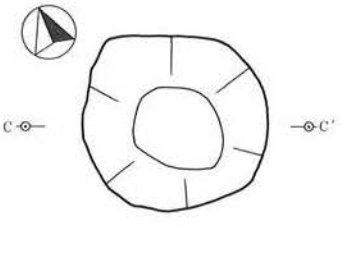
SK-52焼土坑

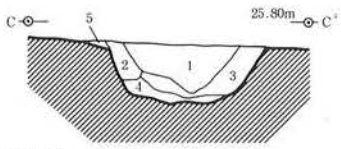




SK-52焼土坑
1 暗黄褐色土：地山埋土。木炭片・焼土粒を少量含む。
2 暗黄褐色土：地山土主体、焼土・木炭を多く含む。1層より暗色。
3 暗黄褐色土：地山土主体、木炭を多く含み色調は黒色を強くする。焼土若干が含まれる。
4 黒色土：木炭と焼土を主体とし、若干の地山土が混じる。
5 暗黄褐色土：地山埋土。若干の木炭が混入する。

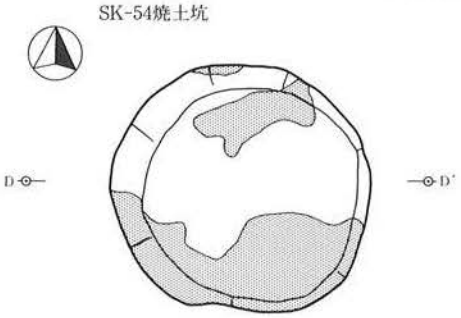
SK-53焼土坑

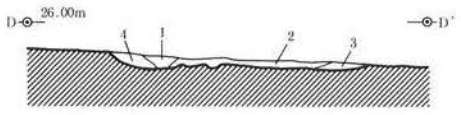




SK-53焼土坑
1 黒色土：きめ細かな黒色土。木炭粒焼土粒が含まれる。
2 黒褐色土：1層と黄地山土との粒状混土。やわらかくしまりなし。
3 明黒褐色土：1層と地山土との漸移層。地山土粒は2層より大きい。
4 茶褐色土：地山土粒を多く含み主体をなす。大きな木炭片や焼土粒を多く含む。
5 褐色土：地山土と黒色土の混土。ややしまりあり。
※ 1～4層には、焼土粒や木炭粒が少量含まれている。全体にやわらかくしまりなし。

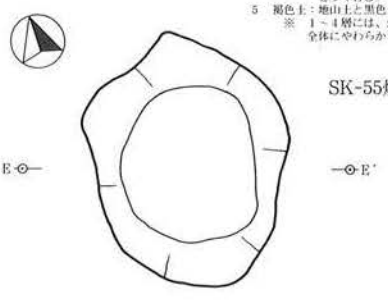
SK-54焼土坑

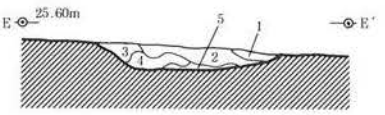




SK-54焼土坑
1 暗褐色土：黒褐色土・地山土・焼土の混土。焼土のため赤色味あり。
2 黒褐色土：木炭を多量に含み、焼土と地山土が混じる。
3 明褐色土：地山土と黒色土の混土。地山粒の含有が多い。
4 明褐色土：3層より焼土が多く、やや赤みを帯びる。

SK-55焼土坑



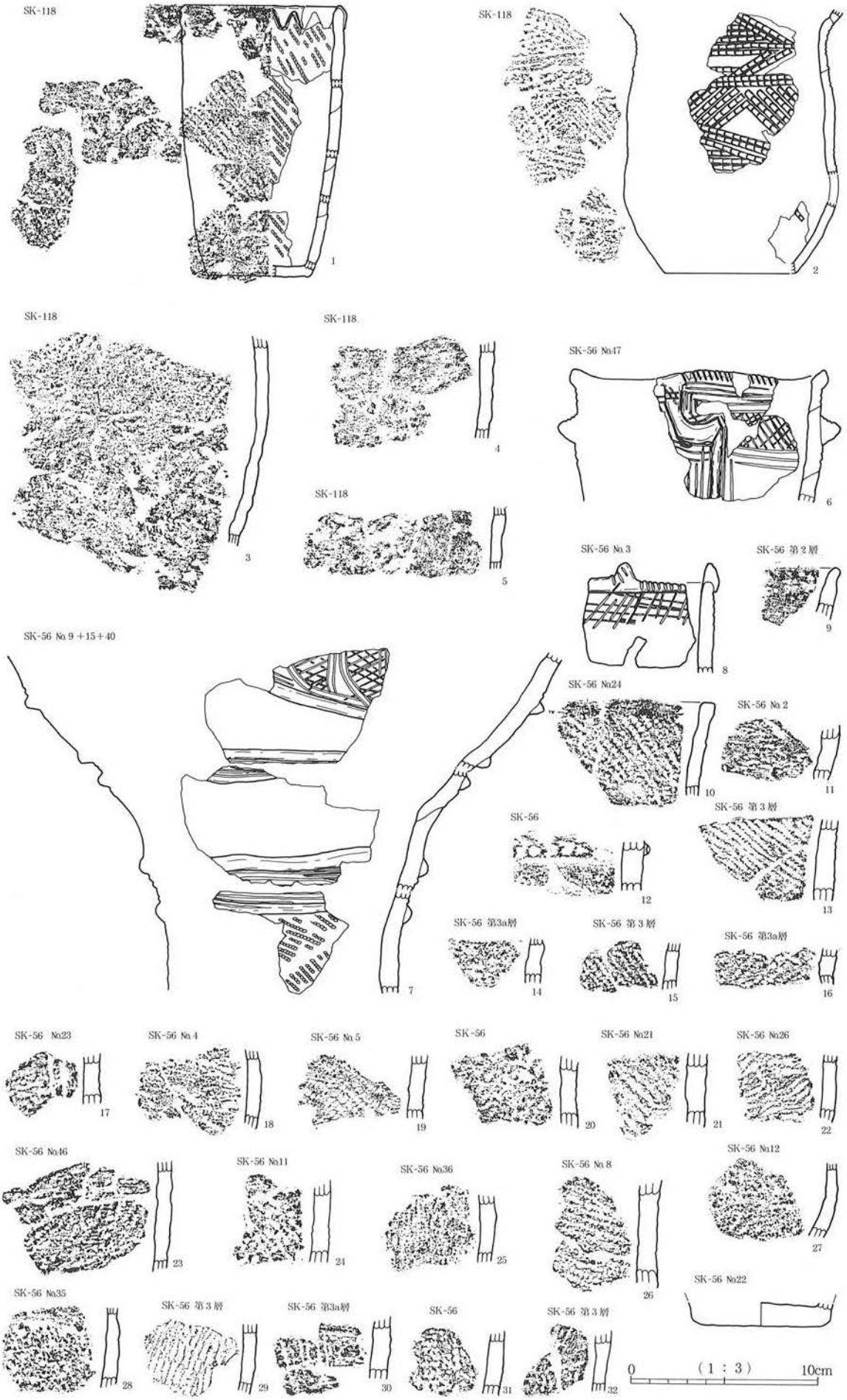


SK-55焼土坑
1 明褐色土：黄色地山土を多く混入し、少量の木炭粒・焼土粒を含む。
2 黒色土：焼土粒・木炭粒を多く含む。きめ細かい。
3 褐色土：黒色土と地山粒の混土。
4 暗褐色土：木炭粒を多量に含み黒色を強くする。地山粒も多く含まれる。
5 黒色土：木炭粒と地山土の混土。

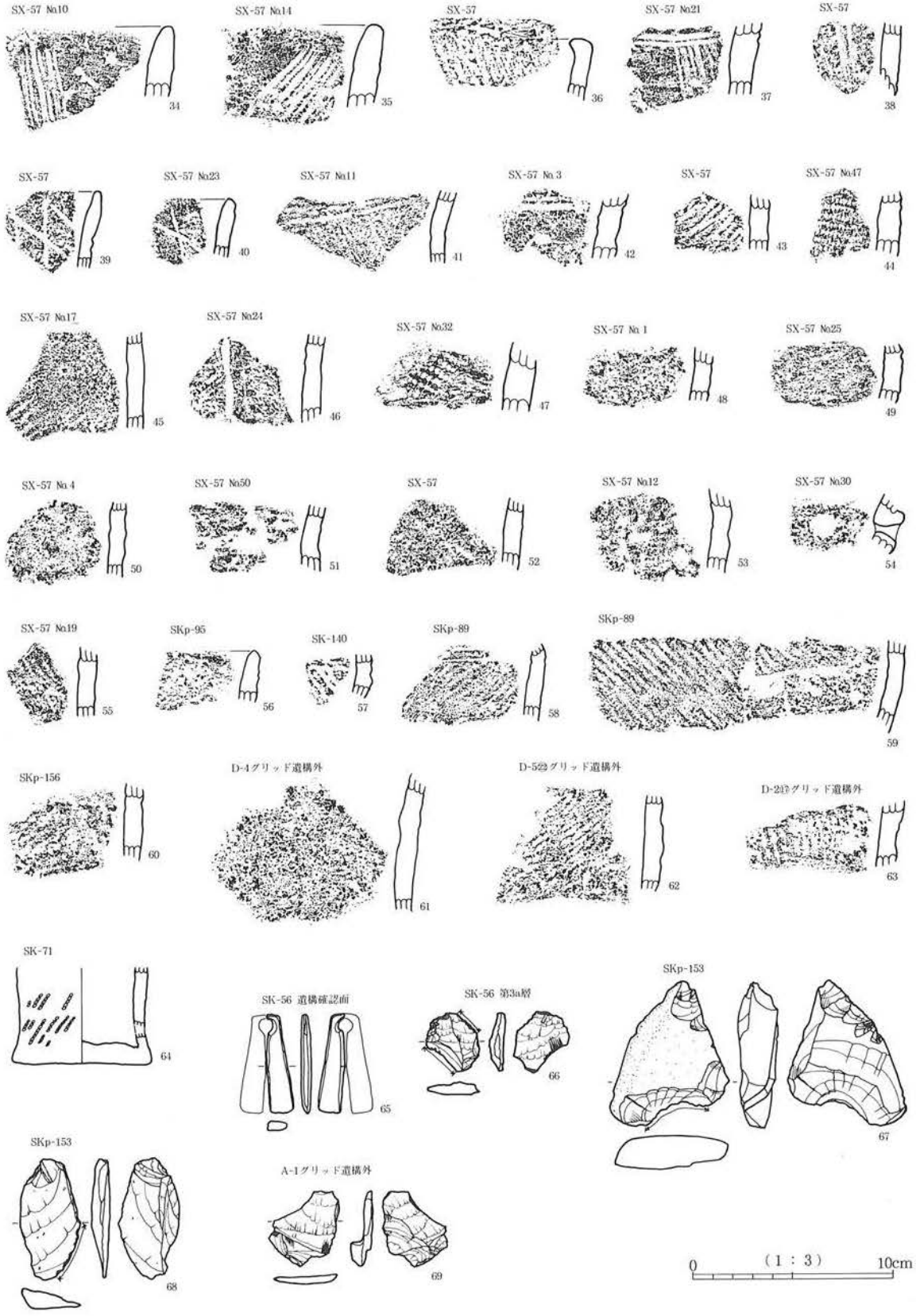
0 1：40 2m

図版12

屁振坂遺跡出土遺物（1）

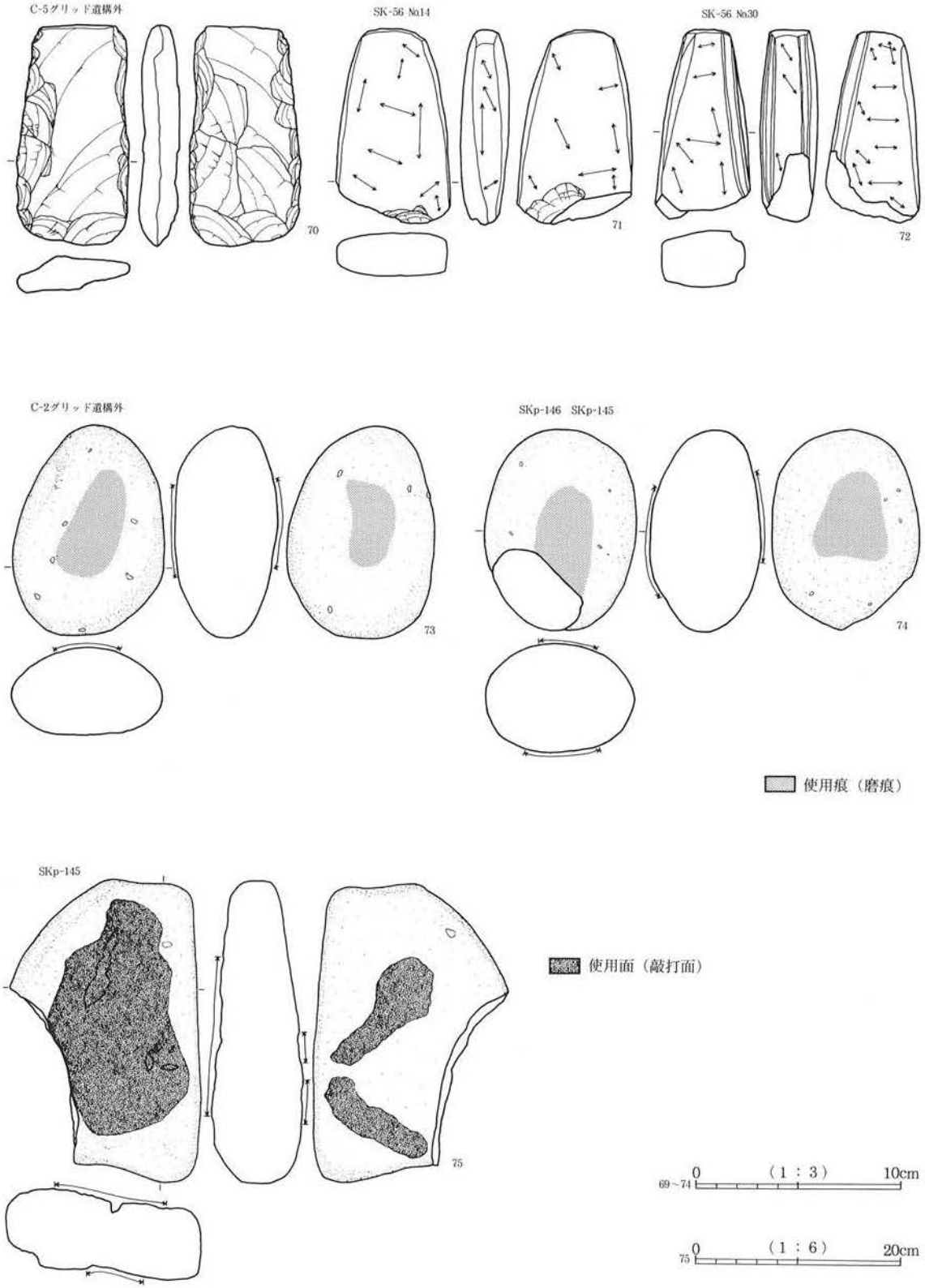


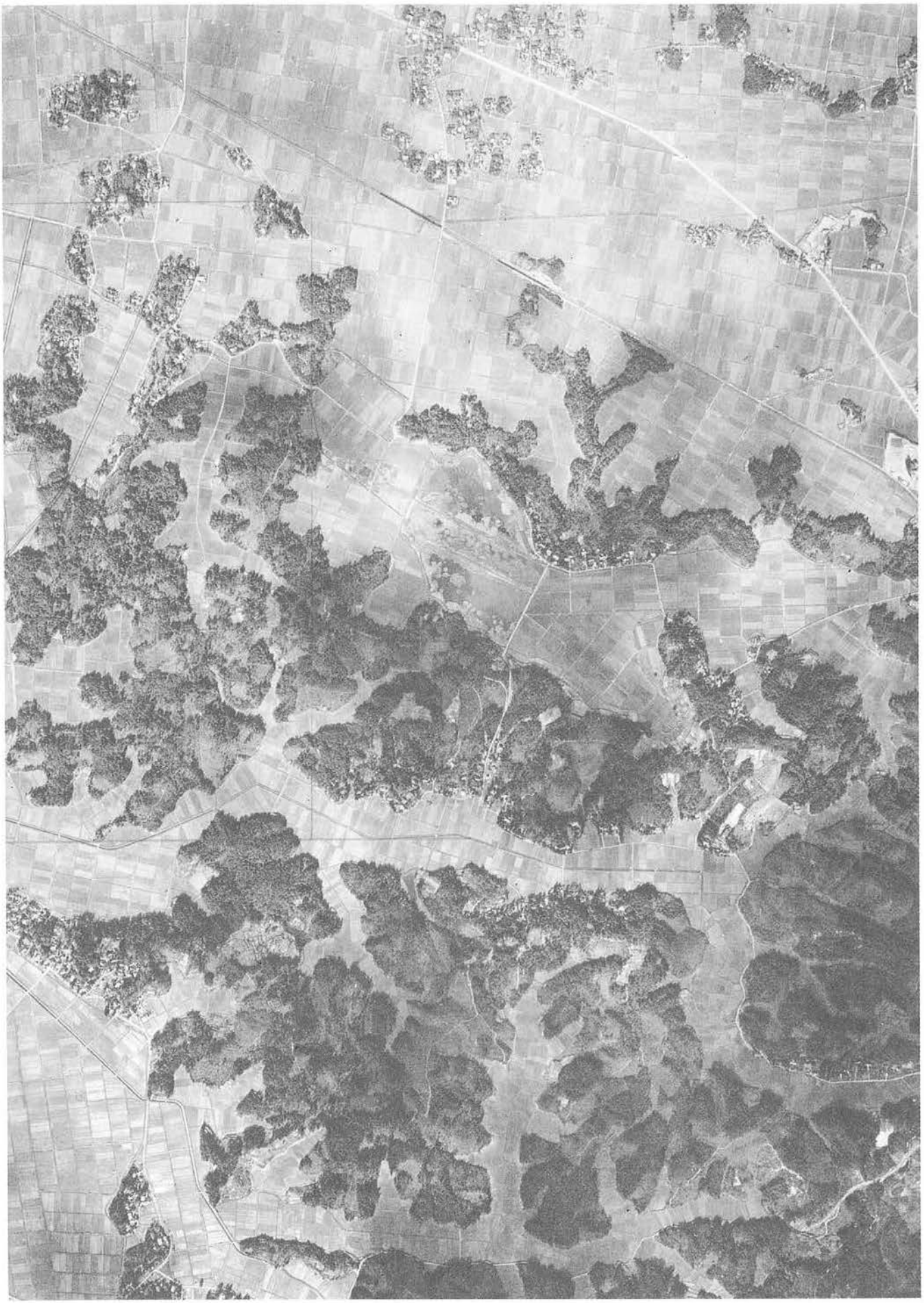
屁振坂遺跡出土遺物（２）


SX-57 No.10
34
SX-57 No.14
35
SX-57
36
SX-57 No.21
37
SX-57
38
SX-57
39
SX-57 No.23
40
SX-57 No.11
41
SX-57 No.3
42
SX-57
43
SX-57 No.47
44
SX-57 No.17
45
SX-57 No.24
46
SX-57 No.32
47
SX-57 No.1
48
SX-57 No.25
49
SX-57 No.4
50
SX-57 No.50
51
SX-57
52
SX-57 No.12
53
SX-57 No.30
54
SX-57 No.19
55
SKp-95
56
SK-140
57
SKp-89
58
SKp-89
59
SKp-156
60
D-4グリッド遺構外
61
D-5②グリッド遺構外
62
D-2③グリッド遺構外
63
SK-71
64
SK-56 遺構確認面
65
SK-56 第3a層
66
SKp-153
67
SKp-153
68
A-1グリッド遺構外
69
0
（１：３）
10cm

図版14

屁振坂遺跡出土遺物（3）





屁振坂遺跡周辺の航空写真

（1964年10月撮影）

図版16

調　　査　1

a．調査着手時の遺跡全景　　（西から）

b．表土剝ぎとジョレンがけ　　（南西から）

調　　査　2

a．縄文柱穴（ピット）の発掘作業　　（北東から）

b．木根処理　　（東から）

図版18

遺　　跡　1

a．屁振坂遺跡遠景　　（東から）

b．屁振坂遺跡近景　　（北東から）

遺　　跡　2

a．調 査 区 近 景　　（南西から）

b．調 査 区 近 景　　（南から）

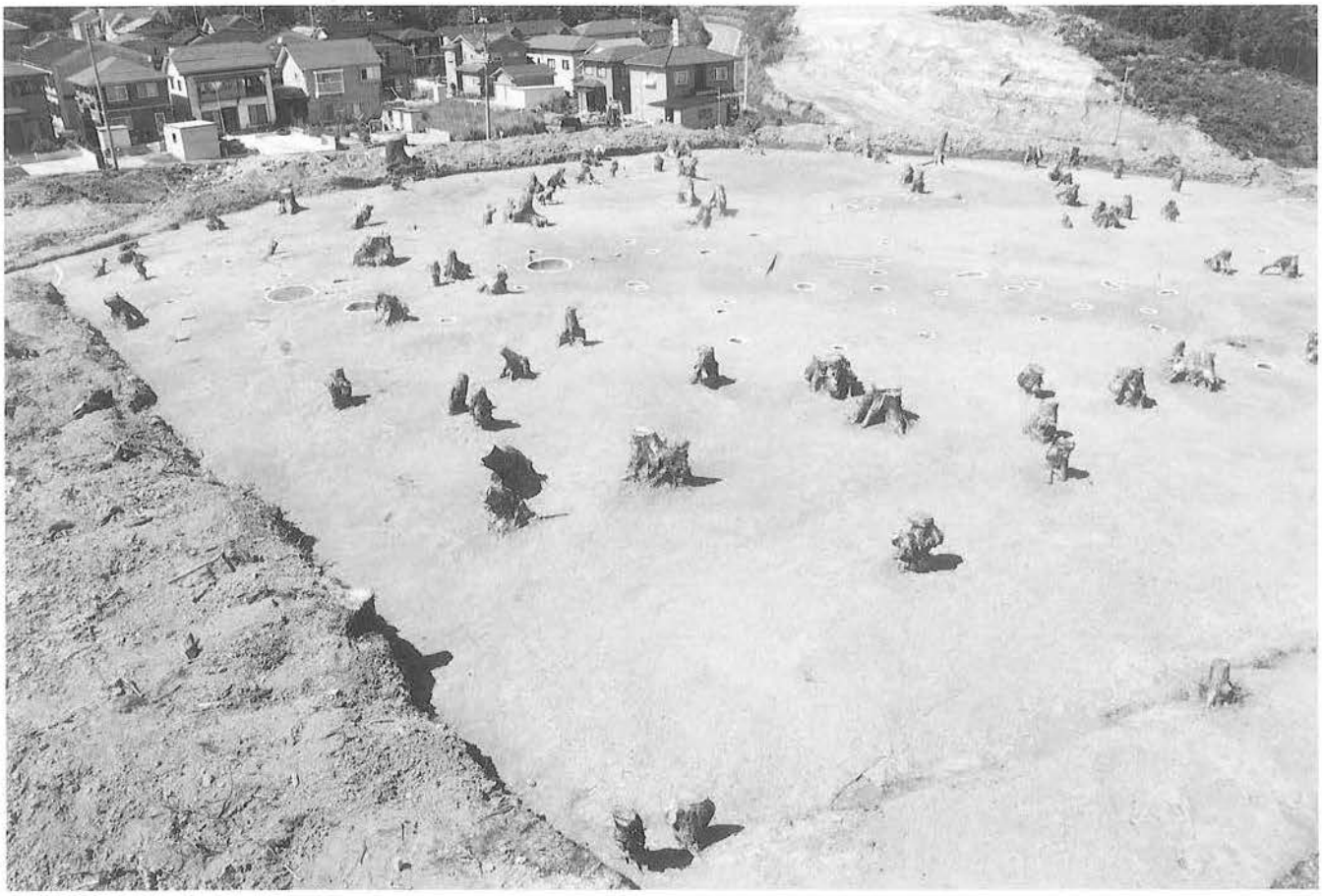
図版20

遺　　跡　3

a．調 査 区 近 景　　（西から）

b．調 査 区 近 景　　（南東から）

遺　　跡　4



a．調 査 区 近 景　　（南から）

b．調 査 区 近 景　　（南から）

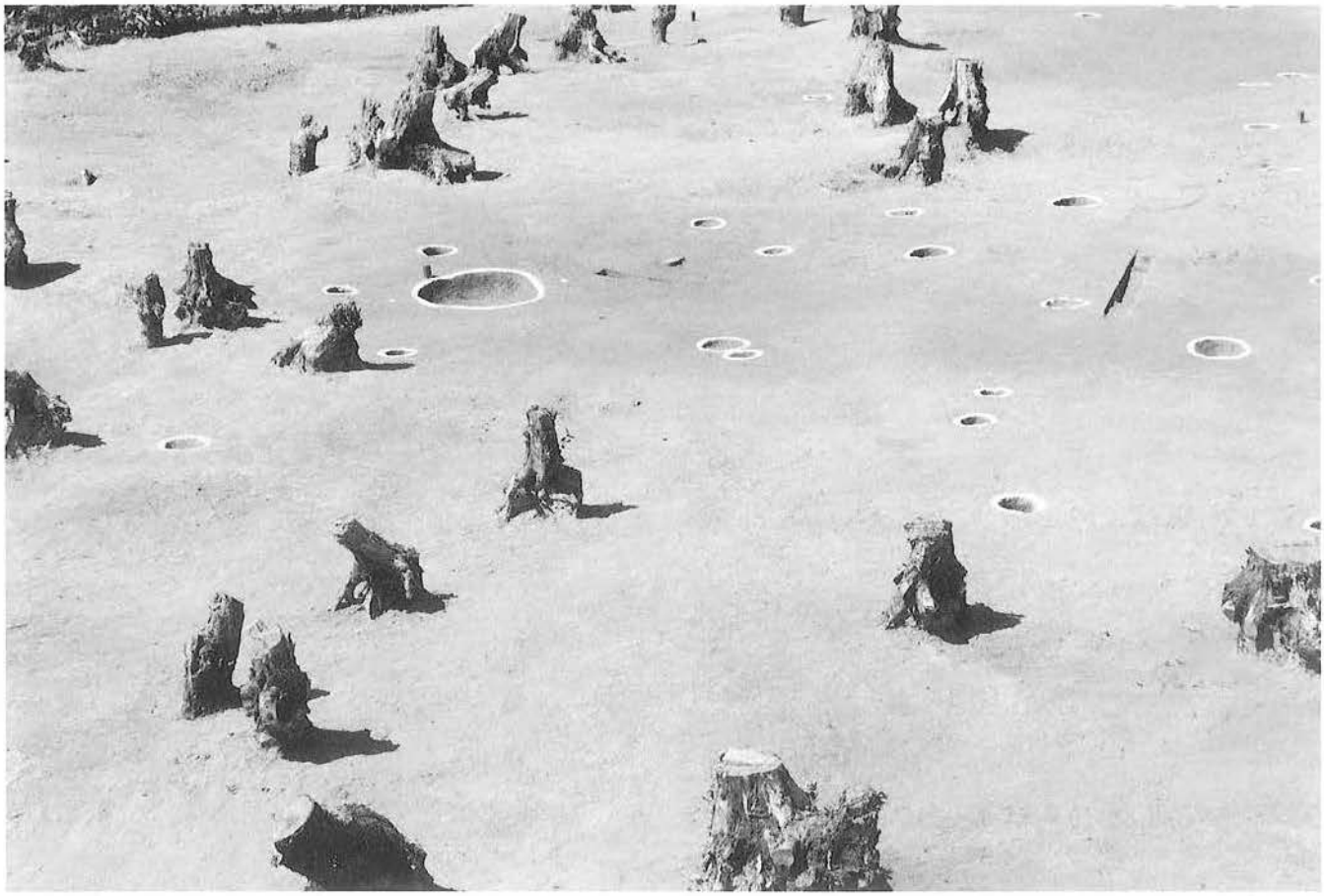
図版22

遺　　跡　5

a．調査区西半分　　（南から）

b．調査区東半分　　（南から）

遺　　跡　6

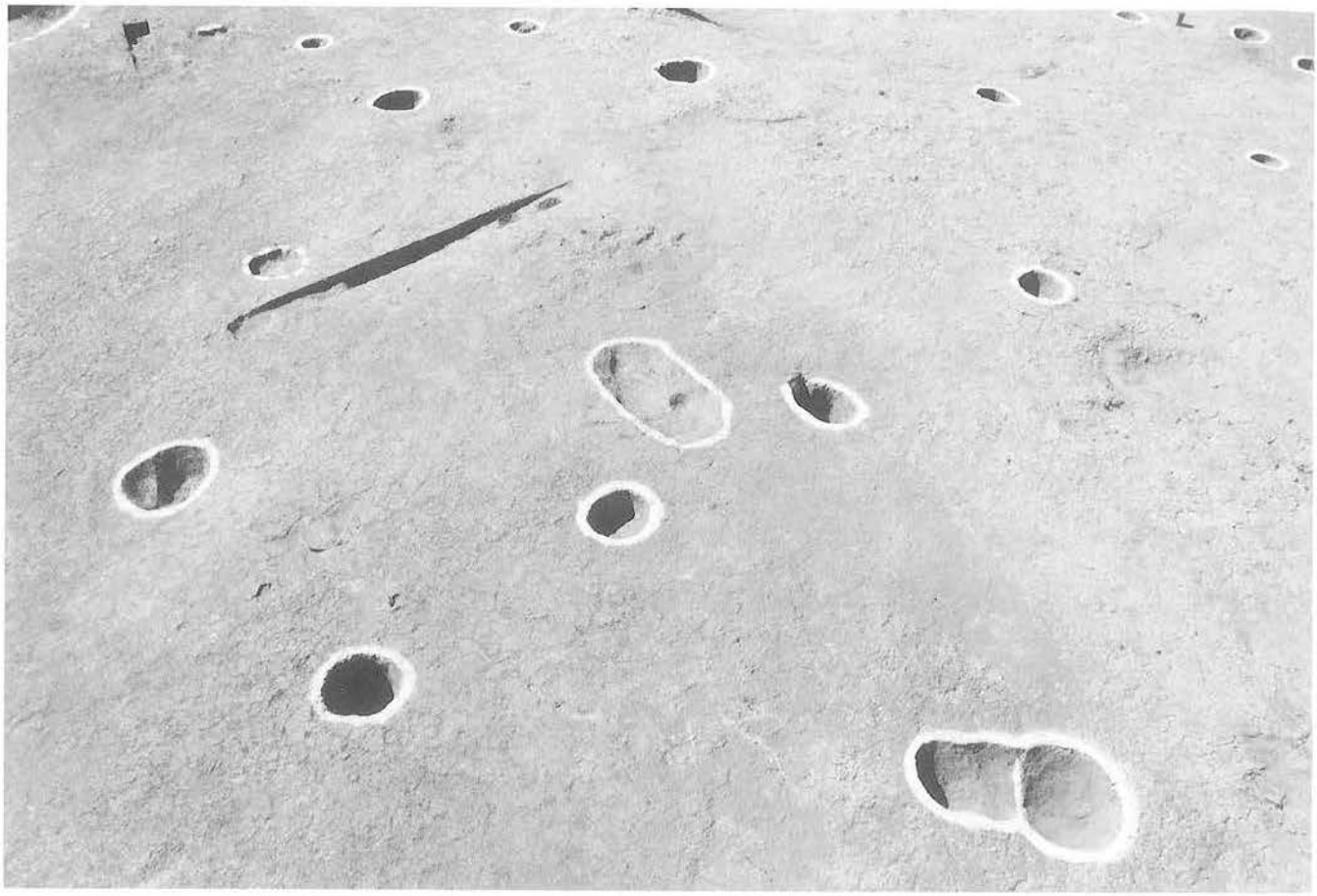


a．調査区中央部（ＳＩ－107周辺）　（南から）

b．調査区中央部（ＳＩ－98・99周辺）　（南西から）

図版24

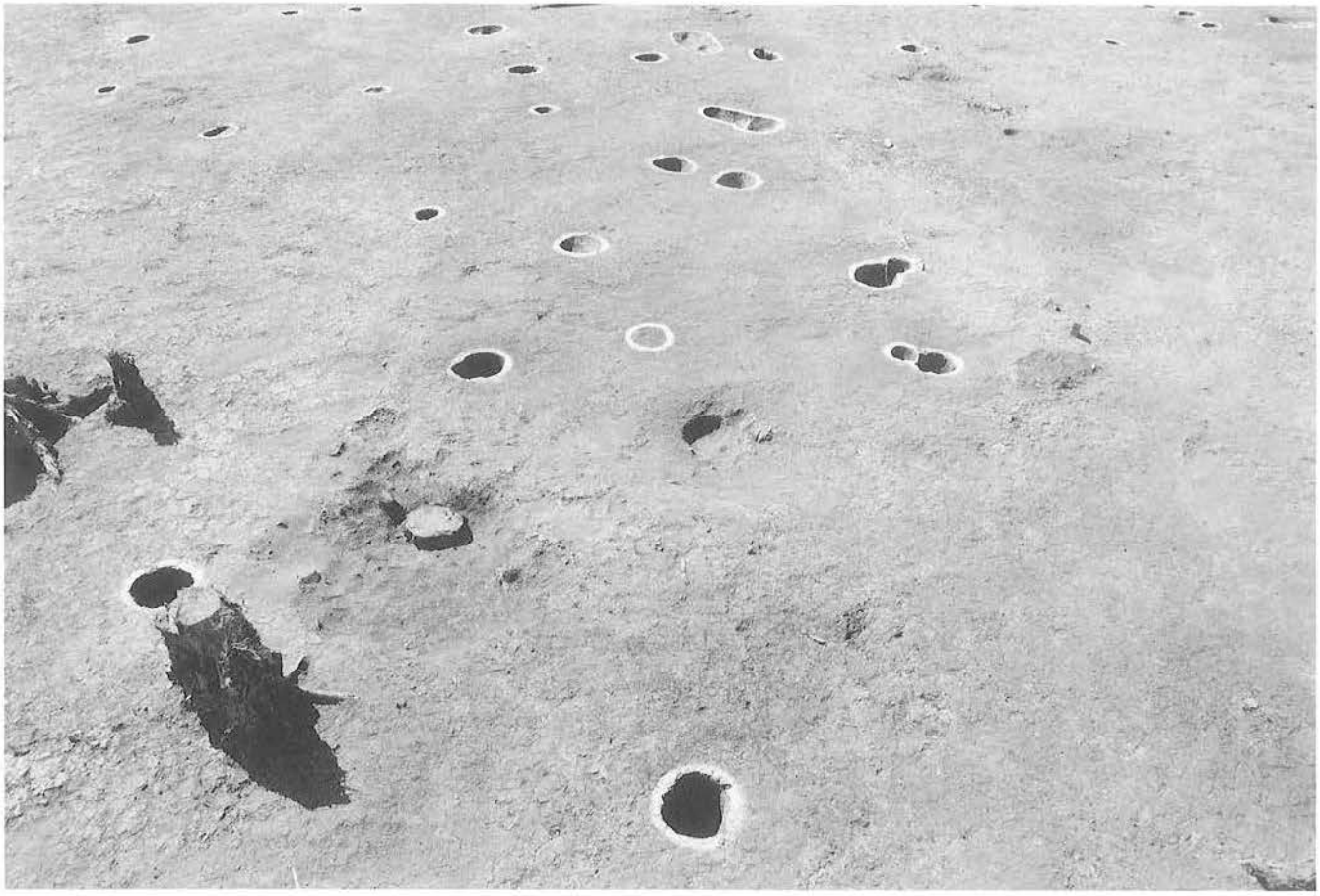
住 居 跡 1



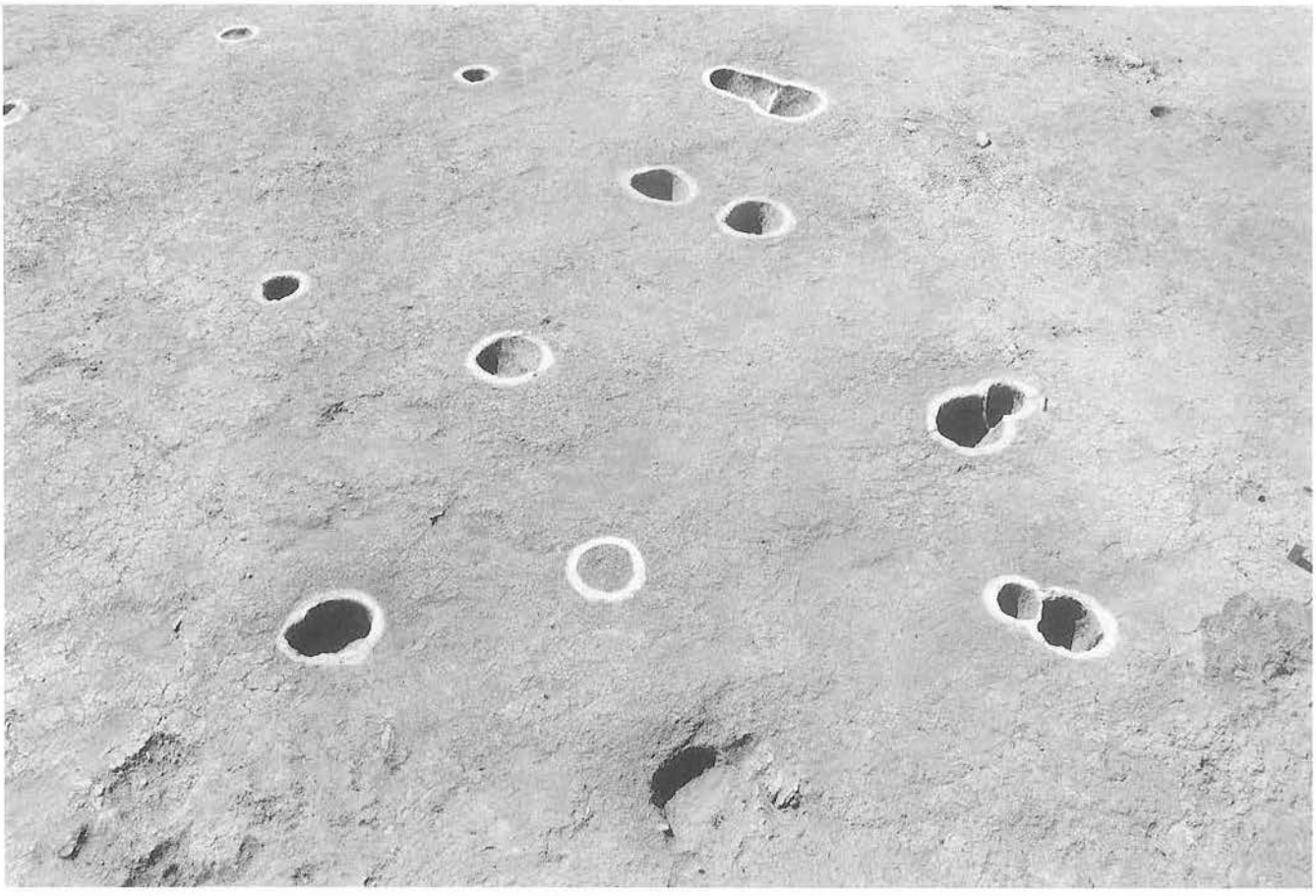
a．S I －79住居跡　　（南から）

b．S I －79住居跡　　（南西から）

住 居 跡 2



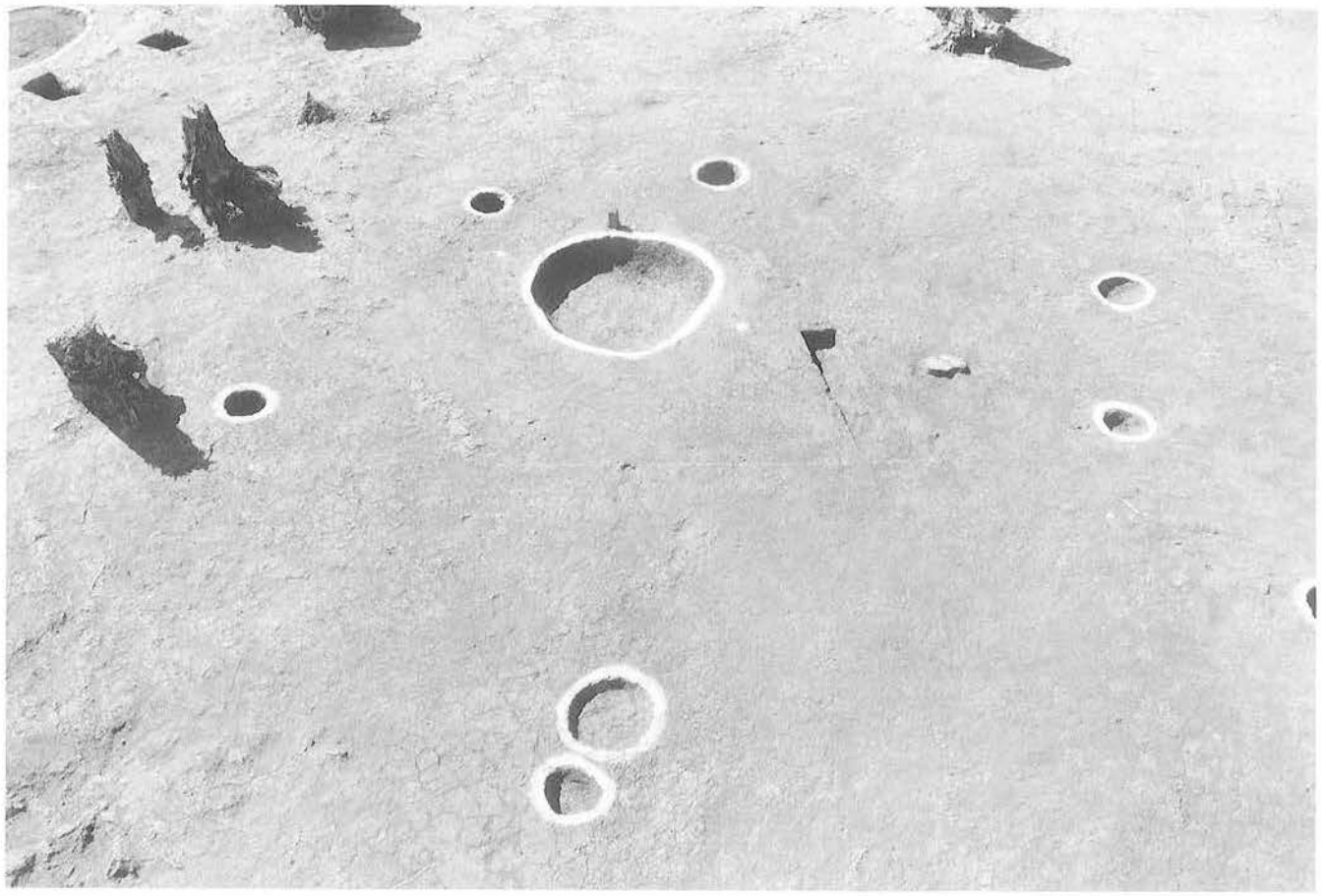
a．ＳＩ－98・99住居跡周辺　（南東から）



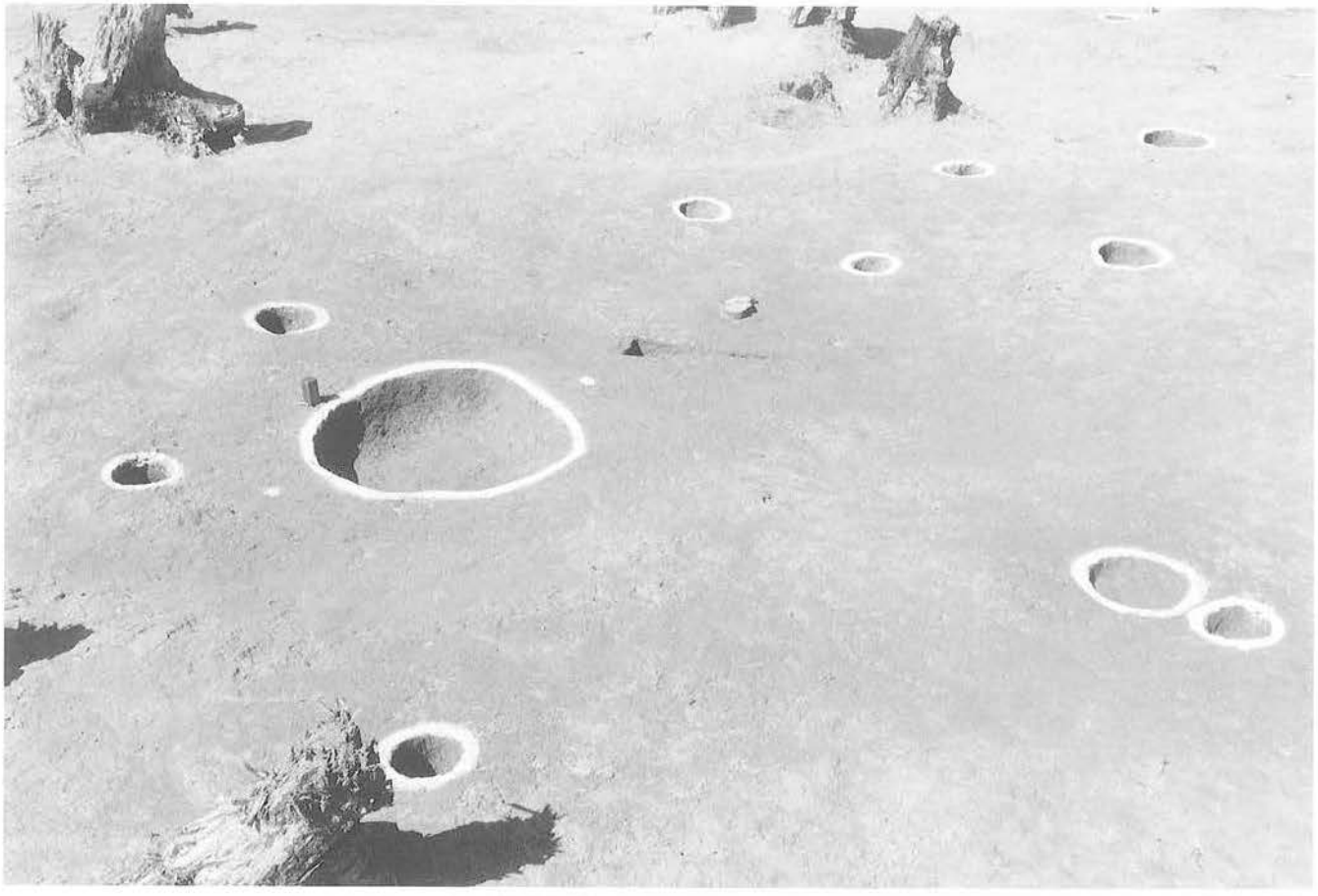
b．ＳＩ－98・99住居跡　（南東から）

図版26

住 居 跡 3



a．S I －107住居跡　　（南東から）



b．S I －107住居跡　　（南から）

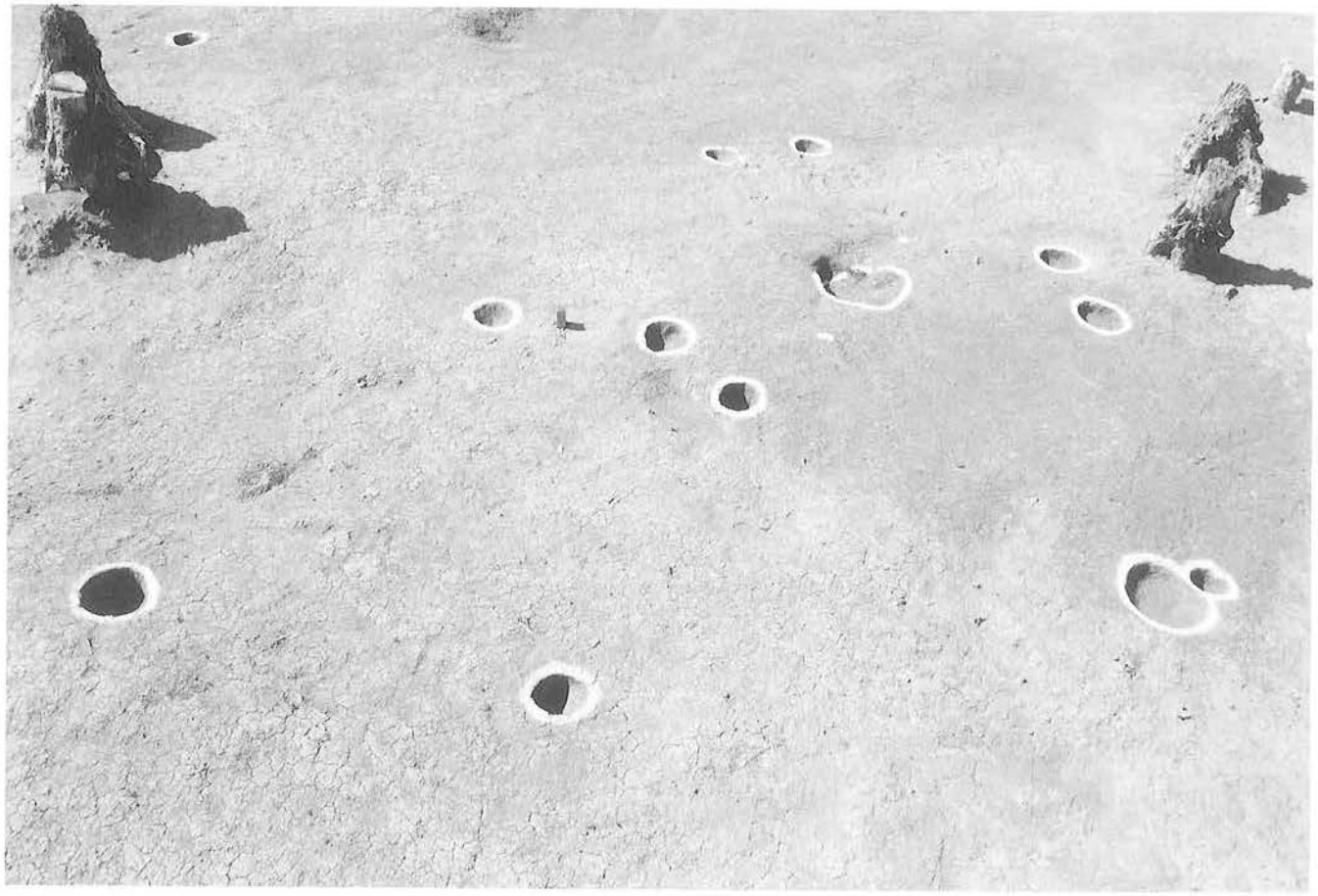
住 居 跡 4

a．S I －108住居跡　　（南東から）

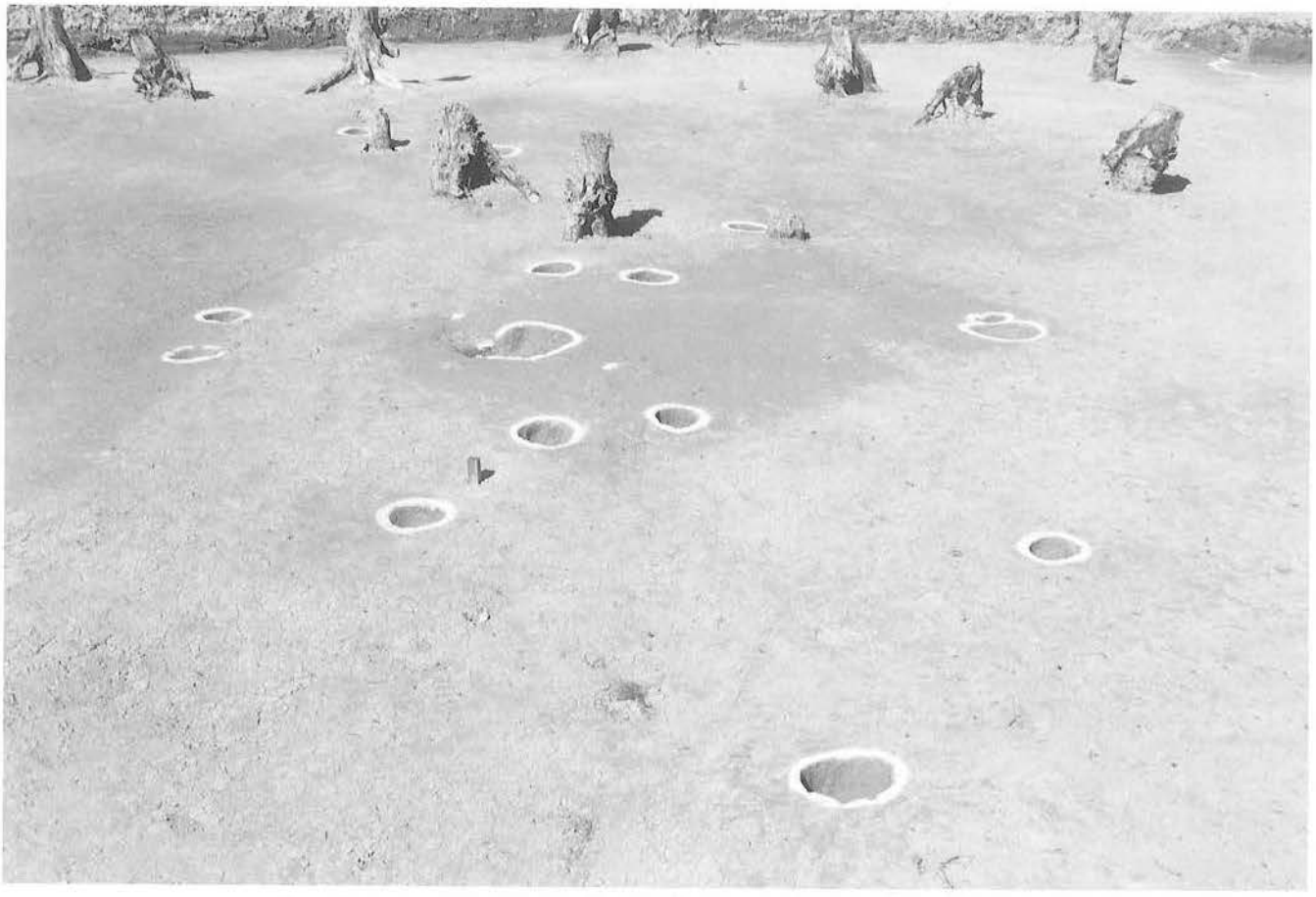
b．S I －108住居跡　　（西から）

図版28

住 居 跡 5



a．S I －126・161住居跡　（南から）



b．S I －126・161住居跡　（南西から）

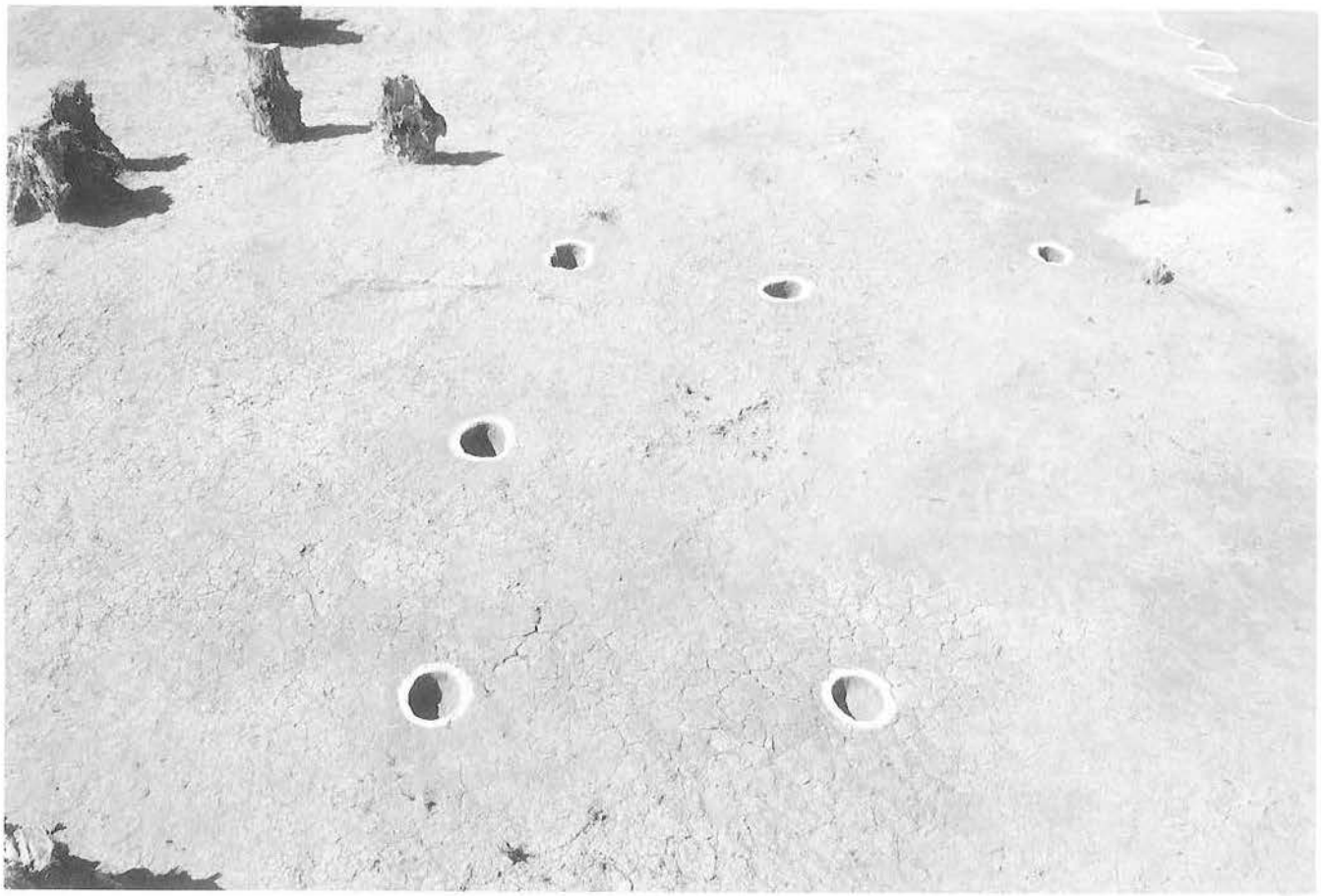
住 居 跡 6

a．S I －141住居跡　　（南東から）

b．S I －141住居跡　　（南西から）

図版30

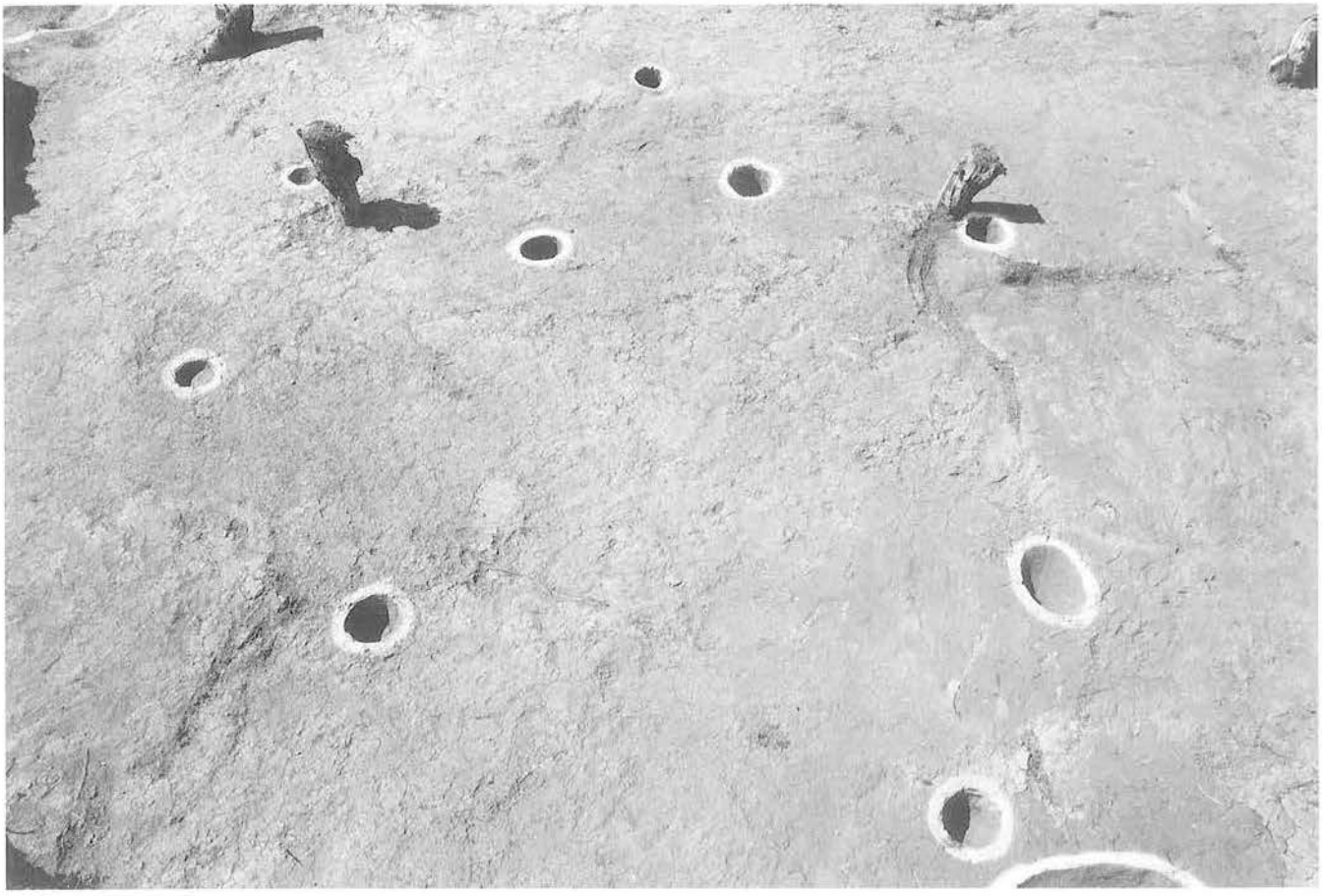
住 居 跡 7



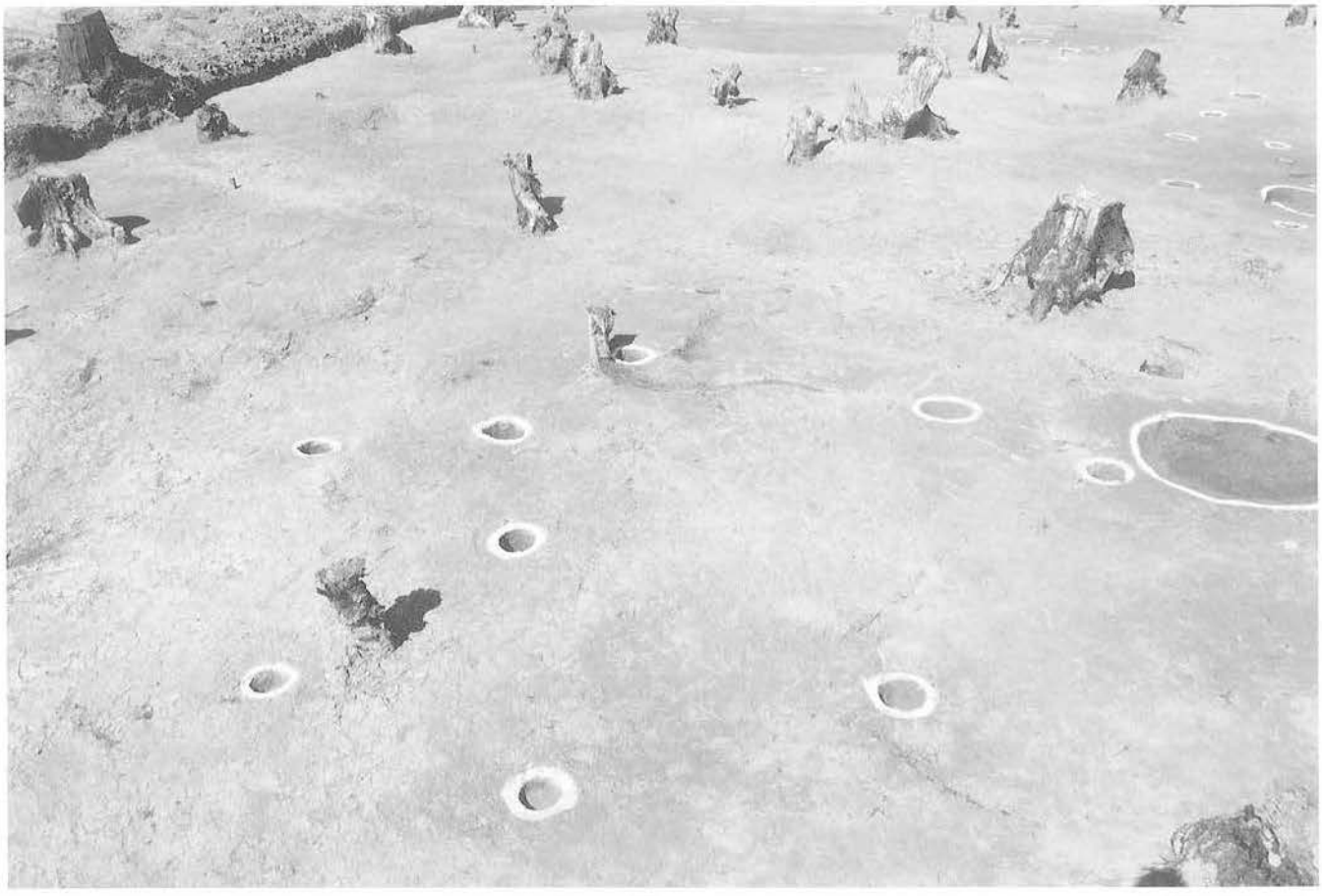
a．ＳＩ－142住居跡　（南から）

b．ＳＩ－142住居跡　（西から）

住 居 跡 8



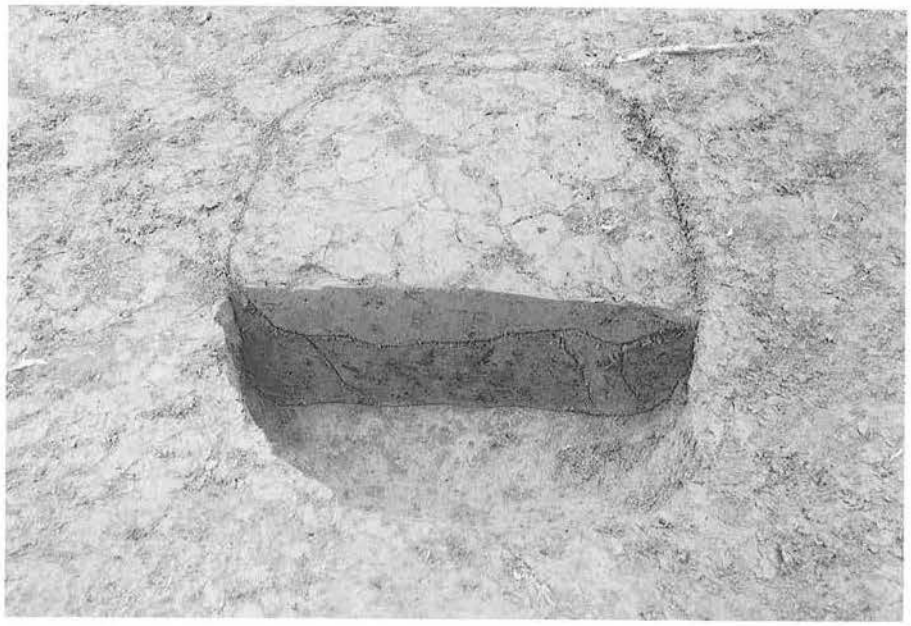
a．ＳＩ－159a・b住居跡　（南東から）



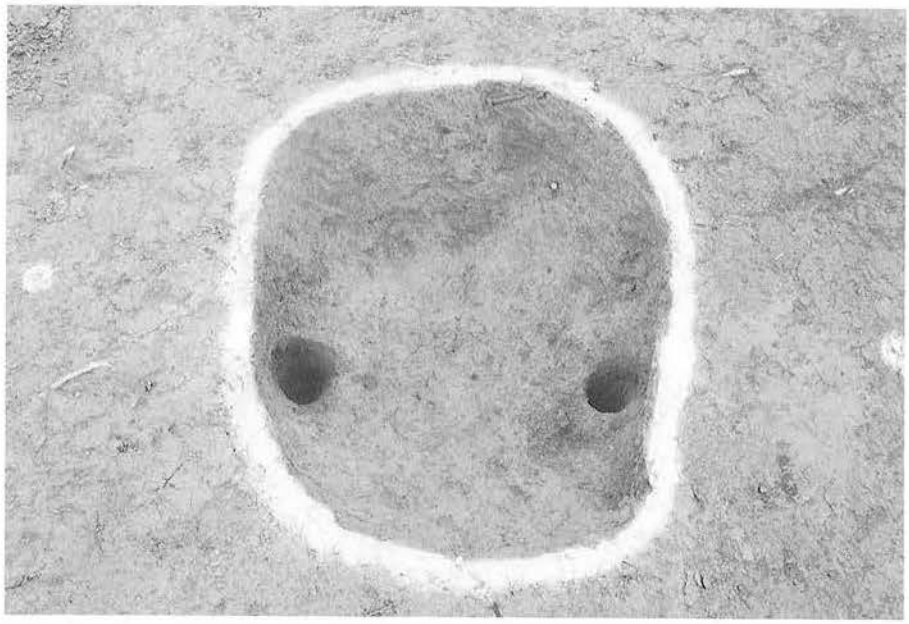
b．ＳＩ－159a・b住居跡　（南西から）

図版32

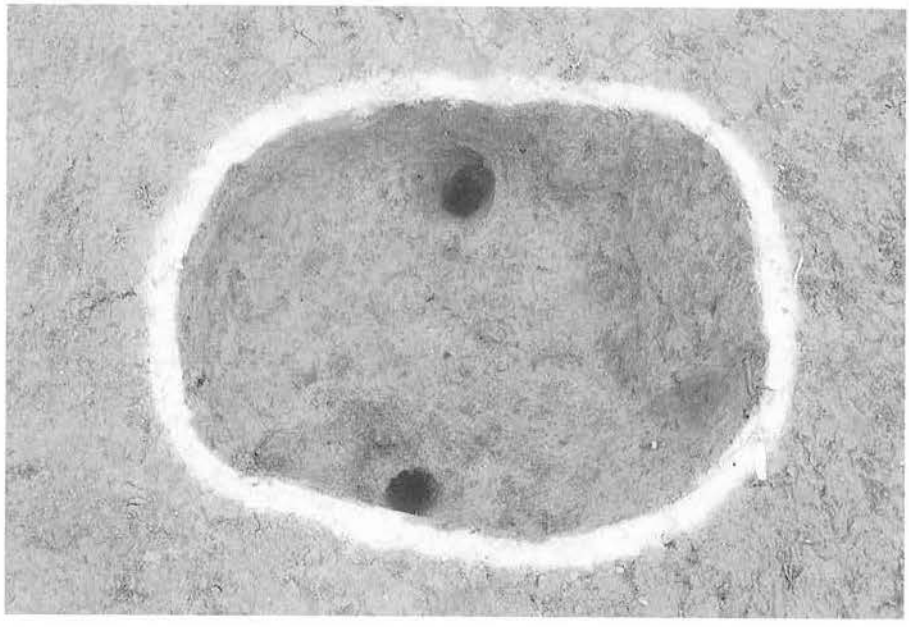
土　　坑　1



a. 覆土土層断面　　（東から）



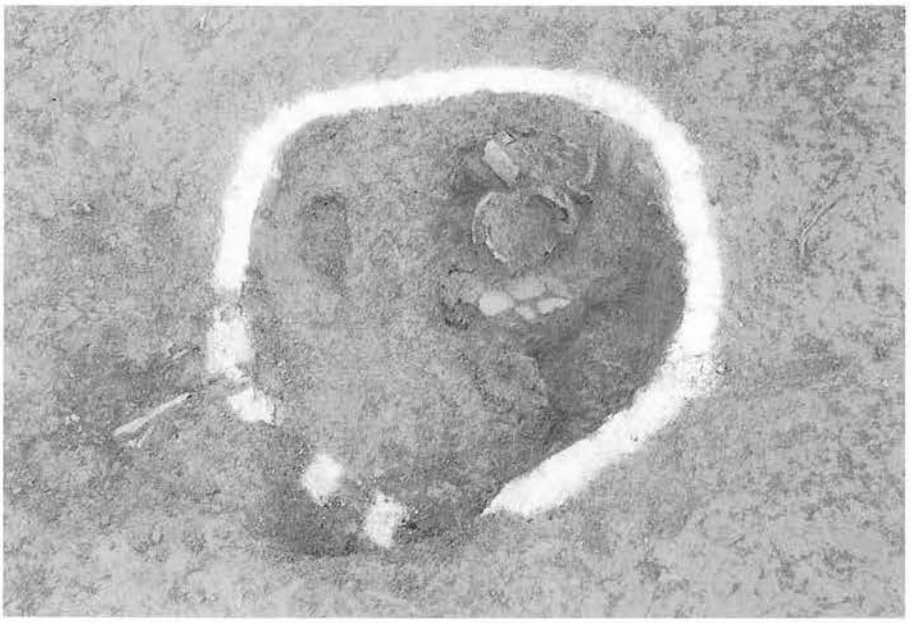
b. 完　掘　　（東から）



c. 完　堀　　（北から）

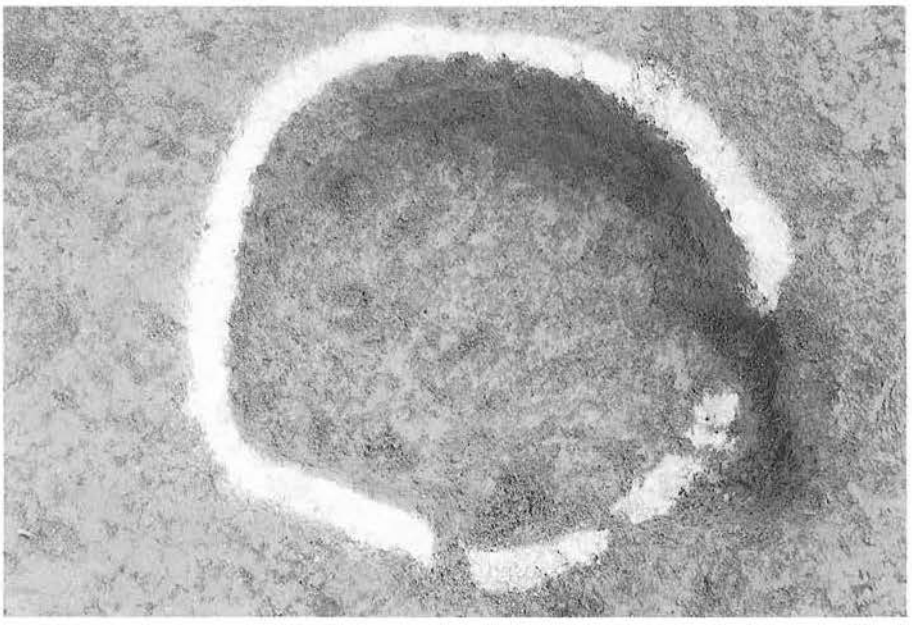
ＳＫ－140 土坑

土　　坑　2



a. 土器出土状況　　（南東から）

b. 土器出土状況拡大（北西から）

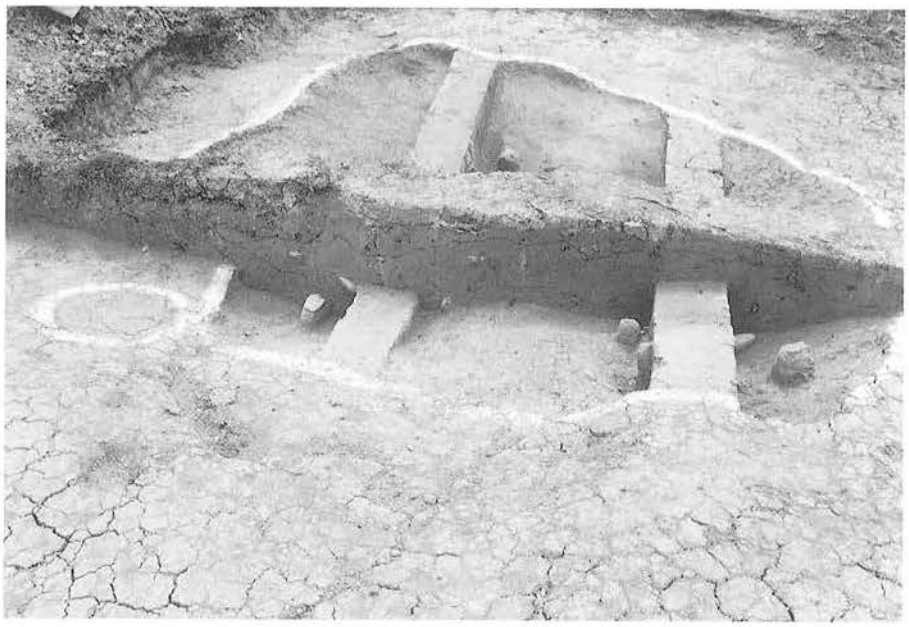


c. 完　堀　　（北西から）

ＳＫ－118 土坑

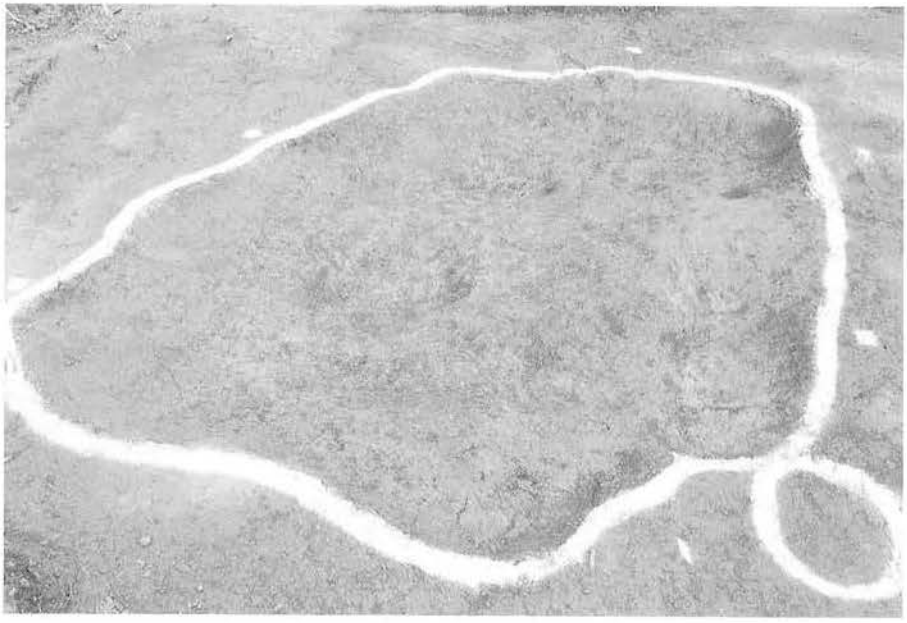
図版34

土　　坑　3



a. 覆土土層断面（A断面）
（北東から）

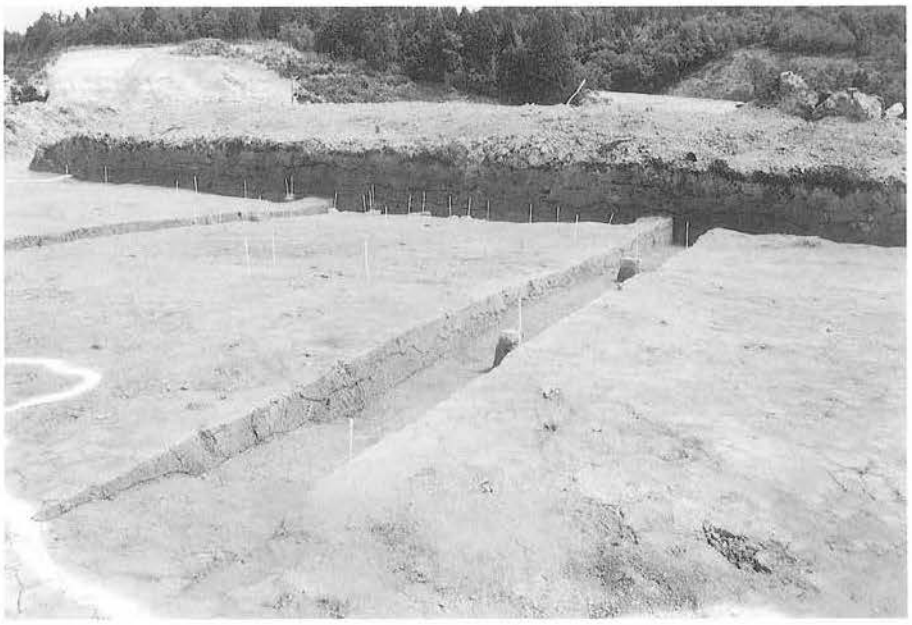
b. 遺物出土状況　（南東から）



c. 完　堀　（南東から）

ＳＫ－56 土坑

廃　棄　場



a. 土層断面　（南から）

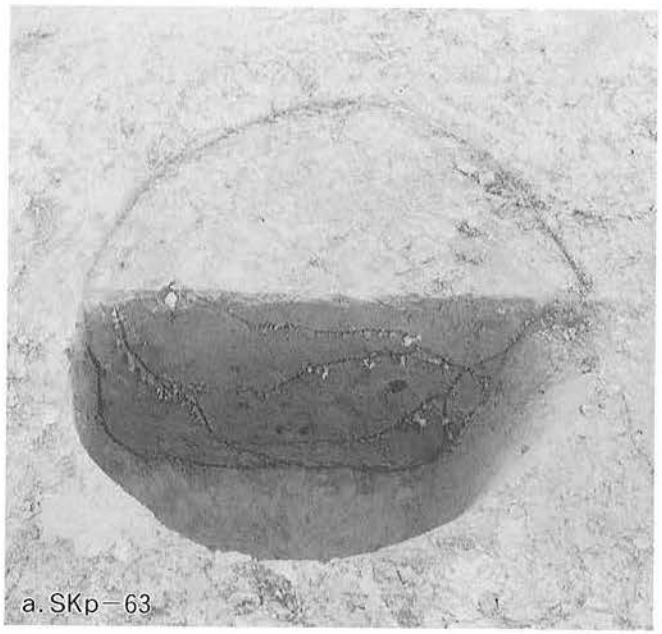
b. 遺物出土状況　（南西から）

c. 完堀状況と土層　（南から）

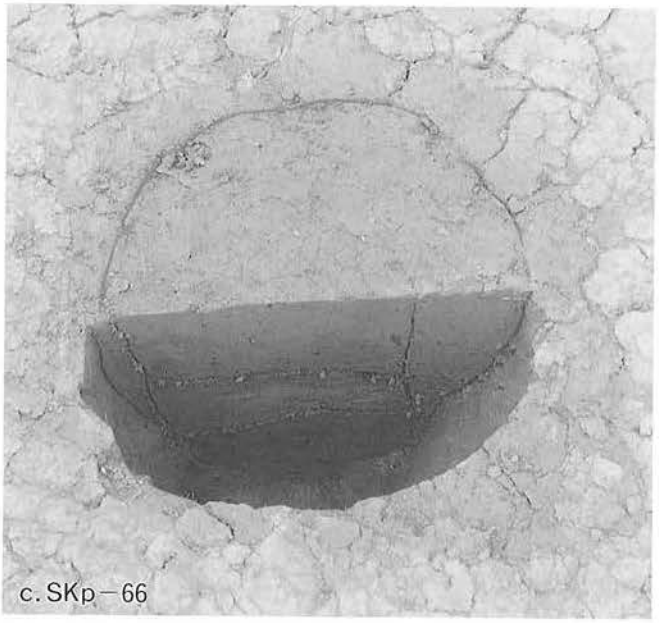
ＳＸ－57 廃棄場

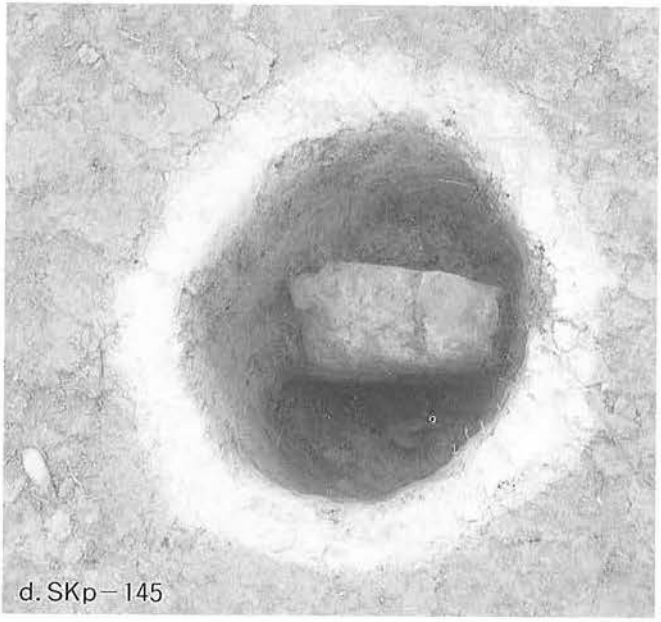
図版36

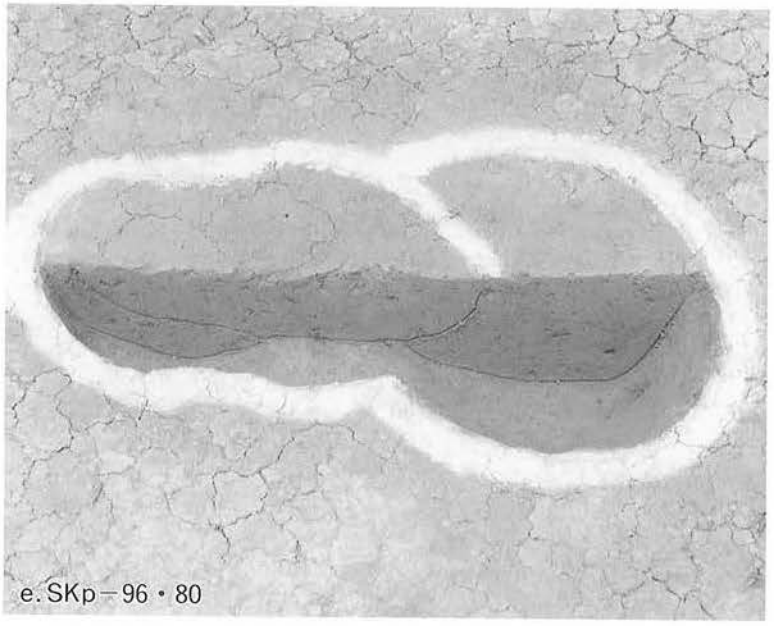
柱　穴（ピット）

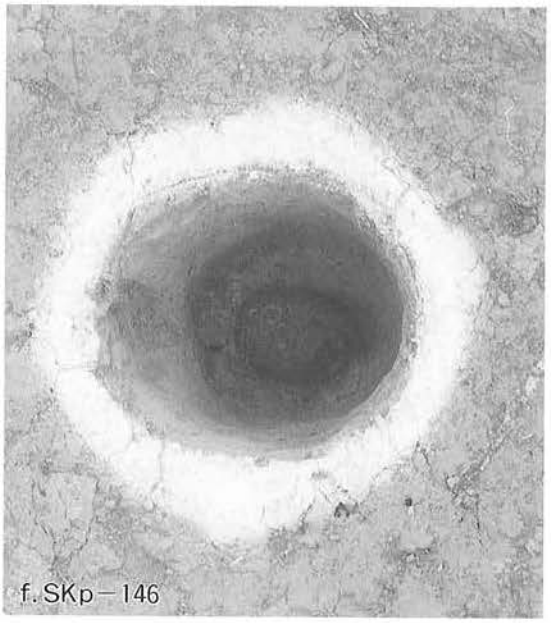

a. SKp－63

b. SKp－58


c. SKp－66


d. SKp－145

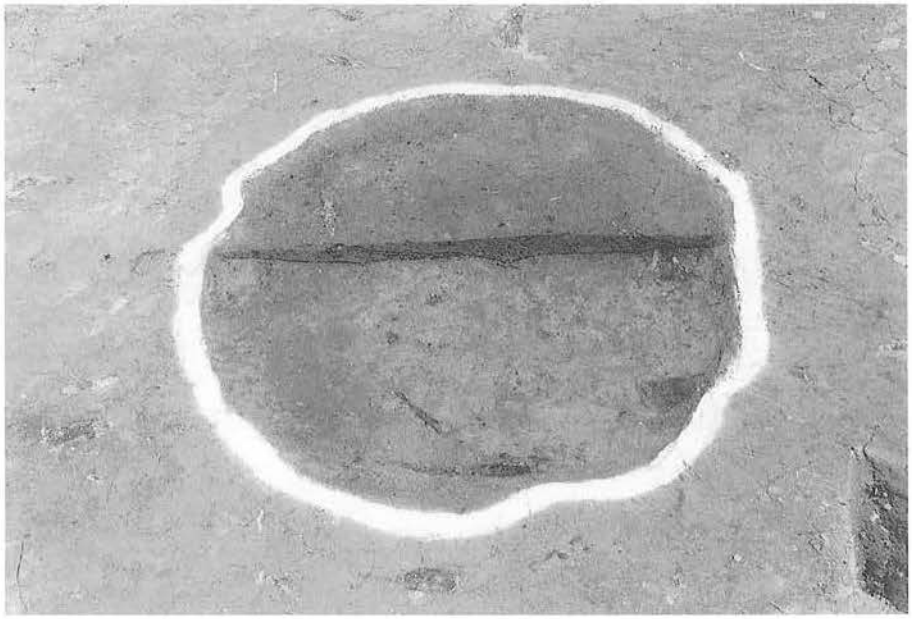

e. SKp－96・80


f. SKp－146

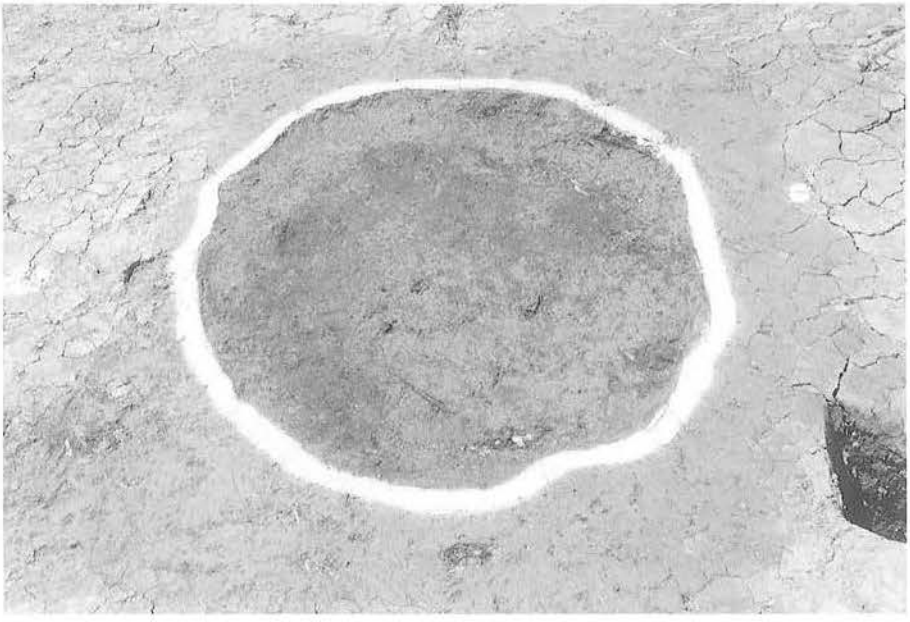
焼　土　坑　1

a. プラン確認状況　（北東から）

b. 土層断面　（南東から）



c. 完　堀　（南東から）

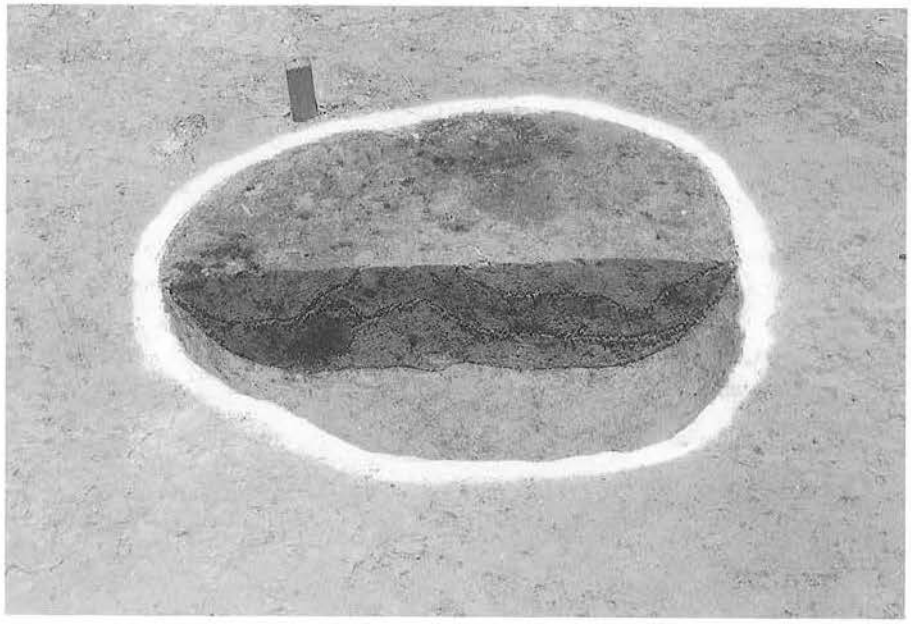


ＳＫ－51 焼土坑

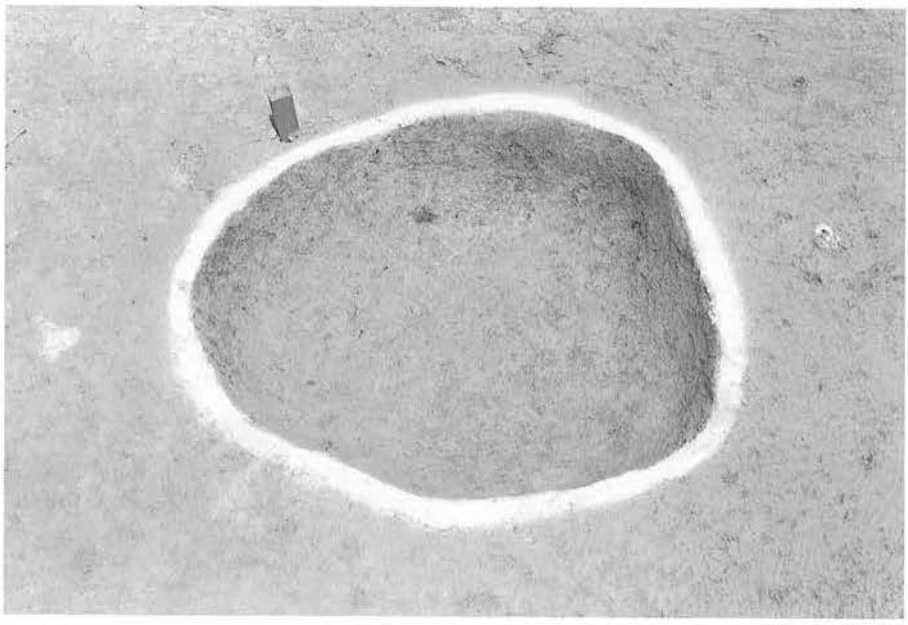
図版38

焼 土 坑 2

a. プラン確認状況　（北東から）



b. 土層断面　（南東から）

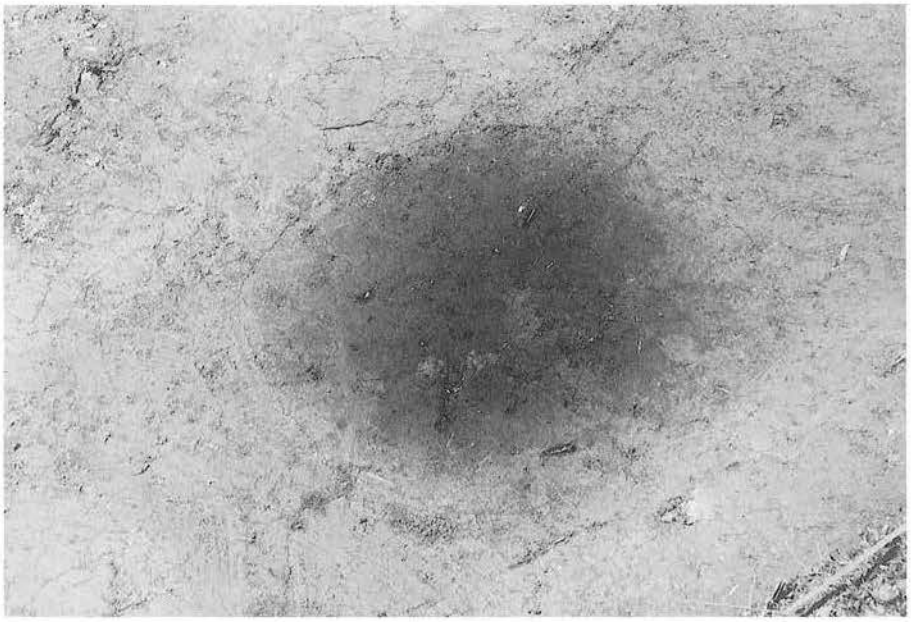


c. 完　堀　（南東から）

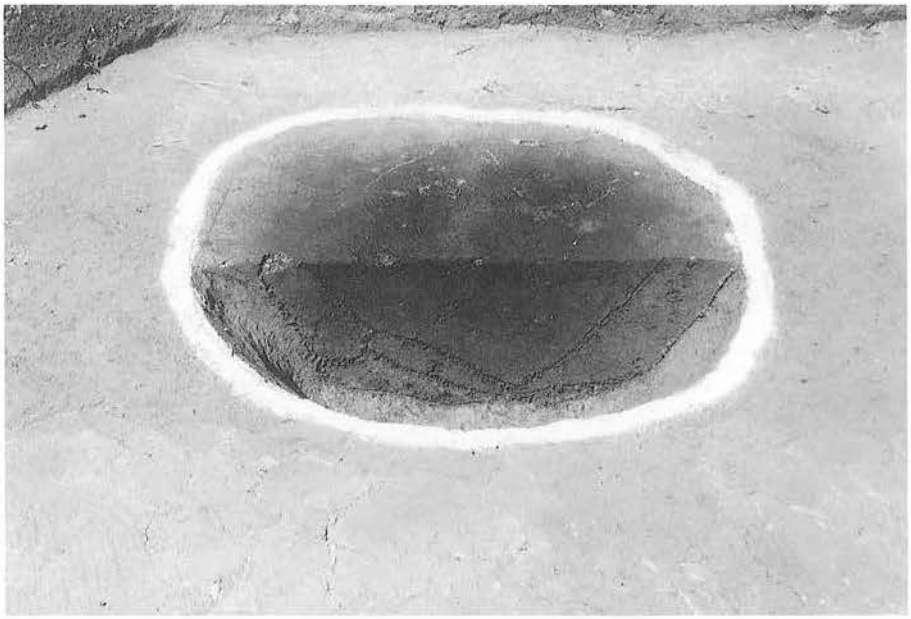
ＳＫ－52 焼土坑

焼　土　坑　3

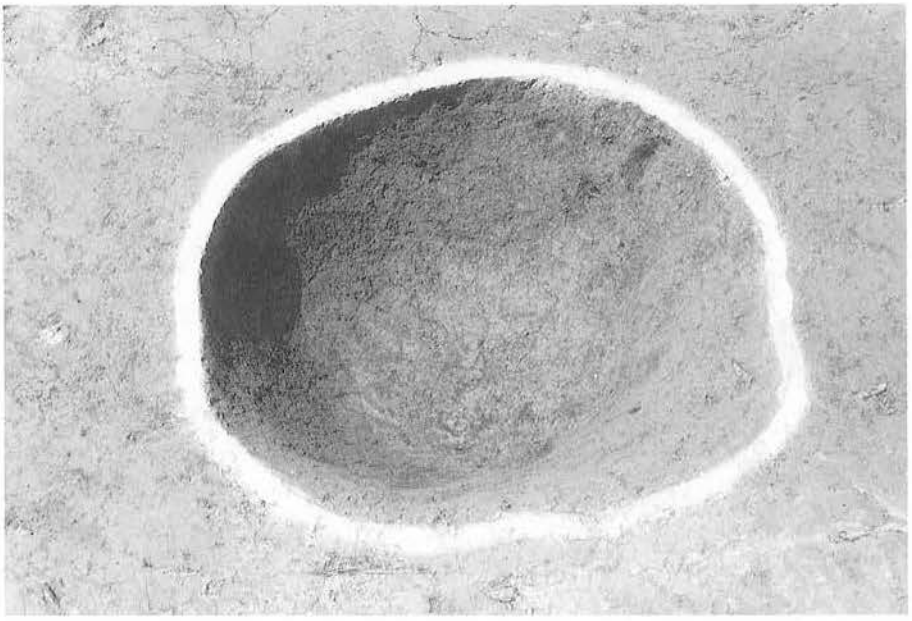
a. プラン確認状況　（北東から）



b. 土層断面　（南から）



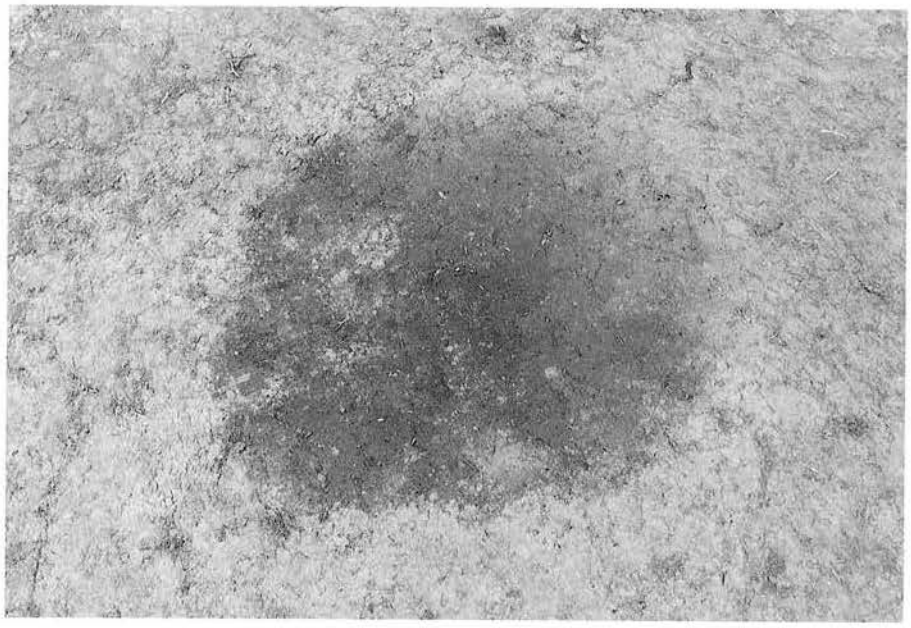
c. 完　堀　（南西から）



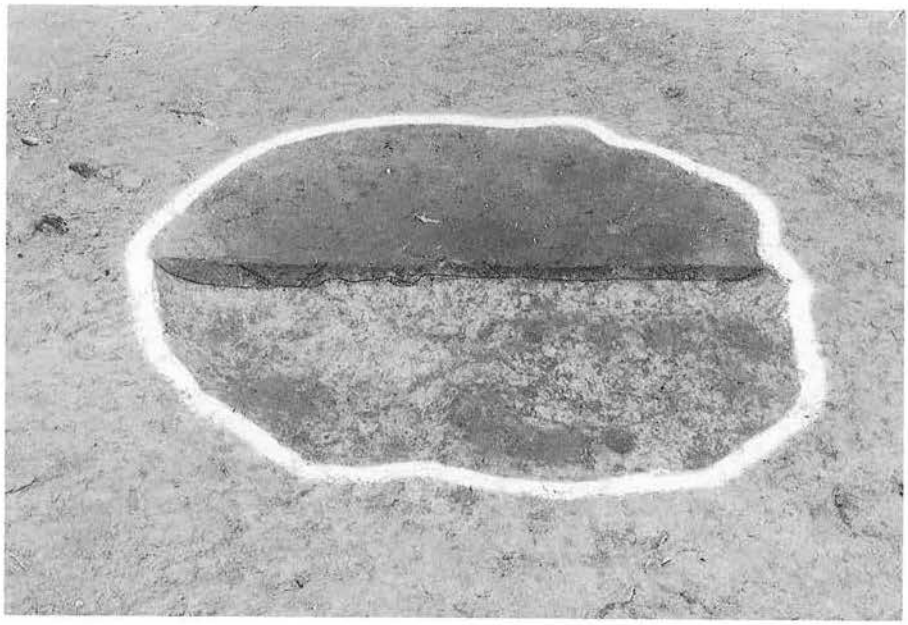
ＳＫ－53 焼土坑

図版40

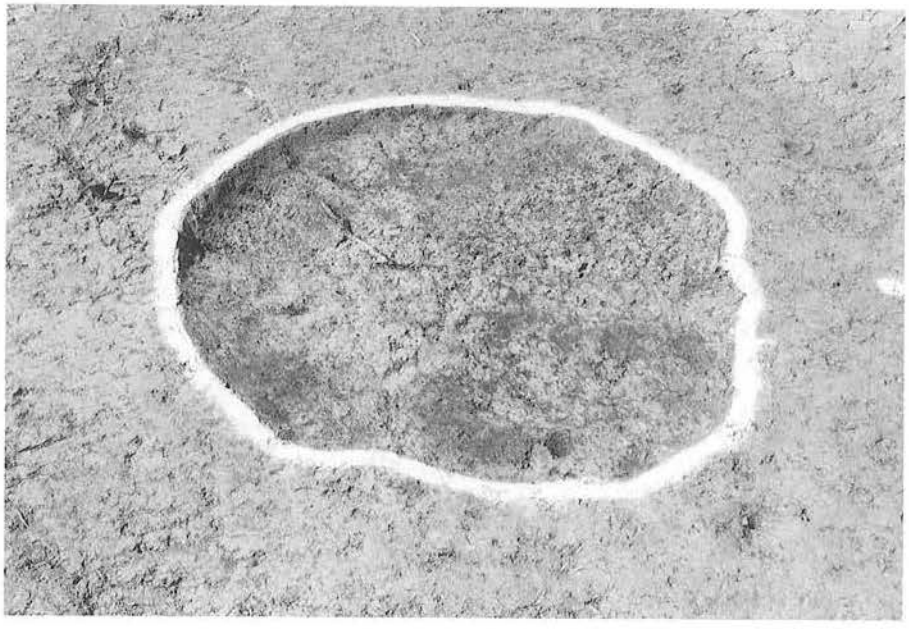
焼 土 坑 4



a. プラン確認状況　　（東から）



b. 土層断面　　（南東から）

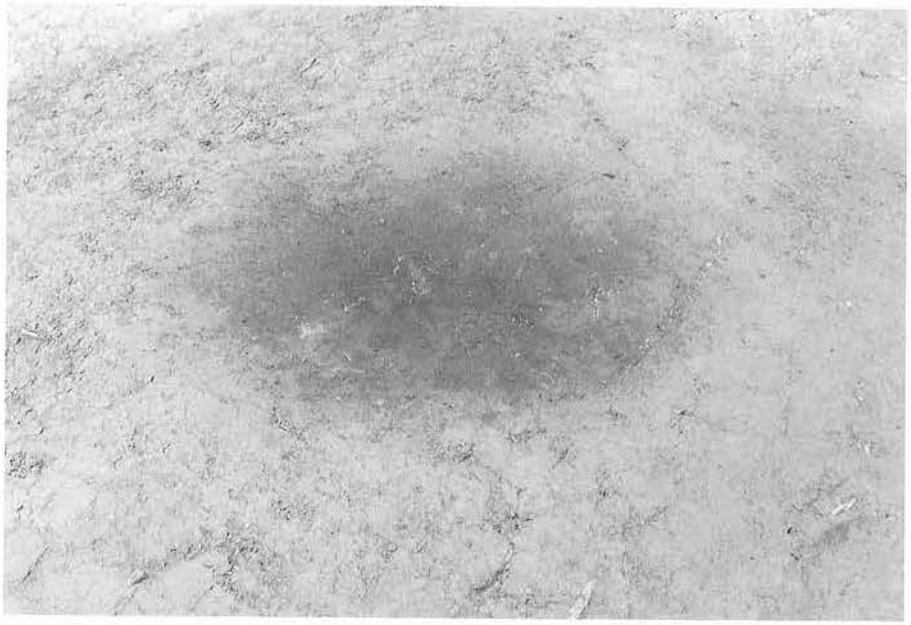


c. 完　堀　　（南東から）

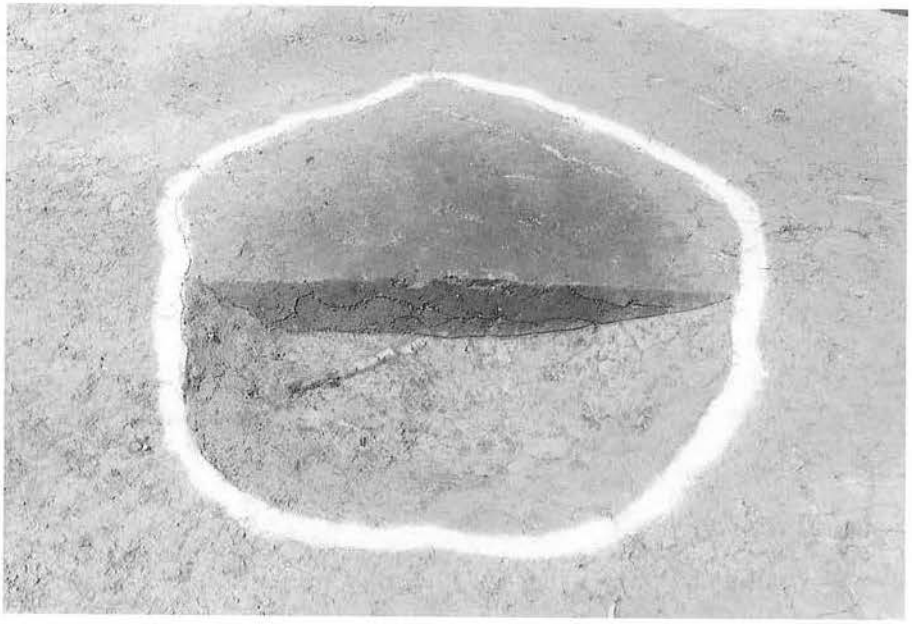
S K －54 焼土坑

焼　土　坑　5

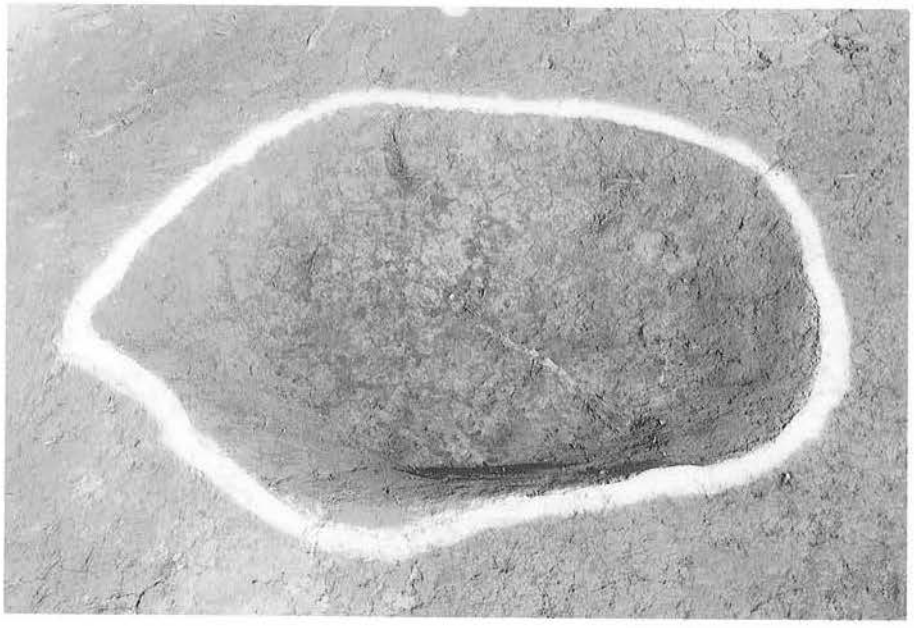
a. プラン確認状況　（東から）



b. 土層断面　（南から）



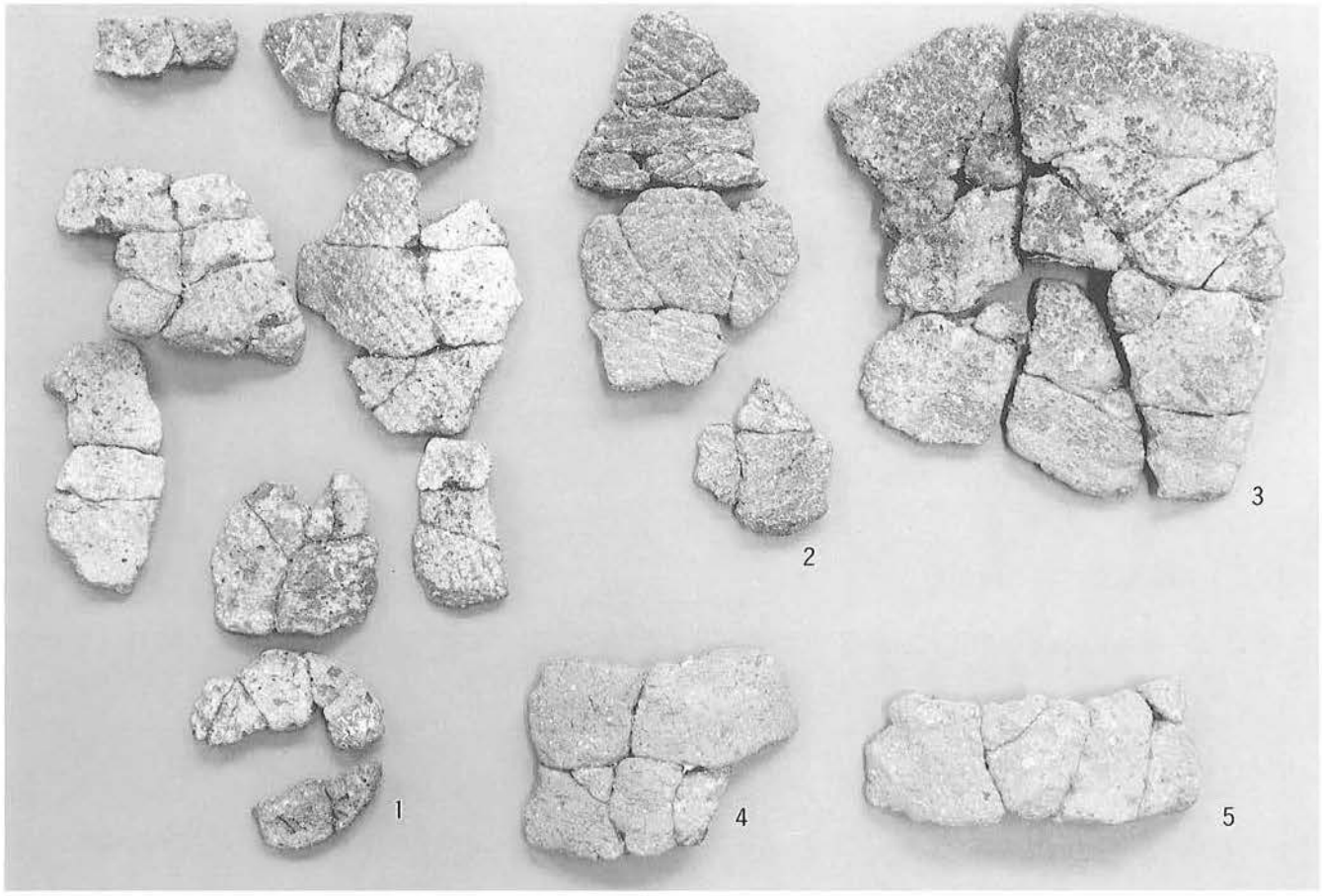
c. 完　堀　（西から）



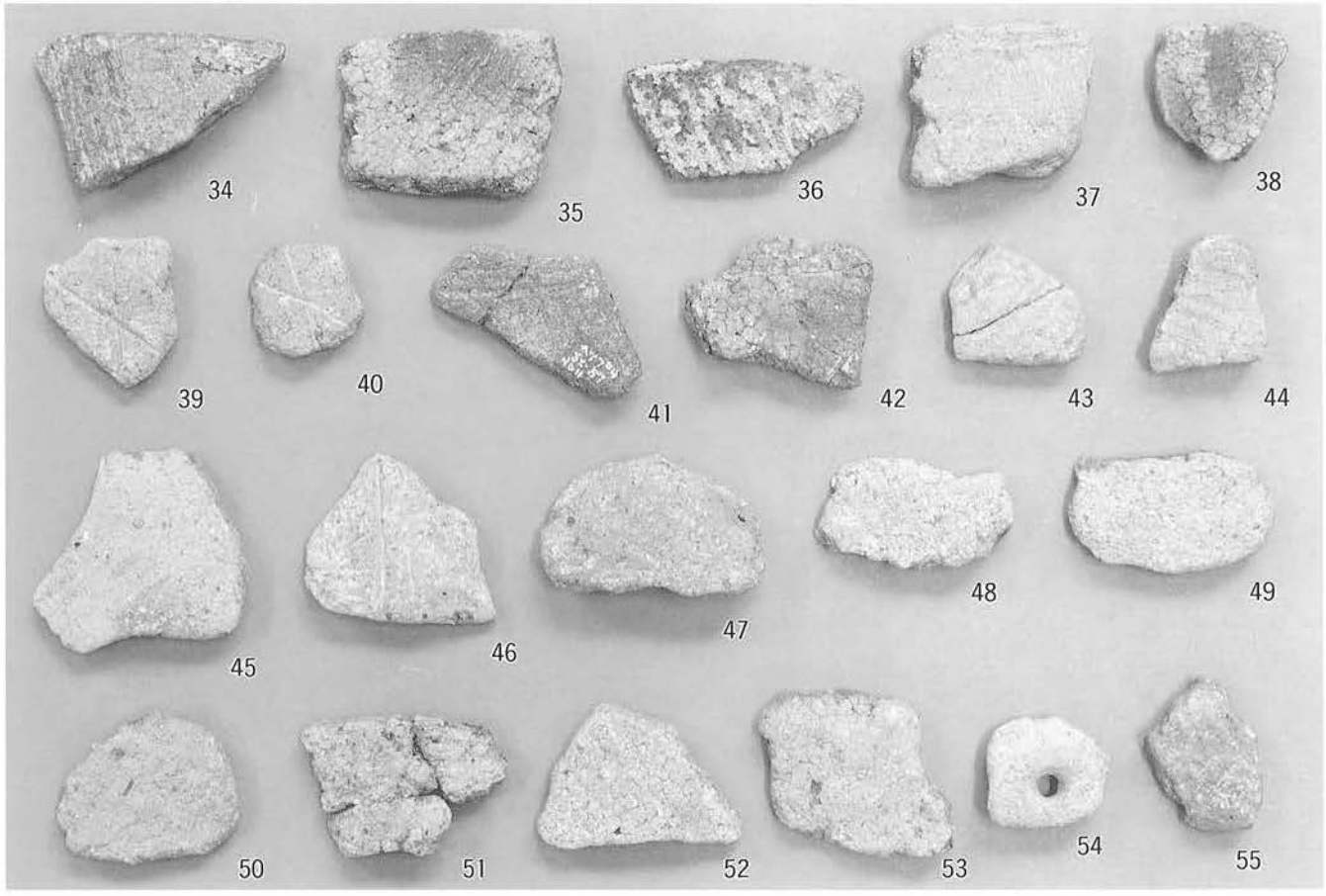
ＳＫ－55 焼土坑

図版42

出 土 遺 物 1

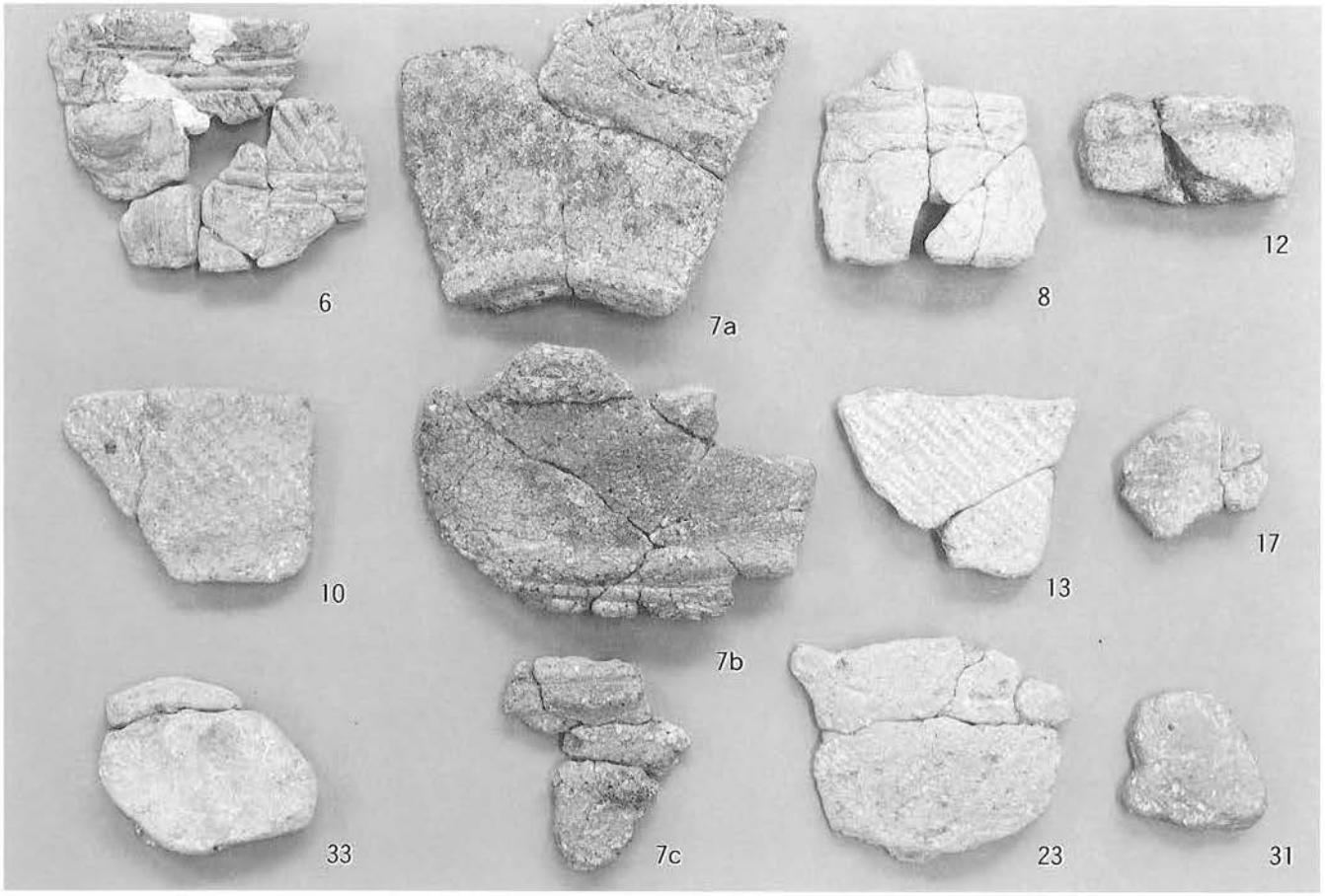


a. 縄 文 土 器 （ S K － 118 ）

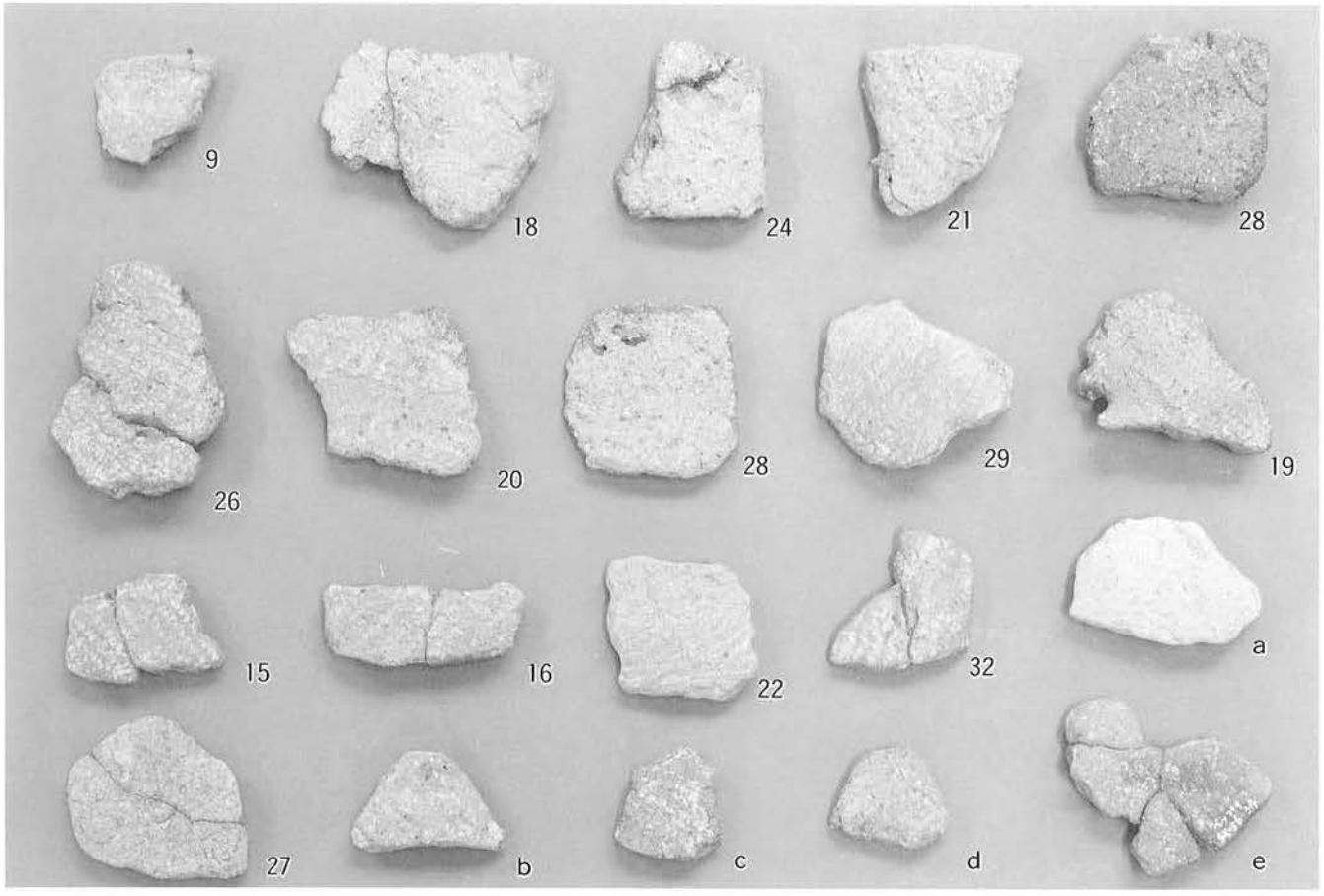


b. 縄 文 土 器 （ S X － 57 ）

出 土 遺 物 2



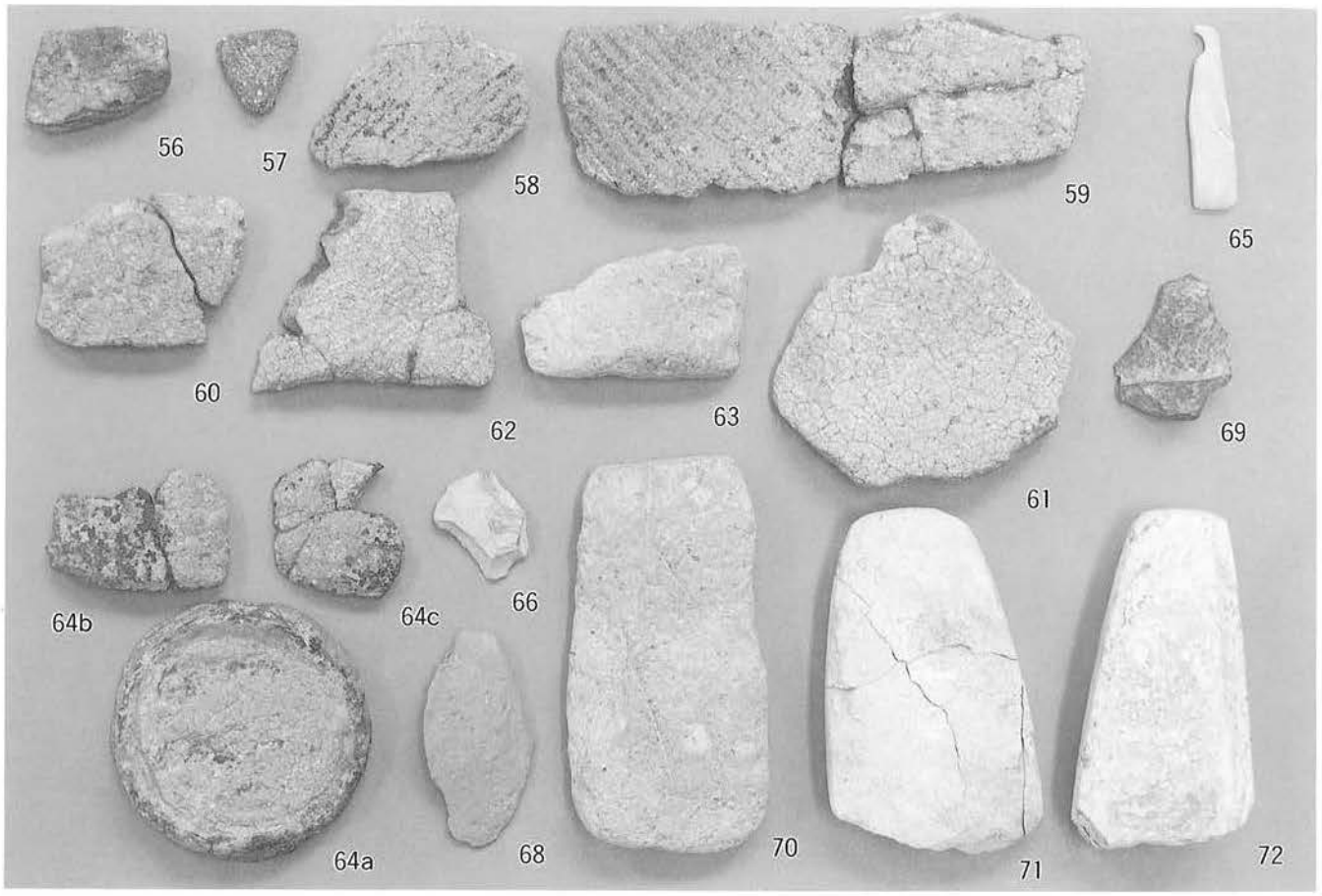
a. 縄文土器（SK－56）



b. 縄文土器（SK－56）

図版44

出 土 遺 物 3



a. 縄文土器・石器類

b. 発掘調査オールスタッフ（背景：八石山）　（北西から）

報告書抄録

ふりがな	へふりさか
書　　名	屁振坂
副 書 名	柏崎市向陽町・屁振坂遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第23集
編著者名	品田高志・中野　純
編集機関	柏崎市教育委員会　社会教育課　遺跡調査室
発 行 者	柏崎市教育委員会
所 在 地	〒945　新潟県柏崎市中央町5－50　ＴＥＬ．0257－21－2364
発行年月日	西暦　1996年３月29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
屁振坂遺跡（へふりさかいせき）	新潟県柏崎市（にいがたけんかしわざきし） 向陽町（こうようちょう）	15205	675	37度 20分 54秒	138度 34分 82秒	19950718～ 19950809	1092	宅地造成に伴う 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
屁振坂遺跡	集落跡	縄文時代前期後半 ～中期前葉 中世～近世	ピット・土坑 廃棄場 焼土坑	縄文土器・石器	

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第23集

屁　振　坂

— 柏崎市向陽町・屁振坂遺跡発掘調査報告書 —

平成８年３月28日　印　刷
平成８年３月29日　発　行

発　行　　柏崎市教育委員会
新潟県柏崎市中央町５－50

印　刷　　株式会社　柏崎インサツ